

愛知学院大学

教養部紀要

第63巻 第3号

論文

清水 義和：馬場駿吉の「身体論」と寺山修司のマリオネット『狂人教育』…………… (1)

資料

川口 高風：「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について…………… (102)

川口 高風：明治期以降曹洞宗人物誌(八)…………… (50)

研究業績 (2015年1月～12月)…………… (103)

第63巻総目次…………… (115)

2016

愛知学院大学教養部

馬場駿吉の「身体論」と 寺山修司のマリオネット『狂人教育』

清水 義和

01. まえおき

馬場駿吉氏は、『加納光於とともに』所収の「密封された詩集の命運—《アララットの船あるいは空の蜜》をめぐって」¹⁾の中で、加納氏のオブジェ《アララットの船あるいは空の蜜》を医者 of 観た芸術論として論じ、微に入り細に入り《アララットの船あるいは空の蜜》を展開している。馬場氏はこのオブジェを専門の医学的な側面から、レオナルド・ダ・ヴィンチ以来の解剖学と現代アートを解読する方法としてハイブリットな芸術論の見地から詳細に「身体論」を論じている。

馬場氏の身体論は、殊に医学解剖の視点から分析して荒川修作、寺山修司、四谷シモン氏のオブジェを解読することに関心があった。

なかでも、寺山修司のドラマに、原型としてオリジナルを求めると、そのルーツは、寺山の初期の人形劇『狂人教育』にある。マリオネットには、奇怪な森羅万象が付き纏う。寺山が設立した劇団「天井棧敷」には、奇人、怪女が集まった。実は、寺山のドラマには、マリオネットとリンクした世界がある。

寺山のドラマは、「プレイヤーが“汗”をかかない劇であり、唐十郎氏のドラマはプレイヤーが“汗”をかくドラマである」といわれる。寺山のドラマは、プレイヤーが中心のステージではなくて、プレイヤーはステージ空間の一部であるというコンセプトから構成されている。従って、プレイヤーは、ステージのデザインやライトやサウンドやドレスと同等の価値である。ちょうど、人形劇でマリオネットが占めるロールプレイのようである。だから、マリオネットに着想がある寺山のドラマでは、プレイヤーは、マリオネットと同じように、“汗”を

かかない。

カレル・チャペック (Capek, Karel) は、チェコのごレム伝説からドラマ『ロボット』(R.U.R) を書いた。ところで、寺山が、畸形ものに対する強い関心は、人間の身体が、身体と死体を表すボディ (英語で言う body) の二つに意味がある。そして、人形が、息をしない死体なのに、ゼンマイや電池やリモコンで動き、しかも、生きた人間よりも、有能な仕事を成し遂げ、それに、不滅の芸術作品であることに関心を懐いた。

マリオネットとフィルムには共通点が幾つかある。つまり、フィルムは、カット、アングル、モンタージュの文法で制作され、狭いスクリーンに、無限の宇宙からマイクロの世界まで自在に映し出す。しかし、リアリズム・ドラマのステージでは、等身大の人間が狭いスペースに2時間近くも拘束される。ところが、マリオネットは、伸縮自在で、フィルムのスクリーンのように、ステージを無限の空間に変えてしまう。

寺山が、何故、人間ではなくて、マリオネットに関心を懐いたのか。その理由は、恐らく、寺山が不治の病ネフローゼに侵されていたことと無関係ではない。寺山は、いつ死んでもおかしくないボディを抱えて、ドラマやフィルムを観にシアターにいき、上演中に、何時、身体が死体になるかもしれないという不安にかられた。だから、寺山がいう「隣の席にいるのは死体が座っている」というフレーズは、こけおどしでもなんでもなく、寺山の実感であった。そして、寺山が、マリオネットと出会ったとき、人間が「不完全な死体として生まれ、何十年かかって完全な死体となる」のに、人形は、死体でありながら、人形遣いやリモコンの操作によって、甦生する。だが、寺山は、気付いたのだ。つまり、寺山の身体は何時か死ぬが、寺山のパロールは、人形のように、他者の助けを借りて、発声され、甦生するのだ、と。

寺山にとって、寺山のパロールは、マリオネットと同じ機能を有している。寺山のエピグラフに「私の墓は、私のことばであれば、充分」があるが、マリオネットには人形遣いが必要であるように、寺山のパロールは、朗読者が必要なのである。寺山にとって、マリオネットとの出会いは、寺山自身のパロールとの出会いでもあった。つまり、寺山は、パロールが、彼のアイデンティティーであることに気がついたのである。

02. 寺山修司と人形劇の出会い

寺山修司は、人形劇団「ひとみ座」(1949年設立)の清水浩二氏が、演出したシュールな『マクベス』(1961年5月、渋谷の東横ホール)を観て衝撃を受けた。近年、「ひとみ座」の清水浩二氏は、ウェブサイトの後日談を披露した。

寺山修司氏は後日、劇団人形の家第六回目の公演パンフレットに、この「マクベス」演出を評して「見た目はまったく等身大のように見えながら、その内部の空間がまったく等身大を倒錯しているというところが、清水浩二の人形劇をはじめて見たときからの驚きだった。」と書いている。²⁾

この人形劇の『マクベス』を観て、寺山は、自身の人形劇『狂人教育』(1962年)を執筆する動機が生まれた。しかも、寺山は、マリオネットに対する関心が続き、後年『魔術音楽劇青ひげ公の城』(1979年)を書くことになる。そのステージでは、一連のマリオネットたちと共に、小山内薫が登場して人形を操る。そのドラマでは、小山内が、スタニスラフスキー(Stanislavski, Konstantin)やゴードン・クレイグ(Craig, Gordon)に傾倒した時代を表している。つまり、寺山の脳裏には、『狂人教育』上演前後から、スタニスラフスキーとゴードン・クレイグのドラマツルギーが付き纏っていたようだ。

寺山 演劇の中で「世界」を設定する場合、装置としての機械、道具としての機械、登場人物としての機械と、いろんなレベルの機械が作用することになる。俳優は、感情を持つ者としてそれらの機械を支配するのではなく、作者の書いた観念の伝達媒体として機能しているだけです。しかしスタニスラフスキーは《俳優は人形でなくて人間である》と主張し、諸機械の上に、俳優という人格を据えようとした訳ですね。そして感情を持った悪しき機械が、演劇を内面化してしまった。それに対して例えば、ゴードン・クレイグは、俳優の一番完璧な形は人形であると主張した。彼はそれまで《人間の代用品としての人形》にすぎなかったものを、《それ自体が超俳優である人形》の演劇としてとらえ直した。つまり、「機械としての人間」を演劇のなかで、方法化したのは、ゴードン・クレイグあたりからではないか、と思うのです。³⁾

清水浩二氏は、ウェブサイトにて、寺山が人形劇『人魚姫』のインタビューの為に執筆した「特別寄稿」を掲載し、その中の「等身大世界の超え方」で、寺山ワールドの輪郭を表した。

ぼくらは舞台の上に、等身大の人間が現実を複製復元化するというにもうあきあきしてしまっている。人間のスケールを超えた、等身大ではない世界、それが本当の現実なんだけれども、人間はいつのまにかすべてこの世は等身大だと思いこむようになってきていて、そういうものに対して一つの疑問符をさしはさむことが、最近の人形劇に顕著にあらわれてきている。【“人形の家” 第一回公演『人魚姫』(寺山修司作 清水浩二演出 1967

年)「ヤファー」2006.9.16】

寺山は、この当時、「ひとみ座」の人形劇に興味を懐いたらしく、清水浩二氏が新しい人形劇を始めるのにシナリオライターとして協力した。

1966年の初夏、高山英男氏などの提言や支援により私は再び人形劇団設立を決意した。そして私は旗揚げ公演に『人魚姫』を企画し、寺山修司に台本執筆を依頼した。(無論、この企画案には高山氏も賛成であった。)【『人魚姫』と寺山を振り返って一劇団人形の家のこと、寺山版『人魚姫』の演出ポイント―「ヤファー」2006.9.24】

寺山は、後年、『身毒丸』や『邪宗門』などでステージに人形や黒子を現わした。これは、寺山と清水浩二氏が人形劇をプロデュースした時のコラボレーションによる賜物であるかもしれない。当時、清水浩二氏は『説教浄瑠璃集』を寺山にプレゼントしている。『説教浄瑠璃集』所収の「しんとく丸」は、恐らく、寺山の『身毒丸』創作に繋がっていったと思われる。

寺山への本のプレゼントと言えば、この『人魚姫』童話以前にもシュールリアリズム最大の先駆的作品のアルフレッド・ジャリの『超男性』(佐藤朔訳)をプレゼントし、『人魚姫』以後では、東洋文庫の『説教浄瑠璃集』(「さんせう太夫」「しんとく丸」など、収録されている)をプレゼントしている。【『人魚姫』と寺山を振り返って一劇団人形の家のこと、寺山版『人魚姫』の演出ポイント―「ヤファー」2006.9.24】

後年、寺山が『中国の不思議な役人』(1977年)で描いた中国の役人は、人形のように、身体がバラバラになる。このドラマは、「新劇」のリアリズムに慣れた視点で見ると、異様に思われるが、人形劇では、ごく当たり前のムーブメントなのである。

麦 バラバラだ、中国の役人が、バラバラになっちまった……。⁴⁾

人形劇『狂人教育』は、家族ゲームのパターンで見ると、『ガリガリ博士の犯罪』や『身毒丸』と、「家族」というフレームでリンクしている。また、『狂人教育』は、『毛皮のマリー』や『レミング』と共通した密室劇として見ると、双方のドラマスペースがリンクしていることに気が付く。つまり、人形劇『狂人教育』は、寺山のドラマ全体の核を成し、種子となっているのである。

寺山は、「ひとみ座」が、上演した人形劇『マクベス』（1961年、上演）の暗殺シーンから、ベルリオーズ（Berlioz, Hector）の『幻想交響曲』（*Symphonies Fantastique*）のギロチンと類似したイメージを得たようだ。つまり、このシーンは、『狂人教育』の中第十五シーンの首切りで、蘭が、いわば、「交響曲」の指揮者となり、全楽団員に処刑されるイメージとダブる。

萩原朔美氏は、「寺山さんのドラマや映画の中の《母子関係》は、結局、皆、同じパターンで出来ているのではないだろうか」と指摘する。つまり、寺山のドラマに共通したテーマ《母子関係》を描いた映画やドラマを見ていくと、観客は「確かに、寺山は、幼児の頃の〈母子〉体験を何度も語っているのだが、真実は幾つもあるはずはなく、結局、《母子関係》をパターン化して描いているのであって、ひょっとしたら、寺山の幼児体験というのは、“うそ”ではないだろうか」という不信に陥る。というのは、寺山は、同じテーマを繰り返すので、否が応でも、感情移入が出来なくなり、次第に、観客は、冷めた眼で理性的に、寺山が描く《母子関係》を、ちょうど、人形浄瑠璃を見る時のように、パターン化して見るからである。

寺山は、『狂人教育』の終わりで、家族の人形が、「うそつきだって！」⁵⁾だとか、「虚妄なのは……虚妄なのは！……」（168）と言った後に、舞台をバラしてしまう。この手法は、一種の異化である。

清水浩二氏は、寺山に影響を与えた人形劇『マクベス』に仕掛けたコンセプトを独自に示している。

その場合、登場人形を「モノ」として扱いながら、その人物の動きを表現する新しい演技の方向が望ましいことはいうまでもない。そしてこれは、今回の人形のマスクが古典的仮面をモチーフとしていることと同様に「嘘らしい本当」を生命とする人形劇の本来あるべき姿だと考えているのである。【清水浩二「思い出のキャラ図鑑「第13回『マクベス』」（「ヤフー」2006.9.24）】

寺山は、人形劇体験で、俳優を、完璧な芸術作品として見る事に、あまり、信用を置かなくなったようだ。何故なら、俳優は、生身の人間である以上、芸術作品としての人形のように、永遠に、高水準のレベルを保つことは出来ない。ある意味で、俳優の対極にあるのは人形である。だが、人形は人間ではない。だから、人形が演じている人間の世界は“うそ”でもあるのだ。

人形劇『狂人教育』は、人形と人間との虚実を露にしている。人形は芸術作品である。反面、人間は、常に、芸術作品として、人形と同じレベルを保つことを要求されるのである。寺山は、このコンセプトを、ゴードン・クレイグの「超人形」に求めていくことになる。

03. 人形劇『マクベス』

寺山は、青森高校生のとき、中村草田男の『マクベス』論と出会った。「マクベスは眠りを殺した。もう、マクベスに眠りはない」(Sleep no more: Macbeth does murder sleep)⁶⁾のフレーズに拘り、寺山は、草田男の『マクベス』論批評を、『生徒会誌』に書いた。以後も、寺山は、マクベスに拘り続け、やがて、人形劇『マクベス』に出会ったと思われる。

マクベスを演じる俳優の肉声が、ほんの一瞬たりとも表出するわけではないのだ。なぜなら、従来の演劇観のなかにあっては、俳優は「台詞の奴隷」であるにすぎず呪術の蟬人形が口を利いて見せたにすぎなかったからである。⁷⁾

寺山は、マクベスのパロールはシェイクスピアのものであって、プレイヤーのパロールではないと断っている。明らかに、ここで、寺山は人間と人形の間を語っているのだ。

『マクベス』の冒頭で、魔女たちは二枚舌を弄する。マクベスは、無意識ではあるが、魔女に翻弄され、次第に、魔女の二枚舌に騙されていく。

ALL Fair is foul, and foul is fair, (103)

マクベスは、魔女の“うそ”に惑わされ、ダンカン、バンコォーを、次々と暗殺していく。だが、やがて、マクベスは、魔女の“うそ”に気がつく。

MACBETH ... I pull in resolution and begin
To doubt th'equivocation of the fiend (230)

黒澤明は、フィルム『蜘蛛の巣城』で、『マクベス』を翻案している。三船敏郎が演じた鷲津武時は、マクベスに相当するが、蜘蛛の糸で絡めとられていく。宇波彰氏は、ジル・ドゥルーズ (Deleuze, Gilles) の『カフカ』所収の「付録・カフカの表現機械」の中で、フランツ・カフカをクモと捉えて、蜘蛛と人間の間を論じる。

カフカの手紙も表現機械の一部であるが、それをクモの巣として把握するということは、敷衍すればカフカがクモであり、手紙がクモの巣であって、このクモの巣にかかるものをシーニュとして感知し、そこへカフカ＝クモが走っていくように考えるということである。⁸⁾

また、訳者の宇波彰氏は、ジル・ドゥルーズの『プルーストとシーニュ』〔増補版〕の中で、カフカとプルーストの類似性を「クモ」というキーワードを使って指摘する。

クモはただその巣のはしのところにおいて、強度を持った波動のかたちで彼の身体に伝わって来る最も小さな振動をも受けとめ、その振動を感じて必要な場所へと飛ぶように急ぐ。⁹⁾

寺山は、1962年、清水浩二氏が演出した人形劇『マクベス』に感激したとき、マクベスが、ドゥルーズが考案した「クモ」の糸によって、操られ、殺害されるに至るコンセプトを既に見てとっていたかもしれない。というのは、寺山の場合、人形は、クモの“糸”によって操られるからである。例えば、寺山は、『邪宗門』の終幕で、山太郎を“糸”によって操られる人形に作ったが、『邪宗門』と『狂人教育』の人形遣いの“糸”に、ドゥルーズが考案した“クモの巣”を想起すべきである。

従来の代用品としての人形を超える——ぼくが最初に「マクベス」（演出・清水浩二、人形、片岡昌）をみてびっくりしたそんな印象は、形を変えてずっと引きつづいて生きている。【清水浩二「思い出のキャラ図鑑」「ヤファー」2006.9.12】

寺山の人形劇『狂人教育』は、清水浩二氏の人形劇とのコラボレーションを通じて創作された。まず、寺山は、1962年2月、青山の草月ホールで『俊英三詩人の書下しによる人形劇』の6ステージ公演にシナリオライターとして参加した。三詩人のうち、岩田宏氏が『脳味噌』、谷川俊太郎氏が『モマン・グランギニョレスク』、そして、寺山修司は『狂人教育』を執筆した。清水氏は回顧して、寺山に会ったのは、渋谷の「さくら」という喫茶店で、1961年の秋で、当時、寺山は25才であったという。

私はその時、寺山さんから歌集「血と麦」をプレゼントされると共に私も彼に、山村祐著「ヨーロッパの人形劇」という本をプレゼントした。そして「寺山さん、人形劇の台本書いて頂けませんか？どんな物でもいいですから……」と依頼した。そして出来てきたのが『狂人教育』である。彼の説では、「現代ではフィクションはもう限界。事實は小説より奇なり」です。演劇だって、いくら役者が頑張っても、実生活のニセもの以上を出られない。だから、いっそもうひとつ抽象化してしまって人間を語った方がいいわけです。」と言う。【清水浩二「思い出のキャラ図鑑」第13回『俊英三詩人の書下しによる人形劇』に関った人たち「ヤファー」2006.9.12】

寺山のドラマにある呪術的要素は、土方巽の暗黒舞踏に負っている。殊に、寺山は、人形固有に備わる呪術的要素から影響を受けた。人形劇は、ヨーロッパの中世演劇で盛んに上演されたが、寺山のドラマにもしばしば垣間見られる、寺山の中世劇的なドラマコンセプトには、古い伝統を持つ人形劇からの影響があったかもしれない。

04. ゴードン・クレイグの「超人形」

寺山修司は、ゴードン・クレイグのように、人形と人間との関係を考え続けた。寺山は、『演劇論集』の中で俳優と人形の関係を、クレイグの解釈を通して論じている。

ゴードン・クレイグは「俳優が人形を追放し、それに代わったときから、演劇の衰退がはじまったのだ」と書いている。(236)

寺山がゴードン・クレイグに関心を懐いたのは、人形劇『狂人教育』の上演を通してであったと思われる。寺山のドラマツルギーは、ゴードン・クレイグが考案した「超人形」とリンクしている。クレイグが主張する「ムーブメント」は、人形とライトとサウンドと舞台装置が一体化している。寺山のドラマコンセプトは、俳優中心ではなく、「ムーブメント」に近い。

The actor must go, and in his place comes the inanimate figure—the über-marionette we may call him, until he has won for himself a better name.¹⁰⁾

また、岸田真氏は「ゴードン・クレイグ Gordon Craig」(「ヤフー」2006年9月24日)の中で、クレイグの「超人形」をディコードして、俳優たちは人真似してはいけないと言う。

『俳優と超人形』のなかでクレイグは、「今日、俳優たちは人真似をしたり解釈をしている。明日には表現して解釈すべきである。明後日には創造しなければならない」のであり、「本当らしく話すことをやめよ、身振りの自然さも捨てよ」と記し、与えられた役柄を表面的に模倣することで満足している俳優たちを批判している。そして「演劇芸術を回復させるためには、演劇から役になりきるとか自然を再現するという考えを消し去るところから始めるべきなのである」と主張するにいたるのである。

或いは、ウェブサイトの「演劇ラボーASAHI ネット」所収の「舞台創造の構造」では、

ゴードン・クレイグの演劇について、俳優の対極にあるのは超人形だという。

築地小劇場の小山内薫が学んだゴードン・クレイグという演出家は、演劇には劇作家も俳優も必要ないと宣言しました。クレイグが劇作家を必要ないといった背景には、演劇を文学化する傾向にある劇作家達への反動があるのですが、俳優を必要ないといった真意は完璧に演出の指示通り繰り返し上演できる能力……まるでアンドロイドやロボットのように、人間を越えたスーパーマリオネット（超人形）が舞台上で演じるべきだという主張のものでした。【演劇ラボ—ASAHI ネット、ヤフー2015.12.30】

寺山の『狂人教育』の人形たちには、カレル・チャペックの『ロボット』との類似性が見られる。チャペックはドラマ『ロボット』の中の「ロボットという言葉の起源3」でロボットとゴーレムの関係を示している。

「R・U・R」（ロボット）は、実はゴーレムに現代の衣を着せたものなのです。私がこのことに気付いたのは、勿論この戯曲を書きあげてからです「何だ、これはゴーレムではないか」私はひとりごとを言いました。¹¹⁾

チャペックの考案したロボットは、ゴーレム（ゴーレム）のコンセプトに見る事が出来る。ゴーレムは、元々、土塊であった。

土塊（粘土）から人造人間ゴーレムを造った高德のラビ、レウでした。彼は、紙の切れ端に書いた秘密の言葉“シェーム”を、自分の造ったゴーレムの舌下に置き、命を吹き込んだのでした。¹²⁾

詩人の中井英夫氏は、寺山修司が亡くなったとき、寺山の肉体と死体の関係を、ゴーレムに比して述べている。

これまで寺山修司の短歌はあまり正面から論じられていない。……土に帰ったゴーレムがまだ息づかいを取めていないいまこそ、もっともその機運が熟したといえるであろう。¹³⁾

寺山は、『不思議図書館』のなかで、チャペックのロボットについて興味深いコンセプトを示している。¹⁴⁾

寺山が、死者を、生者と同等に考えたのは、ボルヘスの「不死の人」やゴレムやゾンビとリンクしているからである。つまり、寺山のコンセプトの根っこにあるのは、生命がない人形が動いて、呪術的な力を発揮する不可思議なところにある。殊に、『狂人教育』では、結末で、死んだ筈の蘭が、ヴォイスとなって再生する。この場合、ヴォイスは、生から死への連続性を否定するが、反対に、ヴォイスは、発話を持続する事によって、言葉を活性化させ、死から蘇って再生する。だが、元々死んでいる人形が、再び、死ぬはずもなく、また、生から死への連続性もないわけである。しかしながら、生者の側から見ると、“死んだ筈の人形”が呪術を弄して蘇ったように見えるのである。

05. ベルリオーズの『幻想交響曲』

寺山修司が、『狂人教育』のサウンド・エフェクトを考えた際に、ベルリオーズの『幻想交響曲』が脳裏に浮かんだのは、音楽を担当した山本直純のサジェッションがあったものと考えられる。

第四楽章：断頭台への行進「若い芸術家は夢の中で恋人を殺して死刑を宣告され、断頭台へ引かれていく。その行列に伴う行進曲は、ときに暗くて荒々しいかと思うと、今度は明るく陽気になったりする。激しい発作の後で、行進曲の歩みは陰気さを加え規則的になる。死の恐怖を打ち破る愛の回想ともいふべき“固定観念”が一瞬現れる。」しかし、ギロチンの刃は無情にも落とされ、首が落ち、血が飛び散ります。【ベルリオーズの『幻想交響曲』「ヤフー」2006.9.24】

ベルリオーズ作曲『幻想交響曲』固有のデモーニッシュな音楽は、人形劇のような、ある種硬質なオブジェに対して、イマジネーションを喚起するのに役立っている。しかし、ベルリオーズ作曲『幻想交響曲』のイメージを、想起するのは、家族の中の父親である。けれども、ベルリオーズ作曲『幻想交響曲』の結末で提示される曖昧なテーマは、『狂人教育』に登場する家族が、終幕で一つの醜悪な怪物に変身する箇所とリンクしている。

06. 小山内薫とゴードン・クレイグ

寺山修司は、『魔術音楽青ひげ公の城』の中で、ステージに、小山内薫を登場させ、批判している。

悪徳の演出家小山内薫、またの名を人形作りの親方コッペリウスの、もっとも得意とするところだが、人体模型のノラじゃ、ものも言わなきゃ、踊れもすまい。¹⁵⁾

寺山は、同ドラマで、小山内を、スタニスラフスキーと同一視している。小山内やスタニスラフスキーも、俳優を人形と見なさず、俳優術を指導した。そこで、寺山は、今度は、小山内が、人形に俳優術を教えるシーンを作り、人形に何も演出できないでいるシーンを作った。寺山が作った人形は、ゴードン・クレイグの「超人形」を想わせる。

寺山は、『寺山修司の戯曲』第4巻（思潮社、1979年）「解題」の中で、「ゴードン・クレイグ」に触れなかった。だが、三年後に出版した『寺山修司戯曲集』第1巻、初期一幕物篇、（劇書房、1982年）の「解題」で、「ゴードン・クレイグ」に関する一文を付け加えた。

俳優と人形とは、形をべつとすればその機能がよく似ている—とゴードン・クレイグも言っている¹⁶⁾

寺山は、小山内が、スタニスラフスキーとゴードン・クレイグに知悉していたことを、当時（1979–1982年）知っていたと思われる。しかし、寺山は、小山内が、ゴードン・クレイグよりもスタニスラフスキーに心酔していたと判断したようだ。つまり、岸田國士がリアリズム演劇と一線を画したのと違って、小山内は、スタニスラフスキーとゴードン・クレイグに心酔したが、結局、リアリズム演劇に加担していったと判断したのかも知れない。

07. ガルシーア・ロルカの『血の婚礼』

寺山修司は、人形劇『狂人教育』の冒頭に、何か特別な意味を込めてロルカの詩を引用している。

And watch over your dreams.¹⁷⁾

寺山は、ロルカのポエティック・ドラマ『血の婚礼』と同じように、ポエトリーとプローズのスタイルで多くのドラマを執筆した。

マユ お兄さん なんか勘ちがいしてるんじゃないのかしら
あたしたち 人形なのに

そして人間があたしたちの下にいて
あたしたちを操っていて
そう ゆめのなかでゆめの番しているときみたい (147)

夢の出来事を現実の出来事と同じように考えれば、夢のように漠然とした死と現実の生との境目も曖昧になってくる。また、寺山は、ロルカが詩の中で歌う死について、独特の解釈をしている。

ガルシア・ロルカは二度死んだ詩人であった。

一度目は、彼自身の詩の中で死に、二度目は、スペインの内乱で、フランコ軍に処刑されて死んだ。¹⁸⁾

寺山は、ロルカの詩に歌われた死を通して、生理的な死と、言葉の死とを別けていった。

死は、もしかしたら、一切の言語化の中にひそんでいるのかも知れないのだと私は思った。なぜなら、口に出して語られない限り、「そのものは、死んでいない」(17) ことになるのだからである。

寺山が考える死のテーマも、幾分か、ロルカに負っているようだ。というのは、ロルカの言葉は、寺山のエピグラムを解く鍵にもなっているからだ。

私は肝硬変で死ぬだろう。そのことだけは、はっきりしている。だが、だからと言って、墓は建てて欲しくない。私の墓は、私のことばであれば、充分。¹⁹⁾

寺山は、しばしば、デュシャン (Duchamp, Marcel) の墓碑銘「死ぬのはいつも他人ばかり」を引用した。というのは、寺山自身は、生身で、自分の死を確認する事が出来ないと考えたからだ。寺山は、絶えず、死を意識し、時間の流れのなかで、死を境目にした二つの世界、つまり、この世とあの世とを書き続けた。或いは、寺山は、死体と同じように、自らは動かない人形が、見る者には、何かを訴えているように見えるのは、それは、逆説的に、人形が、生と死の時間軸を超えた不死という存在であるからだと考えたからかもしれない。従って、書かれた文字も発すれば、死んだ文字が息を吹き返すのと同じように、人形を“もの”と考えた場合、人形は、人形師が操れば、生理的な生と死を超越した“生と死”を表現することが出来る。つ

まり、寺山は、ロルカの言葉の中に、人形と似た“死”を見出し、自分の人形劇に使ったのだ。

08. 寺山修司の人形劇『狂人教育』

寺山修司は、『狂人教育』は、ファンタジーであって、リアリズム演劇ではないと、制作上のメモで述べている。

「子供たちが昆虫採集でカラスアゲハを針で留めるように、大人の道徳律を針で留めてしまふような」ファンタジーを失ってはならない。(141)

人形劇『狂人教育』の舞台裏で、コーラスは、冒頭から、「うそつき」を連呼してファンタジーの世界を構築する。

うそつきうそつきみんなうそつき (141)

寺山は、「制作上のメモ」で、「みんなうそつき」は、大人の道徳律に縛られている人は、「みなうそつき」であると記している。

人形劇『狂人教育』の結末近くで、小児麻痺の女の子の蘭は、警告を発して、集団が、個人を圧殺すると警告する。

蘭 みんなのうそつき（と、叫ぶ）

うそつき！（とうたうように）うそつき！みんなのうそつき！（167）

「うそとは何か」と、寺山は、ドラマを通して観客に考えさせる。そして、うその背後に隠れている迷宮の世界に誘い込む。

劇の冒頭で、「マッチ」(141)が灯される。すると、暗闇のステージにこの世が現われる。つまり、劇場の闇は死の世界を表している。ライトが照らし出す微かな明かりは、この世を照らし、生の誕生を表している。また、マッチで灯され点滅するステージは、蝶々がひらひらと舞う姿を象徴している。或いは、パラドキシカルに、実験映画『蝶複記』の中で蝶が舞うように、蝶が、画面を黒く遮るのは、明らかに、蝶の影は、不吉な死の世界を暗示しているからである。

第二シーンで、蘭の兄で虚無的な詩人の鷹司が、カラスアゲハを部屋に閉じ込めたという。

鷹司 蝶々を閉じ込めたんだ (142)

人形劇『狂人教育』では、先ず、悪い噂は、ドアのなかに監禁して、この世から葬り去らねばならないという約束事があるようだ。というのは、「蝶々」は「気違い」をシンボライズしているからである。「蝶々」が、部屋に閉じ込められたように、やがて、「気違い」という「噂」が、閉ざされた室内に家族たちを金縛りにする。

続いて、第九シーンで、鷹司が、聞こえるはずのないカラスアゲハの羽音を「聞こえる」という。

鷹司 きこえるぞ！

カラスアゲハの羽音だ (155)

カラスアゲハは、サウンドの「羽音」によって、イメージーションの世界に存在する。そして、サウンドは、生の音声をシンボライズしている。

第十五シーンで、蘭が部屋の扉を開けると、カラスアゲハが室内に入ってきて、一瞬、暗くなる。

蘭 (ドアをパッとあけて)

出ておいで蝶々！

カラスアゲハ……あたしは王様よ！

大きな黒い紙のカラスアゲハ、ゆっくりと部屋のなかへとびだしてゆく。

その影で「人形館」が暗くなる。

蘭 さあ これでも見えないの？ この蝶々がみえないの？ (166)

カラスアゲハの「羽音」はパロールの代わりにサウンドで表し、「その影で「人形館」が暗くなる」は、パロールの代わりに、ライトで表し、また、黒い紙のカラスアゲハというト書は、パロールの代わりに、メタファーで表すことによって、リアルに表さず、シンボライズしている。

また更に、「カラスアゲハ」を二階の部屋に監禁するのは、蝶々を「気違い」としてシンボライズしているからだ。けれど、蘭は、カラスアゲハを解き放ったのだから、あたかも囚人を

監獄から解放するかのように、狂人を解放したことになる。つまり、フーコー (Foucault, Michel) が『狂気の歴史』(*Histoire de la Folie à l'âge classique*) で論じている「阿呆舟」の住民たちを、この世に解放するようなものである。そこで、蘭の「特異な」行動は、家族にとって、気違いのシーニュとなる。気違いは、「阿呆舟」の住民のように、海の沖合いで溺死させ、殺して、葬ってしまうに限る。けれども、ドラマの中でもっとも恐ろしい出来事は、家族が、蘭を、家族の一員である事も忘れ、殺害してしまうことだ。

家族が、投票用紙に、蘭を密告者として記名する。だが、古来、密告者は、最も信頼する人間である場合がある。げんに、イエスを裏切ったユダの譬えがある。第三シーンで、蘭は、祖父の船の設計士が「うそ」をつく人だという。

蘭 でもそれはうそなんです お祖父さんは何でもすぐうそにしてしまうんです (143)

「うそ」は、現実の事実と反することである。だが、祖父の場合の「うそ」は、詩形式のパリノードに近い。しかし、祖父自身が、自ら「うそ」だとは言っていない。

蘭 あたし 気違いなんかじゃありません (144)

蘭は、現実世界の価値観で見ると「うそつき」でも「気違い」でもないが、夢やファンタジーの世界では、蘭の話は、相対的になってしまう。

人形劇『狂人教育』のステージは、ファンタジーである。従って、当然、ステージは、作り物の世界である。

祖母が紙の猫にミルクをやっている。(144)

当然、現実の世界では、祖母が紙でできた猫にミルクを飲ませることは出来ない。だが、一般的に人形劇では、ファンタジーだからといって、「飲ませる」行為を仕種で済ます約束事している。ところが、寺山の人形劇では、紙製の猫が、当然、ミルクを飲む事ができないので、祖母が猫を切り刻んでしまう。

ハサミで一匹の猫を剪る。

紙片になって捨てられた猫は風で吹きとんでしまう。(145)

紙で出来た猫は、鋏で切り刻めば、小さな紙片になってしまう。リアリズムでは、紙は切り刻めば、小さな紙片になってしまう。だが、一般に、人形劇に限らず、ドラマは、サウンドやライトやミュージックが、言葉の代わりに、ファンタジーの世界を作り出す。だから、言葉でリアルにト書を書いてあっても、人形劇の文法によって、ファンタジーの世界が現出する。しかし、寺山は、ファンタジーの世界に真実の世界を持ち込んで、観客の幻想を打ち砕き、新しいイマジネーションの世界を見せるのである。こうして、切り刻まれた猫は、幻想の世界で、痛みを喚起する。夢の中の恐怖のように。

祖父 ……場合によったら家名と名誉のために密殺し
グリア畑に埋めてしまうことだ (145)

不条理な夢の中の出来事のように、家族の一員を殺める事は、他の家族全員を救うためであるという。蘭が家族の意見に反対する主張は、正しいのであるが、身体が身体障害者なので、他の人と異なる。蘭が処罰されるのは、カフカの『変身』で虫になったラムザのようである。ラムザの言っていることは、正常なのに、身体が醜悪な虫であるために、闇に葬られる。

ところで、第四シーンの結末では、祖母と祖父が「気違い」を探しだし、処罰する話をしている。

だれだかわかったら殺すの？
やむを得んさ! (145)

ついで、第五シーンの冒頭では、マユと鷹司が、蝶々の話をする。

殺すの
やむを得んさ (146)

第四シーンと第五シーンの二つのフレーズ「やむを得んさ」は、韻を踏んでいる。しかも、同じフレーズが、第四シーンと第五シーンに跨っている。第四シーンは、狂人を殺す話題であるが、第五シーンは、蝶々を殺害する話題である。この場合、人間と蝶々を交互に殺害する話をしている。やがて、寺山は『毛皮のマリー』(1967年)で、人間と蝶々のイメージとをダブらせて殺害するシーンを再現することになる。

こうして、夢の連鎖が、ステージを構成していく。つまり、「ゆめ」という蝶々を「ゆめ」

という網で捉えようと見張っているファンタジーの装置が仕掛けられていく。

マユ ゆめのなかでゆめの番しているときみたい (147)

とうとう、第八シーンでは、幽霊が登場する。吃りで、ベルリオーズの熱狂的ファンであるパパが、幽霊と会い話をする。

パパ あ

兄さん!

影 呼んでいたね

パパ よ、よ、よびやしません

影 ただ思い出していただけるかね

……

私は幽霊だ (152)

このシーンは、明らかに、『幻想交響曲』のイリュージョンをモチーフにした場面設定である。ミュージックとライトの織り成す文法によって、ファントムが現われる。背広を着た紳士のシルエットが、壁に映っているに過ぎないが、ミュージックとシャドーによって、シルエットは、ファントムに変貌するのである。ところで、そのとき、蘭は、ちょうど『レミング』の中で、他人の夢の中に入っていくように、パパの声に反応して、パパの夢の中に入る。

蘭 ふいに目をさまし、壁に向かって雄弁をふるっているパパに話しかけようとする (153)

こうして、夢の中で夢を見るように、蘭は、パパの夢の中に入る。

蘭 (あくびをして) パパは ゆめのなかにいるのね

そっとちかよってそっとパパにさわってみる。

蘭 パパの夢って

まるで現実そっくり (153)

夢の連鎖は、蘭の現実が夢と相対化する場面である。ところが、蘭ばかりでなく、鷹司も夢を見ている。

鷹司 おれが番していることの意味があるってことにな
るわけだな (155)

鷹司は、カラスアゲハの番をしているが、言い換えれば、鷹司は、カラスアゲハという夢の番をしているわけである。

鷹志 いまひと眠りから醒めたところなんですよ (155)

鷹司は、扉のそばで、寝ずの番をしているのだが、居眠りをする。だが、鷹司は、夢の中で目覚めるのかどうか判断基準がない。

蘭、また目をさまして
二人の話をきいている (155)

鷹司は、カラスアゲハの寝ずの番をしているが、どうやら、蘭は、家族全員の寝ずの番をしているようだ。

祖父 (声を一段とおとして) でたらめだっていいのだよ
だれかひとりを気遣いだとして
殺して埋めてしまえば (156)

蘭が言ったように、恐らく、祖父は、正真正銘の「うそ」をつく人のようである。ところが、それだけに止まらない。「うそ」が増殖して、ドラマに亀裂が入り、ステージが剥き出しになり、解体を始める。先ず、人形劇に、人形使いが登場して、人形のマユと人形遣いとの話をつぎだしていく。

どんどん本を作りかえてゆくんだ (159)

寺山が、ドラマを解体していく傾向は、最初からあったようだが、それは、『狂人教育』の構成からも見て取る事が出来る。しかも、後に、『邪宗門』の結末でも繰り返し用いているシチュエーションである。

第十二シーンからは、いささか、単純に見えるが、ここで、蘭を除いて家族全員が同じ行動

をとり始める。マッカシー旋風のレッドパージのように、「気違い」探しが始まる。

祖父 死体はこれにいれていも畑に埋めてしまうことにした (163)

夢の覚醒時のように、ドラマの急展開は、「死」への恐怖によって、家族一同が同じ方向に回転し始めるモメントである。

祖父、眼鏡を出してかける。

一同あわてたように眼鏡を出してかける。(164)

恐怖によって、皆が一様に同じ行動をとるが、実は、同じ行動を取る事が恐怖であり、滑稽である。また、一種のゲームのようにも見える。或いは、人形たちが、家族の枠を超えて、ゾンビやロボットに変身したかのようなのである。チャペックのロボットのように、家族達は、一様に同じ行動を取る。資本主義や社会主義社会のように大量生産を能率よく処理していく兆しが透けて見える。人形がロボット化して機械化するプロセスを表している。ジル・ドゥルーズが指摘する蜘蛛の糸によって、神経が麻痺していくかのようだ。

一同まったく同じように歩いてきて立止まりすわる。(166)

同じト書き「一同首ふる」が四回繰り返される。このような家族の豹変を見て、蘭は、絶叫する。

蘭 みんなのうそつき！ (166)

蘭は、鷹司の大切なカラスアゲハを逃がしてしまうが、蘭の行為に、鷹司も他の誰も、微塵にさえも動かない。皆、同じ動きに囚われてしまったかのようなのである。

と、突然その名を書きながら、同じ手つき、同じ表情の人形たち、しだいにくつつき、ねじれあって同化して、一つの人形になりはじめる。(167)

ホブズ (Hobbes, Thomas) が『リヴァイアサン』(Leviathan) に描いた怪物のように、家族のメンバーたちは、蘭を追い詰め、スケープゴートに仕立てていく。ちょうど、カラスアゲ

ハを捕らえようと血眼になったハンターたちのように。この瞬間、蘭は、カラスアゲハと一体化する。

やがて、全員の顔と手をそなえた「家族の」人形が出来上るや、巨大な斧を手にして舞台一杯に一振りする！

ちぎれて飛ぶ蘭の首！

壁に象徴のようにくっつくその首。(167-168)

蘭の首は、まるで、カラスアゲハが壁にピンで留められるように、壁にくっつく。そして、蝶々となった蘭の首は、「人間の首」や旅する「豪華船の内部」を現わした舞台装置を表わし、壁に留まった蘭の首とパラレルになる。

テープレコーダーから、しずかにMだけが勢いよく唄われる。(蘭の声で)

あたしは あたしの うたうたう

あたしは王様

ゴーイング マイウエイ

ひとりぼっち マイウエイ (168)

蘭の台詞のうち、最後の二行の「マイウエイ」は、カプレット(対句)になっている。ところで、法医学者ドクは、登場しないが、同じサウンドである「ドク」の「毒」を象徴している。またこの毒は、蜘蛛の毒を表している。ドクのくだした診断「狂人」に人間は怯える。ドクの言う事を人は皆単純に信じる。ちょうど、アントナン・アルトー (Artaud, Antonin) の『残酷演劇』のように、人はこの毒に感染する。

更に、もっと滑稽なのは、ドクが、誰かを特定して言ったのではないのに、誰もが、その言動を、信じてしまうことだ。スケープゴートを必要とする家族が悪いのか。この意味では、『狂人教育』のコンセプトは、明らかに、ブレヒト (Brecht, Bertolt) の悲劇『ガリレオ・ガリレイの生涯』(Life of Galileo) でガリレイが口にするフレーズのパラドックスになっている。

GALILEO: No. Unhappy the land where heroes are needed.²⁰⁾

しかも、もっと恐ろしいのは、狂人を作り出したり、集団妄想を作り出したりする家族の群衆心理である。また、おまけに、始末が悪いのは、『狂人教育』の集団妄想を観劇しながら、

観客は、皆、「自分だけは毒（ドクの診断）に感染せず、客観視できる」と思っていることだ。

寺山は、家族を密室に閉じ込め、社会の窓を閉ざしてしまう。どうやら、寺山は、家族を、社会の最小単位（モノド）とみなしているようだ。『狂人教育』と同じテーマを持つ『身毒丸』の家族は、母親不在のために家族の崩壊が起こる。けれども、『レミング』と同じ系列に入る『無頼漢』の母子のように、都市の崩壊以後も、母子の絆は残る。何れのドラマでも、母子の絆は、家族や都市よりも強い。

萩原朔美氏は、「不思議なことに、寺山さんの描く女性は男性を襲い、男性は、女性の言いなりになる」と指摘する。また、野島直子氏は「寺山修司とマゾヒズム」論の中で、「怒れる専制君主的な女性とそれに従う男というマゾヒスティックな形象を核にしたものが頻繁に見られる」²¹⁾と論じている。

寺山は、メタファーで、蝶々と人間を同一視したり、或いは、女性と男性を昆虫の雌や雄と同一視したりしたのではないだろうか。寺山が父を亡くし母親の手で育てられたとき、この世界は、農耕社会の枠組みで成り立っていた。だが、一家の働き手を失うと、幼い寺山は、農耕社会の恩恵に浴せない悲哀をまざまざと見てきた。殊に、寺山が、父親の庇護を失ったとき、農耕社会の豊穰のシンボルとしての母親像ではなくて、狩猟時代のシンボルとしての雌の生命力を見たのではなかったか。

蘭が殺されたのは、子供を守る母親の不在のせいだといえるのではないか。だから、寺山が、『狂人教育』の中に、蘭の母親を描いたなら、全く違ったドラマ展開になったに違いない。ちょうど、『無頼漢』では、原作『天衣紛上野初花』には登場しない直次郎の母親が出てきて、露骨に、息子の直次郎を庇護する。そこで、寺山にとって、母親は、昆虫の交配のように、雌が雄を餌食とし、しかも、雄は雌に食べられて気持ちがいいとマゾ的な表情をする。確かに、子孫繁栄の構図としてみると微笑ましいが、『草迷宮』のように、吸血鬼が、人間の生き血を吸って殺害する光景を思い浮かべるならば、戦慄が走る。ところで、『狂人教育』では、家族全員が、一体化して巨人になり、一種の吸血鬼的な怪物となって、蘭に襲い掛かる。

この作品でばくは「人形は人間の代用品かどうか？」という素朴な疑問にぶつかった。もし、人形が「もの」としてのドラマを演じるならば、人間によく似ている必要などはなく、紙と木が対話したっていい筈だからである。しかし、俳優と人形とは、形をべつとすればその機能がよく似ている—とゴードン・クレイグも言っている。²²⁾

『狂人教育』のステージでは、人形が集まって、巨大な塊となり、人間の身体をした怪物に変形する。ところで、『マクベス』では、物の怪の魔女たちが、マクベスを襲い、マクベ

スの神経を麻痺してしまう。

ひとみ座は、この公演の前にシェークスピアの「マクベス」をとりあげたりして意欲を示していたが、……²³⁾

『マクベス』の魔女の二枚舌は、実は、「うそ」であったが、『狂人教育』では、「うそ」が重要なキーワードになっている。元来、詩で歌った前言を否定する詩の形式である「パリノード」と寺山の「うそ」との関係が、端的に見られるが、複雑に絡まっている。ところが、『狂人教育』では、最初から最後まで「うそ」が連発されファンタジーを象っている。

寺山の「うそ」の定義は徹底したもので、もとより、リアリズム演劇のステージは、「うそ」であるという観方が濃厚である。しかも、寺山は、自作の人形劇『狂人教育』のステージさえも、「うそ」として、最後に破壊してしまう。だが、寺山のステージは、脳裏に残ったイメージネーションである。しかも、目に見えないステージを象るのは、デモーニッシュな「狂人」が推進力となり、「うそ」が異化として、ドラマの中で強烈に機能している。

蘭は、「うそつき」として処刑されるが、実際には、「うそつき」は、同一の行動をとる家族である。従って、殺されるのは、蘭であるが、同時に、蘭を殺す家族は、蘭の心を殺し、同時に、自らの心も殺してしまったのである。このパラドックスは、ワイルド (Wilde, Oscar) の『ドリアン・グレイの肖像』(The Picture of Dorian Gray) のパラドックスと同じである。また、ワイルドの『サロメ』(Salomé) では、猛毒の持ち主であるサロメは、預言者ヨカナンを殺害する。『狂人教育』では、妄想によって、人間の内なる世界にしか棲息しない病原菌が蔓延して、観念によって、蘭を、殺害する。ちょうど、カラスアゲハが美しいという理由で、ピンで留めて標本にするように。けれども、美しい残像はハンターの脳裏に焼き付けられ、目の前には、無残な形骸しか残らない。だが、ファンタジーは生死を越えているから、脳裏に残るのである。

『狂人教育』の舞台装置が、人間の頭を模しているのは、観念の世界を表している。カラスアゲハが美しいという観念である。しかも、カラスアゲハは首を象徴していて、この舞台装置とパラレルになっている。

09. 流山児祥演出『狂人教育』

『狂人教育』は、近年、森英樹演出により、CITY 演劇フェスティバル徳島で、1991年9月に上演があり、また、高野美由紀演出により、A.P.B-Tokyo で、2004年6月と2006年6月に公

演があった。また、佐々木銀次演出により香川県高松 DIME で2005年6月の上演があった。他にも、池の下の第十六回公演がタイニー・アリスで2006年3月に公演があった。なかでも、流山児祥氏は、『狂人教育』を永年上演してきたが、その上演パンフで「1999年韓国ソウルで世界初演して以来8年間世界30余都市で上演してきた」と解説している。

まず、流山児祥氏は、『狂人教育』を、三つのヴァージョンに仕立て、東京森下ベニサンピットで、2006年10月7日から15日まで上演した。次いで、流山児氏は、『狂人教育』の演出で、俳優を、文楽でもなく、歌舞伎でもなく、西洋のマリオネット式に操った。西洋の“人形”といえば『コッペリア』や『マイ・フェア・レディ』がある。けれども、寺山の人形劇は、ジャリ仕立てのシュールなドラマである。流山児氏の『狂人教育』公演で、シュールなシーンを思い起こしたのは、ステージに張り巡らされた紐であった。だが、「紐は、蝶々の輪郭を模ったもの」との説明を聞き、散文的な飾付に思えた。

また、人形が、一体になるシーンをどのように構成するのか見物であった。というのは、愛知万博では、中国のダンサーたちが、千手観音を演じた先例があったからだ。しかし、“全員顔と手をそなえた「家族の」人形”のイメージは全くなく、バラバラのままで一体感はなかった。また、人形は“汗”をかかないが、俳優たちは、唐十郎氏の芝居のように“汗”びっしょりであった。

また、蘭の首は飛ばないで、俳優の胴体に繋がったままであった。改めて、寺山の『狂人教育』は人形劇だが、『身毒丸』や『邪宗門』のように、人間が人形を模倣する芝居とは違うと感じさせた。

先にも触れたように、劇中、裸の舞台を紐で仕切る。筆者は、流山児氏に「あの紐は、蜘蛛の巣ですか」と尋ねた。だが、「蝶々の輪郭です」と答えた。更に、「鈴の付いた紐が、震えるのは、蝶々の羽ばたきを表している」との説明があった。結局、紐は、ジル・ドゥルーズの蜘蛛の巣とは全く関係がなかったのである。だから、蜘蛛の巣に蝶々が囚われ、蘭の首が飛ぶイメージに結び付かなかったのである。少なくとも、寺山のドラマを改作するときは、皮相な説明ではなく、寺山の創作意図を詳細に解釈して、脚色しなければならないと思った。

萩原朔美氏が指摘しているが、寺山は、ドキュメンタリーとドラマの間として、“ドキュラマ”を考えた。つまり、寺山は、プレイヤーたちの身振りは、コピーであって、リアリズムではないと論じた。本当のリアリズムはドキュメンタリーにあり、プレイヤーたちの模倣的な演技は“うそ”であると述べた。また、本物のファンタジーは、無表情なマリオネットたちから生まれると考えた。

寺山は、「制作上のメモ」で、大人が失ってしまったファンタジーを書きたいと述べている。『狂人教育』のラストシーンでは、人形は、皆、同じアクションをする。つまり、人間が人間

である事を止め、ロボット化する現代社会を風刺している。

パロールとマリオネットとは、素材として、いわば、死んだ状態にある。しかし、パロールとマリオネットは、朗読者や人形遣いの生命力によって甦生する。パロールは、普段は死んでいるから、墓碑のようである。だが、墓碑は、永遠に何も語らないが、パロールは、話者の発声によって、息を吹き返す。終幕で、マリオネットの蘭は、死ぬが、蘭のパロールが“ヴォイス”となって蘇生する。ドラマ『マクベス』では、物言わぬ首級がステージに置かれる。だが、蘭の“ヴォイス”は、テープレコーダーを通して流れる。寺山は、蘭の“ヴォイス”をマリオネットのように、生の声ではなくて、素材としての録音の音声である事を示したかったのかもしれない。こうして、遂に、寺山は、ステージを破壊し、客電を灯し、ドラマがマリオネットによるファンタジーであった事を明らかにするのである。

10. まとめ

寺山修司は、生身のボディと無機質の人形やパロールとは無関係だと考えていた。だが、生身のボディとパロールが接近する場合がある。仮に、夢を媒介にすると、現実と夢の境は曖昧になる。眠っている人は、意に反して、無意識のうちに行動する。正夢と夢の違いがあるように、夢の中の人物は、夢を見ている人とは別人となる。というのは、眠っている人の意思に反して、夢の中の人物は、勝手に話すからだ。殊に、夢を見ている人と夢の中の人物が同じ人物である場合、自己同一性が混乱する。夢は、明らかにボディとパロールを接近させるが、逆に、違和感も生じる。つまり、夢は、時折、微妙に、ボディとパロールは違うと告知する。

台本に書かれて眠っているパロールも声に出して読めば、息を吹き返す。このパロールと同じように、病も、息を吹き返す。ちょうど、記憶喪失者が、過去の思い出を音楽で聞くと過去の出来事を思い出すように、である。だから、過去の思い出は夢と同じように仕組みで出来ているかもしれない。現実の世界では、過ぎ去った過去の人物像は実在感が欠落しており、夢のようにぼんやりし、自己同一性が混乱する。

記憶を喪失した人は、人形と同じような状態になっている。というのは、人形は、記憶能力がないから、他者から与えられたパロールで話す。ちょうど、死んだ蘭が話すパロールのように、テープレコーダーを通して人形は話す。ところで、蘭が話す録音の音声は、蘭の記憶ではなく、テープレコーダーから流れる音声である。しかし、録音テープの音のように、蘭の録音テープの音声は蘭を操る人形師の生のヴォイスとは関係がない。

言い換えれば、蘭の録音の音声は、ちょうど、霊のように死んだパロールそのものになったのである。しかも蘭が死んだのは、霊のように空中を浮遊するカラスアゲハになって変身した

からである。

蘭の首が飛んで壁に付着する。その姿は、ちょうど、カラスアゲハが標本箱に収まるような具合になる。或いは、ギュスターヴ・モローの『出現』では、ヨカナンの首は、切断された途端、閃光のように輝くシンボルとなって、サロメの暗闇を圧倒する。サロメは、ヨカナンの首を切ったが、首は、ちょうど、蘭の首が、壁に付着するように空中にとまる。まるで、カラスアゲハが壁に止まるように空中に静止して美しく輝く。つまり、パラドキシカルな意味では、ヨカナンの首とカラスアゲハは、光と影が織り成す美を出現するのである。

蘭の首も、ヨカナンの首も、カラスアゲハも、互いに対を成し、こうして、カラスアゲハは霊のように浮遊する。

多重人格障害患者は、医学の治療によって、回復して病気が治る。ところが、寺山にとって、ドラマの病は治療と無関係である。つまり、死には、生理的な死とパロールの死とがある。即ち、パロールの死は、霊のように舞うシンボルとしてのカラスアゲハである。カラスアゲハはパロールを話さないが、ナレーターが、カラスアゲハとなった死者のパロールを話す。寺山にとって、カラスアゲハは死者の霊を表しているのだ。

寺山は、カラスアゲハをこの世とあの世を結ぶ霊的な役割を付与した。更に、寺山は、眠ったように死んでいるパロールを、発話する事によって、あの世から、この世に呼び戻した。寺山にとって、夢はこの世とあの世を繋ぐ媒体の役割をするのであるが、舞台がその格好の場所となっているのである。

寺山はマリオネットの芝居『狂人教育』や『人魚姫』を書いたが、オブジェとしての人形を自ら作ったわけではない。荒川修作、加納光於、四谷シモン氏らは、身体としてのオブジェを自分で作った。

馬場駿吉氏は耳鼻咽喉科の専門医学者として、先ず人間の身体を解剖する視点から芸術作品を見ている。加納光於氏のオブジェ《アララットの船あるいは空の蜜》はアバンギャルド作品ではあるけれども、人間の身体を象徴的に模している。

大岡信氏の詩篇が実際にそのオブジェの中のどこかに隠されているけれども、その紙片が人間の心を司る臓器の一部を象徴していることは想像できる。

寺山が創作したマリオネット劇『狂人教育』や『人魚姫』は、対象の人形が人間の身体を表すオブジェというよりも、むしろ人形よりも劇場全体の空間のほうが、巨大な人形を象徴しており、大きな劇場空間から観念的で抽象的な人形劇を紡ぎ出す可能性があることをドラマにしている。

言い換えれば、馬場氏にとって、寺山は『狂人教育』や『人魚姫』劇で個々の身体を表している人形というよりも、劇場全体を現わす身体として象徴的に表していると考えている。

馬場氏の劇評集『サイクロラマの木霊 名古屋発・芸術時評1994～1998』は、氏が劇場全体を大きな身体と考えている好例である。しかしながら、馬場氏は人間の身体を扱う医学専門家なので、寺山の言葉による観念的な身体論よりも加納氏の具体的なオブジェ《アララットの船あるいは空の蜜》に対する関心のほうがむしろ強い。それに比べると、寺山の『狂人教育』や『人魚姫』は、オブジェであるよりも言葉で造形した抽象的な観念の集積のようだ。だから馬場氏は寺山演劇に見られる心の解剖よりも、加納氏のオブジェに見られる身体の解剖の方に重きをおいて解説していることになる。

注

- 1) 『加納光於とともに』所収「密封された詩集の命運—《アララットの船あるいは空の蜜》をめぐる」(書肆山田、2015.6.30)、127頁。
- 2) 思い出のキャラ図鑑「第13回『マクベス』の演出 新しいクリエイティブ・ディレクション発見へのプロセスその二」(「ヤフー」2006年9月24日)参照。
- 3) 寺山修司+宇波彰「対談—逆エディプス」(『地下演劇』十四号、1979年10月20日)、51頁。
- 4) 『寺山修司の戯曲』第九巻(思潮社、1987年)112頁。
- 5) 『寺山修司戯曲集』第一巻 初期一幕物篇、劇書房、1982年)、168頁。本書からの引用は頁数のみを記す。
- 6) Shakespeare, William, *Macbeth* (The New Cambridge Shakespeare, 1997年)、103頁 本書からの引用は頁数のみを記す。
- 7) 『寺山修司演劇論集』(国文社、2000年)、53頁。本書からの引用は頁数のみを記す。
- 8) ドゥルーズ、ジル『カフカ マイナー文学のために』宇波彰・岩田行一訳(法政大学出版社、1983年)、196-197頁。
- 9) ドゥルーズ、ジル『ブルーストとシーニュ』〔増補版〕宇波彰訳(法政大学出版社、1981年)、219頁。
- 10) Craig, Edward Gordon, *On the Art of the Theatre* (London William Heinemann, 1914)、p. 81.
- 11) チャベック、カレル『R.U.R.』栗栖継訳(『カレル・チャベック戯曲集I、十月社』、1992年)、256頁。
- 12) バルタ、イージー「『ゴーレム』を語る」(『夜想』三五、1999年)、16頁。
- 13) 中井英夫「眠れゴーレム」(『新文芸読本寺山修司』河出書房新社、1993年)、55頁。
- 14) 『不思議図書館』(PHP、1982年)、20頁。
- 15) 『寺山修司の戯曲』第九巻(思潮社、1987年)、54頁。
- 16) 『寺山修司戯曲集』第一巻 初期一幕物篇(劇書房、1995年)、「解題」276頁。
- 17) Lorca, Garcia, *Plays One, Blood Wedding*, translated by Gwunne Edwards (Methuen world classics, 1987年) p. 83.
- 18) 寺山修司「黙示録のスペイン—ロルカ」(『私という謎』講談社文藝文庫、2002年)、13頁。本書からの引用は頁数のみを記す。
- 19) 寺山修司『墓場まで何マイル?』(角川春樹事務所、2000年)、61頁。
- 20) Brecht, Bertolt, *Life of Galileo*, translated by John Willett (Methuen, 1980), p. 98.
- 21) 野島直子「寺山修司とマゾヒズム」(『日本病跡学会雑誌』第65号、2003年六月)、12頁。
- 22) 『寺山修司戯曲集』第一巻 初期一幕物篇(劇書房、1995年)、「解題」276頁。

23) 『寺山修司の戯曲』第四卷（思潮社、1971年）、401頁。

参考文献

- Craig, Edward Gordon, *On the Art of the Theatre* (London William Heinemann, 1914)
- Craig, Edward Gordon, *The Mask* (Harwood Academic Publishers, 1998)
- Craig, Edward, *Gordon Craig the Story of his Life* (Limelight Editions, 1985)
- Innes, Christopher, *Wdward Gordon Craig A Vision of Theatre* (Routledge, 2004)
- Redon, Odilon, *a soi-meme journal (1867–1915) notes sur la vie l'* (the EBook version (.pdf format) of the 1922 edition.)
- XENAKIS, Iannis, *Music and Architecture* (Pendragon Press, Hillsdale, Ny 2008 First Edition. Hardback. No Dustjacket, 2008)
- Beckett, Samuel, *En attendant Godot* (Les Editions de Minuit, 1952)
- Beckett, Samuel, *Waiting for Godot* (Faber and Faber, 1965)
- Samuel Beckett *The Complete Dramatic Works* (Faber and Faber, 1990)
- Three Novels Samuel by Beckett Molloy Malone Dies The Unnamable* Translated by Patrick Bowles (Grove Press, Inc. 1965)
- Cronin, Anthony, *Samuel Beckett The Last Modernist* (Harper Collins Publishers, 1997)
- Zurbrugg, Nicholas, *Beckett and Proust* (Colin Smythe Barnes and Noble Books, 1988)
- Samuel Beckett Now* Edited by Melvin J. Friedman (Chicago U.P., 1975)
- James Knowlson & John Pilling, *Frescoes of the Skull: The Later Prose & Drama of Samuel Beckett* (Grove Press, Inc. 1980)
- Kalb, Jonathan, *Beckett in Performance* (Cambridge U.P., 1991)
- Doherty, Francis, *Samuel Beckett* (Hutchinson University Library, 1971)
- Alvarez, A., *Beckett* (Fontana Collins, 1973)
- Josephine Jacobsen & William R. Mueller, *The Testament of Samuel Beckett* (A Dramabook, 1964)
- Core, Richard, N., *Beckett* (Oliver & Boyd, 1964)
- A Samuel Beckett Reader* Edited by John Calder (The New English Library Limited, 1967)
- Modern Critical Interpretations Samuel Beckett's Waiting for Godot* Edited by Harold Bloom (Chelsea House Publishers, 1987)
- File on Beckett* Compiled by Virginia Cooke (A Methuen Paperback, 1985)
- Raynham, Alex, *Leonardo da Vinci* (Factfiles Oxford U.P., 2013)
- Clarke, Georgia, *Leonardo da Vinci* (Penguin Active Reading, 2010)
- Karen Ball & Rosie Dickins, *Leonardo da Vinci* (Usborne Publishing Ltd., 2007)
- Nicholl, Charles, *Leonardo da Vinci Flights of the Mind* (Viking, 2004)
- Leonardo da Vinci Codices Madrid Iwanami 1975*
- Raynham, Alex, *Leonardo da Vinci* (Factfiles Oxford U.P., 2013)
- Clarke, Georgia, *Leonardo da Vinci* (Penguin Active Reading, 2010)
- Karen Ball & Rosie Dickins, *Leonardo da Vinci* (Usborne Publishing Ltd., 2007)
- Nicholl, Charles, *Leonardo da Vinci Flights of the Mind* (Viking, 2004)

Leonardo da Vinci Codices Madrid Iwanami 1975

寺山修司『狂人教育』（『新劇』白水社、1962.12）

『寺山修司戯曲集一血は立ったまま眠っている』（思潮社、1965）

『寺山修司の戯曲』第4巻（思潮社、1971）

『寺山修司の戯曲』第9巻（思潮社、1987）

『寺山修司戯曲集 初期一幕物篇』第1巻（劇書房、1992）

南江治郎『世界の人形劇』（三彩社、1975）

岸田真「ゴードン・クレイグの舞台美術—『王位継承者』の上演を中心に」（『演劇と映画 複製技術時代のドラマと演出』晃洋書房、1998）

『加納光於1960-1992』全3冊（'60-92 prints, '80-91 paintings, Catalogue raisonné & documents）、（小沢書店、1992）

『加納光於』（南画廊、1967）

『加納光於の芸術』（『水声通信』No. 8, 水声社、2006.6）

加納光於「さながら血管樹に蔽われた雷雲よ」（『雷鳴の頸飾り—瀧口修造に』書肆山田、1979）

「特集 加納光於 色彩の光芒1954-1992」（『版画芸術』76、阿部出版、1992）

加納光於、大岡信「アララットの船あるいは空の蜜」「索具・方晶引力」（『版画芸術』77、阿部出版、1992）

「特集2 加納光於最新作」（『版画芸術』49、阿部出版、1985）

『加納光於《形象を押しかけて》（ギャラリー東京ユマニテ、2001.11.5-11.24）

『加納光於《身を起こした蛇のために》（ギャラリー東京ユマニテ、1998.11.14）

『加納光於《隣と花と》（ギャラリー東京ユマニテ、1999.1.11-1.30）

『加納光於《胸壁にて》—1980』（アキライケダギャラリー東京 名古屋、1980.11.1-29）

『加納光於—油彩』（アキライケダギャラリー東京、1982.10.4-30）

『加納光於 PAINTINGS '80-83』（北九州市立美術館、1983）

『加納光於《振りまわす巣房の下で》《その雲形の》』（ギャラリーユマニテ東京、1994）

『加納光於 語りえぬものための変容』（小沢書店、1981）

『特集 加納光於』（Poetica 臨時増刊 小沢書店、1992.4）

『加納光於「骨の鏡」あるいは色彩のミラーージュ』（愛知県美術館、2000.9.15-11.5）

『「色彩」としてのスフィンクス—加納光於 KANO mitsuo 1960-1992』（セゾン美術館、1993）

『加納光於《稲妻捕り》Elements』（書肆山田、1978）

『加納光於』（『加納光於展』バルール画廊、1978.3.27-4.15）

『加納光於色身—未だ視ぬ波頭よ2013』（神奈川県立美術館鎌倉、2013.9.14-12.1）

『加納光於1977-1987版画《強い水—夢のパピルス》』（品川文化振興事業団O美術館、1988.11）

『加納光於展 MIRROR, 33』（南画廊、1965.3.16-27）

加納光於、大岡信「〈アララットの船あるいは空の蜜〉」（『美術手帖』美術出版社、1972.3）

加納光於「アーク・オーロラの分光に屹立して」（『美術手帖』美術出版社、1969.5）

加納光於「私のデッサン・私のメモワール」（『美術手帖』美術出版社、1964.3）

加納光於「オマージュ 澁澤龍彦 八ヶ岳高原にて」（『澁澤龍彦をもとめて』美術出版社、1994）

加納光於「オマージュ 澁澤龍彦 八ヶ岳高原にて」（『追悼澁澤龍彦』『みづゑ』No. 945, 美術出版社、1987）

- 加納光於、菊池信義「対話」世界を捲る「書物」あるいは「版画」(『現代詩手帖』思潮社、1987.3)
- 加納光於「現代版画の危機」(『みづゑ』No. 964, 美術出版社、1962.12)
- 大岡信『加納光於論』(書肆風の薔薇、1982)
- 大岡信「現代作家論 加納光於」(『qq』7、qq 出版、1974)
- 大岡信「加納光於個展」(「月評」『美術手帖』美術出版社、1965.5)
- 『マルチプル・ショー デュシャンからリキテンスタインへ』(町田市立国際版画美術館、2005)
- 馬場駿吉『加納光於とともに』(書肆山田、2015.7)
- 馬場駿吉『点』創刊号(1965)、2号(1966)、3号(1967)、6号(1976)
- 馬場駿吉「特集—荒川修作」(アールヴィヴァン1号、1980)
- 馬場駿吉「幾何学的抽象の極北から吹く風の中で—ヴァザリ展に寄せて—」(『GALERIE VALEUR』、1976)
- 馬場駿吉「愛知曼荼羅から東松照明曼荼羅へ」(『愛知曼荼羅—東松照明の原風景』、2006)
- 馬場駿吉『時の諸相』(水声社、2004)
- 馬場駿吉『海馬の夢』(深夜叢書刊、1999)
- 馬場駿吉『液晶の虹彩』(書肆山田、1984)
- 馬場駿吉『耳海岸』(書肆山田、2006)
- 馬場駿吉『句集 夢中夢』(星雲社、1984)
- 馬場駿吉『星形の言葉を求めて』(風媒社、2010)
- 馬場駿吉『澁澤龍彦西洋芸術論集成』下、解説(河出文庫、2010)
- 馬場駿吉『感染症21世紀耳鼻咽喉科領域の臨床』19(中山書店、2000)
- 馬場駿吉『駒井哲郎展 第17回オマージュの瀧口修造』(佐谷画廊、1997)
- 馬場駿吉「世界をからめとるものとしての色彩—加納光於に」(『加納光於胸壁にて—1980』、アキライケダギャラリー、1980)
- 馬場駿吉「ブーメランの獲物たちのために」(『加納光於—油彩』アキライケダ、1982)
- 馬場駿吉「万物の海としての補遺—岡崎和郎の作品に触れて」(『岡崎和郎展』倉敷市立美術館、1997)
- 馬場駿吉『サイコロラマの木霊 名古屋発・芸術時評1994~1998』(小沢書店、1998)
- 馬場駿吉「コレクターとしての二つの原則—私の蒐集40年の歩みをふり返って—」(『版画芸術』、2003)
- 馬場駿吉「一俳人のコレクションによる駒井哲郎銅版画展~イメージと言葉の共振~」(名古屋ボストン美術館、2008)
- 馬場駿吉「集積燦惨アルマン Accumulation 論」『Accumulation Arman』(GALERIE VALEUR、1978)
- 馬場駿吉「翼あるいは熱狂の色彩—加納光於展に—」(『加納光於 GALERIE VALEUR、1978』)
- 馬場駿吉「見えるものから観念への逆探知—ジャスパー・ジョーンズ・レッド・レリーフ展に—」(『Lead Reliefs Jasper Johns』 GALERIE VALEUR、1978)
- 馬場駿吉『薔薇色地獄』(湯川書房、1976)
- 馬場駿吉「方寸のポテンシャル」(『洪水』第七号、2011.1.1)
- 馬場駿吉瀧口修造残像「方寸のポテンシャル2」(『洪水』第八号、spiralvews 2011.7.1)
- 馬場駿吉瀧口修造残像2「方寸のポテンシャル3」(『洪水』第九号、2012.1.1)
- 馬場駿吉瀧口修造残像3拾遺「方寸のポテンシャル4」(『洪水』第十一号、2013.1.1)
- 馬場駿吉「ギャラリスト西岡務を追憶して」(『REAR』リア制作室、2013)、26-27頁。
- 馬場駿吉「慢性副鼻腔炎における嫌気性菌に関する臨床的ならびに実験的研究」(名士大医誌、20巻4号、

- 1970)、800-853頁。
- 鈴木祥一郎、上野一恵『厭気性菌』(第二版)小酒井望編一日常検査法シリーズ8(医学書院、1978)
- 齊藤一郎「古都に集う音と言葉」(月刊なごや、2015.3 No. 390)、22-23頁。
- PHARMAKON '90(幕張メッセ現代の美術展、1990.7.28アキライケダコーポレーション)
日常に偏在するアート(日常に偏在するアート展実行委員会 サン・メッセ、2003.10.7)
- 谷口幸代「名古屋の文学—俳人・馬場駿吉が見た名古屋—」(『名古屋の観光力』風媒社、2013)
- 『レオナルド・ダ・ヴィンチ解剖図集』松井喜三編集・解説(みすず書房、2001)
- 『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』杉浦明平訳 上・下(岩波書店、1983)
- 『レオナルド・ダ・ヴィンチの素描』裾分一弘(岩崎美術社、1973)
- ヌーランド、B. シャーウイン『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』ペンギン評伝叢書(岩波書店、2003)
- 久保尋二『レオナルド・ダ・ヴィンチ研究その美術家像』(山陽社、1972)
- ヴェッツオン、アレッサンドロ『レオナルド・ダ・ヴィンチ』後藤淳一訳「知の再発見」双書79(創元社、1998)
- クラーク、ケネス『レオナルド・ダ・ヴィンチ芸術家としての発展の物語』第2版 丸山修吉、大内賢治訳(叢書・ユニベルシタス 法政大学出版局、1981)
- ブランリ、セルジュ『レオナルド・ダ・ヴィンチ』五十嵐見鳥訳(平凡社、1996)
- 『アラン ヴァレリー』桑原武夫・河盛好蔵編 世界の名著66(中央公論社、1994)
- 山岸健『レオナルド・ダ・ヴィンチ考 その思想と行動』(NHK ブックス207、1978)
- 齋藤泰弘『レオナルド・ダ・ヴィンチの謎』(岩波書店、1988)
- 堀真理子『ベケット巡礼』(三省堂、2007)
- 「アスベスト館通信」第1号、3号、5号、6号、7号、8号、9号 元藤燐子編集(アスベスト館、1986~1988)
- マセダ、ホセ「ドローンとメロディー—東南アジアの音楽思想」高橋悠治編・訳(新宿書房、1989)
- 『コレクション瀧口修造』1巻~13巻、別巻1~2巻(みすず書房、1993)
- 「特集 瀧口修造」(本の手帖、No. 83. 昭森社、1969.8)
- 『瀧口修造』(『現代詩手帖』、1974.10)
- 「瀧口修造追悼」(みすず書房、No. 233、1979.10)
- 『池田満寿夫「愛の瞬間」』(美術出版社、1987)
- 加藤郁乎『江戸俳句歳時記』(平凡社、1983)
- 加藤郁乎「詩集「形而情学」から ぼえしす」(『戦後詩大系II』、三一書房、1970)
- 加藤郁乎編『吉田一穂詩集』(岩波文庫、2004)
- 加藤郁乎編『荷風俳句集』(岩波文庫、2013)
- 加藤郁乎編『芥川龍之介俳句集』(岩波文庫、2010)
- 加藤郁乎「久友土方巽」(『アスベスト館通信』8、1988)
- 加藤郁乎「旧雨音なし」(『総特集 澁澤龍彦』『ユリイカ』6、1988)
- 『加藤郁乎俳句集成』(沖積舎、2000)
- 加藤郁乎『陰内楽』(大和書房、1975)
- 加藤郁乎『夢一筋 あるいは夢の研究』(コウベブックス、1976)
- 『加藤郁乎詩集ニルヴァギナ』(薔薇十字社、1971)

- 加藤郁乎「迷宮の建築術が生んだ傑作」(週刊サンケイ、1970.12.31)
- 加藤郁乎詩集(現代詩文庫45、思潮社、1971)
- 『加藤郁乎詩集成』(沖積舎、2000)
- 加藤郁乎『後方見聞録』(学研M文庫、2001)
- 加藤郁乎「牧神そのひと」(『大野一雄の舞踏』白林聖堂、1977)
- 天野文雄著編「江口」『世阿弥』(角川学芸出版、2013)
- 駒井哲郎「パウル・クレエ」(『アトリエ』、アルス、1949.11)
- 駒井哲郎『白と黒の造形』(小沢書店、1970)
- 駒井哲郎『銅版画のマチエール』(美術出版社、1976)
- 駒井哲郎『ルドン 素描と版画』(双書版画と素描8 岩崎美術社、1974)
- 『駒井哲郎銅版画作品集』(美術出版社、1973)
- 『駒井哲郎銅版画展』(東京美術館、1980)
- 『駒井哲郎版画作品集』(美術出版社、1979)
- 『駒井哲郎回顧展 没後15年銅版画の詩人』(第1回資生堂ギャラリーとそのアーティスト達、1991)
- 『駒井哲郎と現代版画家群像果実の受胎』(埼玉県立近代美術館、1994.7)
- 『特集 駒井哲郎』(『みづゑ』No. 864、1977.3)
- 「対決! 駒井哲郎」(版画芸術80 阿部出版、1993)
- 池田龍雄『アヴァンギャルドの奇跡』(山梨県立美術館、2010)
- 池田龍雄「漂着」(『第21回オマージュ瀧口修造展』、佐谷画廊、2001)
- 『池田龍雄展』(梵天シリーズ 第5章「点生」、ギャラリーさんよう、1981)
- 池田龍雄「驚異の人・土方巽」(『驚異の人とその周辺展』横浜市民ギャラリー、1989)
- 池田龍雄「ナンデスカコレウ」(『点』創刊号、1981)
- 『みづゑ』No. 851美術出版社、1976.2
- 高橋悠治、一柳慧、武満徹(音楽) 勅使河原宏監督、安部公房原作『おとし穴』(1962) ポニーキャニオン、2002
- 勅使河原宏監督短編集『北斎、いけばな、命、東京1958、ホゼー・トレスI・II、白い朝、動く彫刻ジャン・ティンゲリー』(1968) ポニーキャニオン、2002

明治期以降曹洞宗人物誌（八）

川口高風

はじめに

本稿は「愛知学院大学教養部紀要」第六十三巻第二号（平成二十八年一月）に所収の拙稿「明治期以降曹洞宗人物誌（七）」の続編である。全項の人物誌が完成した時は『近代曹洞宗人名辞典』と題して刊行する予定で、一日も早い完成をめざし精進している。

凡例

〔見出し項目〕

- 一、収録人物は明治期以降に宗門の発展に活躍した人物で、その出典は「明教新誌」「宗報」「曹洞宗報」を中心に、明治、大正、昭和期以降に刊行された著作や各種雑誌、新聞などから採取した。
- 二、見出しの人名は当時用いた旧漢字とした。事歴の本文は新字体を用いたが、旧字体を使用したものもある。

- 三、見出しの項目はかな見出しを太字で示し、次に漢字を掲げた。
- 四、かな見出し項目は姓と名の間にダッシュを挿入して読みやすくした。

〔見出し項目の配列〕

- 一、配列は五十音順の予定であったが、「い」以降は完成した原稿の順序とした。そのため本稿では「よ」の項をとりあげた。
- 二、同音同字の漢字項目は時代順（没年順）に配列した。
- 三、同音異字の漢字項目は第一字目の画数の少ないものからの順とした。また、第一字目が同画数の時は第二字以降の画数の少ないものから配列した。

〔本文の記述とその順序〕

- 一、本文の記述は敬語、敬称の使用を避けた。
- 二、収録にあたっては居住地、号、字、生年月日、父母、誕生地、受業師、本師、学歴、僧堂安居歴、宗門役職歴、社会的職歴、著作類、示寂（没）年月日、行年、参考文献の順とした。不明な場合は記していない。
- 三、本文は基本的に、編著者が直接、居住地へ問い合わせを行った返書（調査用紙）にもとづいて執筆した。それ以外に参考とした文献は末尾に掲げた。
- 四、伝記中の元号の一番最初（初出）に西暦を入れた。ただし、伝記中の生没年には西暦を入れない。
- 五、寺院の所在地が郡の場合は県を入れ、市の場合は県を省略した。なお、平成の大合併による新市町村名への変更を行っていないものもある。
- 六、居住地は歴住の順序通りでないものもあり、何世か不明な場合は記していない。

よ

よこーすいがん 余語翠巖

大正元年(一九一二)―平成八年(一九六六)

南足柄市最乗寺十八世、四日市市長興寺、
 龜山市瑞光寺。大正元年九月九日に愛知県
 南設楽郡鳳来町に生まれる。受業師は黒田
 鉄巖、本師は黒田鉄背。昭和十一年(一九
 三六)三月に駒澤大学仏教学部を卒業し、
 四月より曹洞宗内研究生となる。十四年三
 月に總持寺に安居。三十六年總持寺講師、
 三十九年一月に總持寺副寺、四十年七月總
 持寺副監院、四十四年六月、アスペンス文
 科学研究所の招請により米国各地に禅セミ
 ナー巡講する。十月に曹洞宗師家、總持寺
 後堂、四十六年十一月、曹洞宗教学審議会
 委員、四十八年四月、愛知学院大学講師、
 十一月、曹洞宗経歴調査特別審査会委員、
 四十九年三月最乗寺専門僧堂西堂、五十一
 年二月、曹洞宗師家会副会長、五十二年十
 二月總持寺常任顧問、五十三年三月特別尼

僧堂師家、五十五年五月曹洞宗師家会会
 長、五十七年三月曹洞宗参議を務める。宗
 外では保護司、民生委員、選挙管理委員
 長、人権擁護委員、教育委員長なども務め
 た。『未来のまま(余語翠巖好夢集)』『生
 を明らめ死を明らむるは』『これ仏性な
 り』『禅の十戒』『道はじめより成ず』『禅
 の古典―伝光録』『正法眼蔵随聞記のはな
 し』『正法眼蔵佛性講話』『正法眼蔵弁道話
 講話』などの著書がある。平成八年十二月
 二十一日に八十四歳で示寂した。(曹洞宗
 現勢要覧)『跳龍』第五五六号)

よこいーえちよう 横井恵超

慶応三年(一八六七)頃―大正十四年
(一九二五)

袋井市極楽寺十九世、掛川市世楽院三十
 世、豊岡市見性寺十九世、宮津市智源寺三
 十五世、湖西市蔵法寺十八世、湖西市禮雲
 寺開山。号は聖山、江南。尾州に生まれ
 る。受業師、本師は白峯寛瑞。曹洞宗専門
 支校、曹洞宗大学林に入学する。卒業後、
 比叡山で天台学を学び、その後、曹洞宗大

学林教授に就任、後に可睡齋役寮となる。
 極楽寺に初住し、一年後に世楽院へ転住、
 伽藍を整備した。可睡齋の雲衲を接化し、
 各地の江湖会、授戒会の西堂、後堂として
 布教教化に尽力した。大正七年(一九一
 八)、見性寺に転住、八年永平寺単頭とな
 る。九年春に智源寺に昇住し、十年に眼病
 を発して中風となったため、十三年に退董
 する。十四年四月二十六日に五十八歳で示
 寂した。(現代仏教家人名辞典)『沢木興
 道全集』第六卷、『傘松』第二四三号、井
 上正弘『蔵法寺』

よこいーけんみよう 横井見明

明治七年(一八七四)―昭和八年(一九
三三)

結城市安穩寺三十四世。号は琢宋、雪庵。
 明治七年六月二十一日に栃木県下都賀郡赤
 津村に生まれる。受業師、本師は横井智
 僊。石川素童、西有穆山に隨身する。明治
 二十年(一八八七)夏、茨城郡間黒の鳳台
 院の鳥栖越山の再会へ入衆し、二十三年ま
 で専門支校に学び、二十五年には東京哲学

館に入學し、二十八年に卒業。三十二年に總持寺内地留學生に選拔され、法学院で三年間修行する。三十一年には仏教新聞社に入り、高田道見を扶けて「通俗仏教新聞」「和融誌」などの編集を担当する。三十四年に「仏教毎週新聞」を起し、三十八年には「明教新誌」の記者となり、三十九年には加藤咄堂の後を受けて主筆となる。文部大臣安藤正純や森鷗外、姉崎潮風らと交遊があった。著書に『佛教信徒の心得』『戦時講話』『各宗高僧譚』『西有禪話』『四節引導抄』『源翁和尚と殺生石』『高僧穆山』などがある。昭和八年七月三十日に六十一歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』)

よこいーちせん 横井智僊

一 大正八年(一九一九)

結城市安穩寺三十三世、栃木市長福寺三十世。号は琢明。名古屋市に生まれる。本師は宮地仙岩。大正八年八月九日に示寂した。

よこおーけんしゅう 横尾賢宗

嘉永四年(一八五二)一 大正九年(一九

二〇)

岩沼市洞林寺、岩沼市長谷寺、鶴岡市吉祥寺、福島市陽林寺、上山市寿仙寺。号は仏閑。嘉永四年八月十日に宮城県名取郡千貫村大字北長谷の横尾庄作の長男に生まれる。受業師、本師は仏通天宗。慶応三年(一八六七)八月より明治六年(一八七三)三月まで相神百川に、同年より十一月まで荒井如禪に参随する。十七年に曹洞宗大学林を卒業、その後、永平寺、總持寺に二年間安居。愛知県、宮城県中宗林教師、千葉、栃木、茨城三県聯合中宗林教師、宮城県教導取締、第二十五中宗林監理、第二十一中宗林教授を歴任する。三十五年八月には第三中宗林長、三十六年五月に第一中宗林長、四十二年九月に第二中宗林長、曹洞宗大学教頭を歴任した。歩兵第三十二聯隊布教師、支局管内布教師も務めている。詩や書にも通じ、著書に『普勸坐禅儀十回講話』『禅と武士道』『般若心経講話』『道元禪師中心の仏教』などがある。

大正九年八月二十八日に六十九歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『宗教時報』第二十七号、『禅学大辞典』)

よこかわーとくじゅん 横川得諱

弘化元年(一八四四)一 昭和七年(一

九三二)

東京都海雲寺二十一世、東京都黄梅院。号は覚伝。弘化元年十一月十一日に埼玉県北葛飾郡松伏町に生まれる。受業師、本師は前田朴禅。文久三年(一八六一)三月より明治元年(一八六八)七月まで駒込梅檀学寮に修学する。同年冬、群馬県勢多郡の龍源寺随意会において立職、五年七月に黄梅院の首先住職となる。二十三年十一月に總持寺において転衣、同年海雲寺に転住し、鎮守三宝荒神の信仰を広めて一大霊場となった。昭和七年九月十六日に八十九歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

よこすかーほうこう 横須賀豊光

一

東京都常光寺二十三世、東京都増林寺二十六世。東京都江東区亀戸九丁目の横須賀家に生まれる。本師は須田竹間。東京都宗務所長を務めた。

よこぜきりよういん 横関了胤

明治十六年(一八八三)ー昭和四十八年

(一九七三)

長浜市深高院三十世、長浜市洞春庵二十世、佐野市長慶寺、深谷市儀安寺、山梨市信盛院、長浜市応昌寺、桐生市正泉寺、栃木県下都賀郡吉祥院。号は鷲嶺(嶽)。明治十六年十一月十九日に滋賀県伊香郡木之本町大音の横関半次郎の三男として生まれる。受業師、本師は高橋無学。脇本公鑑、久沢泰印、水上大舟、鈴木竜童、戸田悟雄、田辺靈雄、岩生国学らに参随する。明治三十五年(一九〇二)より長谷寺に安居し高等中学林に入学。三十九年に哲学館仏教専修科及び漢学専修科を併修する。大正五年(一九一六)に宗務院奏者、六年に書記、昭和八年(一九三三)に教学部主事、十年十二月に嘱託、貫首選挙参与員、世田

谷中学建築事務主任、視學員兼任、十五年三月曹洞宗制編成審議会幹事、十六年十月制度調査会幹事、二十二年一月永平寺高祖大師大遠忌事務嘱託、永平寺高祖大師大遠忌準備事務嘱託、常任庶務部長、二十六年五月永平寺副監院、愛知学院短期大学の「宗憲及宗制史」講師、参禅道場師家、總持寺修史局長などを務めた。著述家として多くの著作を遺しており、主要なものとしては『江戸時代洞門政要』『伝光録詳解』『曹洞宗宗制私解』『総持寺誌』『伝光録』(岩波文庫)『伝光録参究の栞』などがある。昭和四十八年三月十四日に九十一歳で示寂した。『曹洞宗現勢要覧』『洞門龍象要覧』『江戸時代洞門政要』横関ふじ江「師父の思い出」、「傘松」第三五七、三九九、三六〇号)

よこたーたいがく 横田泰岳

明治元年(一八六八)ー昭和十年(一九三五)

久留米市千光寺三十世、大川市慈恩寺、佐世保市薬王寺。号は祖道。明治元年四月十

二日に福岡県八女郡川瀬村に生まれる。受業師は徳光台禪、本師は字禪。橋本祖嶽に参随。曹洞宗務支局附属学校を卒業後、明治二十九年(一八九六)に教師検定を受けて三等教師となる。昭和十年一月二日に示寂した。

よこたーほうざん 横田賣山

嘉永元年(一八四八)ー大正九年(一九二〇)

水戸市安国寺二十五世。号は祖慶。嘉永元年八月十五日に茨城県新治郡出島村安食の横田小左衛門の三男に生まれる。受業師は小川菜鳳、本師は法寶全翁。托鉢、説教、品評会などを通じて社会的布教に尽力した。弘化年中(一八四四―四七)に火災によつて安国寺の伽藍を焼失したため、現在地に堂宇を移し、檀信徒の協力を得て再建した。寺禄を回復し、法燈を守つて寺運の隆盛を図る。教育にも関心をもち、寺の一部を学校の敷地として貸与し、地域の人々に感謝され、学務委員も務め、安国寺の中興となった。大正九年七月十五日に七十八

歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

よこやまーぎかん 横山義寛

明治九年(一八七六)―昭和二十七年

(一九五二)

渋川市福増寺二十三世、渋川市雙永寺、鉦路市大康院二世。号は大康、仙狂子。明治九年一月十九日に越後中蒲原郡新飯田町の横山祐之助の三男に生まれる。受業師、本師は間嶋祖禪。明治二十三年(一八九〇)

に前橋市曹洞小学林に入り卒業後、前橋中学校に入り卒業。三十年曹洞宗大学林を卒業、三十一年四月雙永寺に転住。三十三年福増寺に転住。附近の製紙工場の工女布教に従事し、自坊においては報恩講を結び接化に務めた。また、地方青年会出獄人保護会と連絡して布教に務めた。前橋市曹洞宗中学林教授、四州中学林教授、雙林寺僧堂役員、宗務所長、布教部布教師、免因保護会幹事などを務めている。三十五年曹洞宗教導講習院に入り卒業。四十三年及大正三年(一九一四)には内務省の感化教育事業講習会に出席し全科を修了。同年冬より別

子銅山精煉所附属常在布教師を務め、七年

には宗会議員に就き、八年には大本山巡回布教師、十年より特派布教師を務めた。十四年の北海道巡回布教の折、布教所を建てて定光寺大道英仙を開山に拝請して大康院を開創した。昭和二十七年六月二十日に七十七歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗現勢要覧』)

よこやまーきようぜん 横山競禪

明治三十一年(一八九八)―昭和四十六

年(一九七二)

横浜市西有寺五世、横浜市萬徳寺四世。号は齡学。明治三十一年三月二十三日に青森県西津軽郡館岡の横山家に生まれた。受業師、本師は玉田仁齡。森田悟由に参随。西有中学林を卒業し、西有寺認可僧堂に安居した。神奈川県第二宗務所長も務めている。昭和四十六年七月二十日に示寂した。(『洞門龍象要覧』)

よこやまーげんしょう 横山玄彰

明治十四年(一八八二)―昭和三十八年

(一九六三)

福島市安洞院十四世。号は瓦嶽。明治十四年八月二十五日に福島市南矢ノ目谷地の菅野初次の次男に生まれる。初め菅野得全と称した。受業師は横山玄雄、本師は高雲靈道。明治二十三年に曹洞宗中学林を卒業し、東洋大学国漢専門部を卒業。四十一年に曹洞宗教導講習院へ入学、四十二年五月卒業。同年六月より曹洞宗大学に留学する。四十三年より特派布教師を二十有年間、總持寺再建祠堂勸募専師として十八年間、祠堂勸募に従事した。管内布教部布教師、工場布教師、管内布教師(二回)を務める。宗外では福島県製糸同業組合囑託講師、戦時特別調停委員、福島郵便局精神話講師、県方面委員、県小作調停委員、軍人遺家族指導講師、借家、借地調停委員、金銭債務調停委員、福島刑務所教誨師などを務めた。昭和三十八年七月二十四日に八十三歳で示寂した。(『横山玄彰老師頌徳碑文』『曹洞宗名鑑』『洞門龍象要覧』)

よこやまーこうけん 横山皎賢

安政五年(一八五八)ー昭和十一年(一

九三六)

福岡県田川郡興国寺二十七世、行橋市禅興寺十五世。号は独鏡。安政五年二月十六日に福岡県仲津郡矢留村の有光頭了の三男に生まれる。受業師、本師は横山素鏡、長門功山寺の金山主黄に参随した。明治十五年(一八八二) 四月に駒込梅檀林に入学、十七年十月に函館の高龍寺内専門支校に掛錫し、二十年三月に曹洞宗大学林に入って二十五年四月に卒業。二十三年福岡県第二号専門支校教師、二十五年に大学林寮監、二十六年福岡県小学林教授、四十二年両山本布教師、第三宗務所長、四十四年管内布教師などを務めた。禅興寺任職中は警察署、学林などで宗乗を講演し、興国寺任職中は婦人会を創設して近村に巡回布教し布教伝道、寺門興隆に努めた。昭和十一年五月十日に七十八歳で示寂した。(『興国寺過去帳』『曹洞宗名鑑』)

よこやまーせつしゅう 横山雪洲

明治七年(一八七四)ー昭和十五年(一

九四〇)

行橋市禅興寺十六世、福岡県田川郡興国寺二十八世。号は天溪。受業師は加来雪光、本師は横山皎賢。明治七年十月五日に福岡県京都郡今元村字津留の小正路市六の二男として生まれる。明治三十年(一八九七) 七月に鎮西中学林を卒業、三十五年二月に永平寺で転衣、七月に曹洞宗大学林を卒業、十月には曹洞宗第四中学林副学監に任命された。三十七年九月には同中学林学監に任命される。三十八年十月には依願免職し、四十年十一月には曹洞宗宗会議員に当選した。大正二年(一九一三) 三月には曹洞宗第四中学林学監に任命され、八年六月に依願免職し、九年四月には福岡県第三曹洞宗務所管内布教部委員長に選出された。十一年十二月には福岡県第三曹洞宗務所長に任命されている。昭和十五年十月一日に六十七歳で示寂した。(『歴住世代帳』『現代仏教家人名辞典』)

よこやまーどんかい 横山吞海

ー大正三年(一九一四)

三条市光照寺十九世。号は大心。新潟県南蒲原郡福島村鍋島の横山弥右エ門の二男に生まれる。本師は機参学禅。明治六年(一八七三) から大正三年(一九一四) まで約五十年間、光照寺の任職を務めた。大正三年二月九日に八十二歳で示寂した。

よこやまーりょうせん 横山良仙

明治六年(一八七三)ー昭和二十年(一

九四五)

新城市醫王寺二十七世、新城市新昌寺十六世。号は覺城。明治六年十月一日に豊橋市の横山豊造の長男に生まれる。曹洞宗大学林を卒業し曹洞宗宗務院書記を務めた。新昌寺に義財を募り、鳥居強右衛門の顕彰碑を建てている。昭和二十年六月十日に七十二歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

よこわりーけんぼう 横割拳芳

明治三十四年(一九〇一)ー昭和六十一年(一九八六)

年(一九八六)

富士市成安寺二十九世、富士市曾我寺、富士宮市重林寺。明治三十四年二月二十七日に静岡県富士市上横割に生まれる。受業師、本師は横割純宗。曹洞宗中学位を卒業し、大正十四年(一九二五)には曹洞宗大學を卒業、その後、朝鮮清道成道寺誥布教師、京城別院曹溪寺布教師、管内布教師、宗務所会計などを務めている。昭和十三年に静岡第二宗務所長、静岡県宗務所会長に就任。二十一年に宗議会議員、二十八年に静岡県第一宗務所長、總持寺顧問及び顧問会副会長、瑩山禪師六五〇回大遠忌局会計監査委員などを歴任した。宗外においては県仏教会富士分会長、静岡第一師範学校教務嘱託なども務めた。昭和六十一年八月三十一日に八十六歳で示寂した。總持寺より西堂重興号を授与される。(『門門龍象要覽』『曹洞宗現勢要覽』)

よしいずみーぜんきょう 吉泉禪教

弘化三年(一八四六)―大正四年(一九一五)

鶴岡市善寶寺三十五世、山形県東田川郡寶

泉寺十三世、鶴岡市天澤寺十九世、鶴岡市鳳衛寺二十五世、鶴岡市正法寺四十一世。号は法運。弘化三年六月二十日に山形県東田川郡新堀村の吉泉善五右衛門の子として生まれる。本師は水野禪山。慶応二年(一八六八)九月より明治二年(一八六九)六月まで高田不博に、七月より九年三月まで老梅活宗に参随する。三十年(一八九七)以降、總持寺直末總代、特選議員、宗務支局取締宗務所長などを務めた。慈善学校を起こし、宗門指定教育のため新たに僧堂を建立した。貧民に施すなど慈善事業に尽力した。大正四年一月七日に示寂している。(『現代仏教家人名辞典』)

よしうらーとうかい 吉浦透海

文化十一年(一八一四)―明治三十年(二八九七)

鳥取県日野郡常福寺十七世、鳥取県日野郡龍福寺五世、米子市桂住寺十七世。号は定鱗。文化十一年九月十日に岡山県勝山に生まれる。本師は逸山白林。明治七年(一八七四)十一月に常福寺へ晋住し、八年に晋

山結制、九年に梵鐘を再鑄し、十二年に庫院を再建した。十五年には殿鐘を新添しており、三十年十二月十六日に示寂した。(『過去帳』)

よしおかーしんこう 吉岡信行

―明治十九年(一八八六)

大崎市石雲寺三十世、奥州市光明寺二十二世、出雲市日光寺。号は宵間、宵閑ともあり。出雲国に生まれる。本師は鐵面清拙。東北布教戒師を務めるなど奥羽地方における在家化導者として名をあげた。『心地観經』に説く四恩と『華嚴經』『梵網經』に説く十善を中心に教化の項目を作っており、浄土三部經なども注解して浄土教との融合による安心立命を説いた。『求化微糧談』『説發願回向文』『説虎列刺予防法手控』『虎烈刺予防法』『破邪顯正論』『釈迦如来在世大和讚』『顯正邪正問答編』『四恩十善談』『参同契宝鏡三昧初和解』の著書があり、曹洞宗で最初に耶蘇教を排撃した人であった。明治十九年十二月二十日に示寂している。(『教導職職員録』『明教新

誌」第一八九三号『明治前期曹洞宗の研究』

よしおかーそぜん 吉岡祖禪

明治二十二年(一八八九)ー昭和五十年

(二九七五)

尾張旭市広徳寺十世。明治二十二年九月三十日に犬山市に生まれる。受業師、本師は安藤玉隆。三川啓明に参随した。第三中学校(愛知中学校)を卒業し両本山巡回布教師、昭和十年(一九三五)以来、中保護区保護司や同副会長、名古屋市民生委員、相生学園主任、愛知育児院理事、名古屋市家庭裁判所家事調停委員、新栄学区遺族会長、雲竜幼稚園理事、名古屋市地方裁判所調停委員、名古屋刑務所篤志面接委員として活躍し、昭和二十八年(一九五三)五月三日に瑞宝章藍綬褒章を受章するなど、その他数々の賞を受けた。二十九年十月二十五日に皇居で天皇、皇后両陛下に特別拝謁し、三十年四月二十五日には永平寺授戒会報恩焼香師を務めた。三十四年十月二十日には天皇陛下より時計を下賜され、昭和五

十年十二月七日に八十七歳で示寂した。

(『洞門龍象要覧』)

よしおかーつぜん 吉岡鐵禪

明治十一年(一八七八)ー昭和十五年

(二九四四)

藤枝市市岳寺二十九世、焼津市正岳寺五世、藤枝市正泉寺十六世、牧之原市石雲院独住八世。号は舜孝。明治十一年三月十七日に静岡県志田郡青島村大字前島の曾根善重の長男に生まれる。受業師、本師は吉岡鐵門。明治二十八年(一九九五)八月に曹洞宗小学校を卒業し、三十一年七月には曹洞宗第三中学院を卒業。三十二年二月から三十四年八月まで天徳寺僧堂に安居した。三十八年に東京麻布の曹洞宗大学を卒業後、神田正則英語学校に学んだ。四十一年には興国寺認可僧堂付属私立中学明道学館の教授を務め、四十二年には大洞院専門僧堂の講師となる。四十四年には静岡県第四曹洞宗宗務所管内布教師に、大正元年(一九一三)十月には呉鎮守府管内軍人布教師に任命された。昭和二年(一九二七)十一

月より曹洞宗大学副学監となり七年まで務めた。また、同年九月より宗乗研究生に、十五年十一月永平寺単頭、五年から九年まで静岡県第四曹洞宗宗務所会議員、七年に

静岡県志田郡仏教慈悲会長、九年五月より十七年五月まで永平寺眼蔵会講師、十年

二月には永平寺後堂に就いた。著作には『遠州高尾山龍門山石雲院史』、『正法眼蔵弁道話新講』があり、「傘松」、「大法輪」、

「大乘禪」などに多くの論稿を執筆した。

昭和十九年十一月十八日に六十七歳で示寂した。(『舜孝鐵禪大和尚科譜』『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』「傘松」第四九四号)

よしおかーとういち 吉岡棟一

大正三年(一九一四)ー平成九年(一九九七)

福島市円通寺十一世。号は徹山。大正三年十二月三日に福島市舟場町に生まれる。受業師、本師は吉岡東閔。沢木興道に参随した。昭和五年(一九三〇)より九年まで長

禄寺僧堂に安居した。九年三月には福島師

範学校を卒業、十六年に駒澤大学仏教学部を卒業。九年より郡山市喜久田小学校、福島市杉妻小学校、大森中学校の教諭を歴任し、三十一年には福島県宗務所参事、三十五年には宗務所長に当選し、三期務める。四十年十一月には福島県仏教会会長に就任。三十一年にしのぶ保育園、四十一年に福島ルンビニー幼稚園を開設して園長を務めた。四十二年二月にはベトナムに渡り、釈迦休戦を提唱、以後、平和の鐘、日本寺建設、遺児引取り、遺骨収集などのためにベトナムへ四十回訪問する。四十五年には曹洞宗宗務会議員に当選して以来六期務め、五十三年に曹洞宗宗務会議副議長、その後、宗務会議議長、教学部長、駒澤大学理事長、愛知学院大学理事、世田谷学園理事、多々良学園理事などを歴任した。曹洞宗総合特別審議委員会、曹洞宗選挙制度検討特別委員会会長なども歴任している。また、曹洞宗東南アジア難民救済会議を設立し、会長に就任した。平成三年(一九九一)には紺綬褒章を受章した外、数々の表彰を受けた。著書に『福島県仏教史』『禅』『ベトナム仏

教体験シリーズ』上・下巻、歌集に『大道無門』『喫茶去』『みちくさ』があり、昭和四十八年には小説『椿の系譜』で福島県文学賞を受賞した。平成九年三月三十一日に八十四歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』『洞門龍象要覧』『宗報』第七四一号、『本葬儀葉』)

よしおかーとうかい 吉岡東海

安政五年(一八五八)―大正六年(一九一七)

福島市円通寺九世。号は百乘。安政五年に二本松藩士吉川宗助の三男に生まれる。五歳の時、道輪の養子となり、興国寺の峻林及び大隣寺の古芳に随侍した。十六歳で古芳について立職し、十八歳の時、永平寺で転衣、十七歳で円通寺の住職となり、四三年間にわたって伽藍復興や宗務に尽力した。大正六年二月十四日に六十歳で示寂している。(『円通寺過去帳』)

よしかわーじどう 吉川義道

―大正元年(一九一二)

名古屋市万松寺三十六世、京都市永林寺十九世、京都府船井郡善入寺九世、京都市福徳寺五世、京都府北桑田郡富春庵。号は大活。京都府船井郡麻気村の田中家に生まれる。本師は黙室義宣。曹洞宗扶宗会、曹洞宗末派総代議員などを務め、両本山の和議を成立させた。『修証義』編纂委員、永平寺顧問にも就き、總持寺の移東に活躍した。總持寺の衆寮は万松寺の僧堂を移築した建物である。大正元年九月十六日に六十六歳で示寂した。(『洞上高僧月旦』)

よしかわーじゅうけん 吉川重謙

明治三十三年(一九〇〇)―昭和六十三年(一九八八)

福島県伊達郡仲興寺十八世、福島市宝積寺二十八世。明治三十三年一月二日に福島市舟場に生まれる。本師は吉川東漸。海蔵寺僧堂に安居した。大正八年(一九一九)九月より昭和三年(一九二八)八月まで福島県信夫郡杉妻村の書記、三十一年十一月より三十五年十一月まで福島県宗務所長、三十六年四月より福島県仏教会副会長に就任

した。その他、福島市雇学課に勤務、福島市共済委員、県方面委員、司法保護委員、司法成人保護司なども務めた。昭和六十三年二月二十七日に八十九歳で示寂した。〔『洞門龍象要覧』〕

よしかわーほうあん 吉川法安

天保七年(一八三六)ー大正三年(一九一四)

日高市谷雲寺十九世、秩父市清泉寺四十一世。飯能市中心應寺、埼玉県入間郡高福寺。号は致元。天保七年二月十日に愛知県中嶋郡宮重村の吉川安造の二男に生まれる。受業師、本師は吉峯大澄。文久三年(一八六三)十一月二十八日に永平寺で転衣し心應寺、谷雲寺、高福寺に歴任して、明治二十五年(一八九二)に清泉寺に昇任した。二十八年四月に清泉寺を法幢地に昇格させ、大正三年十二月二十六日に七十九歳で示寂した。〔『清泉寺過去帳』〕

よしかわーゆうご 芳川雄悟

文久三年(一八六三)ー昭和十三年(一九一三)

九三八)

大崎市天性寺三十世、宮城県加美郡宝泉院二十五世、一関市願成寺三十七世、一関市常光寺十八世。号は哲庵。文久三年八月十日に岩手県一関の芳川家に生まれる。本師は佐藤雄明。明治期に本山布教師として全国各地を布教巡回しており、各宗各派との交流も多かった。昭和十三年一月六日に七十六歳で示寂した。

よしだーえつしゅう 吉田悦宗

明治五年(一八七二)ー昭和十四年(一九三九)

福島市陽林寺二十八世、岩沼市長谷寺二十世、上山市寿仙寺二十九世。号は幽谷、大覺。明治五年四月十七日に富山県石動町福町に生まれる。宮城県名取郡千貫村北長谷の吉田甚左衛門の養子となり、吉田と称す。受業師、本師は横尾賢宗。明治三十八年(一九〇五)七月に曹洞宗大学を卒業し内地留學生に抜擢されて、比叡山で華嚴学や天台学を三年間研究した。大正元年(一九一三)に陽林寺に就職し布教に尽力し

た。その後、曹洞宗第二中学校教授、両本山特派布教師を歴任した。大正十四年に寿仙寺へ転任し、昭和十四年六月十日に六十八歳で示寂した。〔『曹洞宗名鑑』〕

よしだーかんゆう 吉田完悠

明治四十三年(一九一〇)ー平成十五年(二〇〇三)

名古屋市太平寺二十八世、篠山市洞光寺四十三世。号は大心。明治四十三年十二月四日に愛知県海部郡飛鳥村の吉田菊松の四男に生まれる。受業師、本師は吉田鉄心。昭和三年(一九二八)三月に愛知中学校を卒業し、七年三月に駒澤大学専門部を卒業、八年三月から九年三月まで永平寺に安居、九年三月から十年三月まで總持寺に安居、十一年三月から三十二年三月まで日泰寺僧堂に安居した。愛知県第一宗務所第十五教区長、覚王山専門僧堂副師、単頭、講師、洞光寺梅花講長などを歴任し、平成十五年十月三日に九十四歳で示寂した。

よしだーけんしょう 吉田顕敬

明治三十五年(一九〇二)―昭和四十八

年(一九七三)

仙台市洞林寺三十七世。明治三十五年に宮城県宮城郡利府村の吉田擔宗の長男に生まれる。号は徳峯。受業師は木村文明、本師は吉田擔宗。曹洞宗第二中学林を卒業し松音寺専門僧堂に安居。昭和四年(一九二七)一月に洞林寺住職となった。宮城県宗務所会計、教区長、宮城県宗務所贊事、司法保護委員や梅檀学園学監、仙台仏教会会長、曹洞宗宮城県宗務所長、県遺族会常任理事、県戦犯者世話人会常任理事、社寺境内地処分審査会委員、日本宗教連盟事務局長などを歴任した。二十七年には洞林寺菅谷不動尊祭典を復活させた。四十三年には沖繩摩文仁丘に慰霊碑宮城乃塔を建立するにあたり、宮城県曹洞宗訪問団団長に就き開眼供養法要の導師を務めている。四十七年にはサイパン島遺骨収集団に同行し、観音像の落慶や戦没者供養の導師を務めた。漢詩や句作を好み、書にも親しんだ。昭和四十八年一月十三日に七十二歳で示寂し

た。(「開山三百五十回忌法要菜」『洞門龍象要覧』)

よしだーげんほう 吉田玄鳳

―大正七年(一九一八)

飯山市弥勒寺二十世、上越市洞仙寺。新潟県高田鍋屋町の吉田十束の三男に生まれる。明治から大正にかけて寺子屋を開設した。大正七年八月三十日に示寂している。

よしだーこうざん 吉田興山

明治四十五年(一九一三)―平成二年

(一九九〇)

篠山市長和寺九世、綾部市龍宝寺十世、篠山市清陰寺十三世、長野市長国寺三十九世。号は雲外。明治四十五年三月二十七日に長崎市の吉田佐太郎の長男に生まれた。受業師は澤木興道、本師は佐久間貞道。昭和十年に東京府立高校を経て東京帝国大学文学部に入學している。總持寺単頭、副監院、横浜刑務所教誨師、本山布教師などを歴任。『早起き人間学』『かぼちゃ和尚の只管打坐』などの著書がある。平成二年七月

二十八日に七十九歳で示寂した。

よしだーこうしゅん 吉田光俊

昭和七年(一九三二)―平成六年(一九

九四)

津島市海善寺七世、愛西市薬師寺。号は實成。昭和七年十一月十一日に愛知県津島市に生まれる。受業師は橋本恵光、本師は吉田恵俊。二十三年三月に津島女子高校を卒業後、永平寺に安居した。永平寺は雲水が戦地へ行ったため少なく、その間を尼僧が護った。福井地震に遭遇したが支援活動を続けており、その後、関西尼学林へ転入し二十七年に送行した。丈三メートル、幅五メートルの二十一條の糞掃衣を縫い上げ、五十九年暮れにインドへ渡り、釈尊成道の日にクシナガラ涅槃堂の涅槃像に搭けられた。平成六年十月九日に六十三歳で示寂した。(「跳龍」第四三五号)

よしだーじっさん 吉田實參

―大正二年(一九一三)

大阪府豊能郡慈眼寺四世。号は愚道。広島

県の吉田権六の二男に生まれた。明治三十三年（一九〇〇）五月に慈眼寺に入寺し、四十四年には徒弟に任職を譲り隠居となる。大正十二年七月十七日に示寂した。

〔慈眼寺過去帳〕

よしだーしゅんどう 吉田俊重

明治三十二年（一八九九）ー昭和五十年（一九七五）

小樽市徳源寺八世。明治三十二年六月一日に福井県坂井郡西里丸岡に生まれる。本師は渡部活玄か大城虎童。昭和四年（一九二九）に立正大学史学科を卒業し駒澤大学布教師養成所を修了した。乾徳寺、總持寺僧堂に安居し曹洞宗布教師、梅花流五級師範に就いた。各宗連合仏教会長、法友会会長、富山県立富山中学校教諭、富山夜間中等学校嘱託、富山県学事指導員、小樽昭和高等学校顧問などを歴任し、昭和五十年三月二日に七十七歳で示寂した。〔洞門龍象要覧〕

よしだーせんじゅ 吉田仙受

ー明治三十四年（一九〇一）

岐阜県加茂郡洞雲寺十九世、米原市円成庵、福井県三方上中郡海蔵院、鳥取県東伯郡光明寺十五世、倉吉市満正寺十七世、天草市東向寺二十二世、天草市迦葉寺二世、名古屋市円通寺二十七世、仙台市輪王寺四十世。号は信叟。鳥取県に生まれる。明治維新後、永平寺の青陰雪鴻の推挙により洞雲寺に入寺し、その傍ら、永平寺、總持寺各僧堂で多くの学人を接化した。明治三十四年八月四日に示寂した。〔洞雲寺史〕

よしだーてっしん 吉田鐵心

明治十四年（一八八二）ー昭和三十三年

（一九五八）

篠山市洞光寺四十一世、篠山市岳応寺、名古屋市成福寺七世。号は大峰。明治十四年一月十四日に愛知県海部郡飛島村の吉田重五郎の四男に生まれる。受業師は原田良禪、本師は山田大啓。杉本道山に参随する。三十八年に曹洞宗大学林を卒業し、曹洞宗第三中学林教師、三十九年には韓国布

教師、大正三年（一九一四）七月より第三

中学林副学監、同教授、十一年には朝鮮布教総監代理、昭和三年（一九二八）に南丹市龍穩寺僧堂師家、十六年九月五日から三十三年四月三日まで日泰寺副住職、日泰寺僧堂堂長、愛知学院短期大学講師、高階龍仙の隨行長などを務めた。その他、韓国黄海道金川郡育英学校主管、京城光武学校主任、漢城中学校教頭、韓国農商工部大臣秘書官、内部大臣秘書官、仏教復興朝鮮大会布教指導員なども務め、布教家としての名をあげた。著書に『六方礼経』『玉耶経の和訳』『鮮文修証義要解』などがある。昭和三十三年四月四日に七十九歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑』『曹洞宗現勢要覧〕

よしだーりゅうえつ 吉田隆悦

明治四十年（一九〇七）ー平成十四年

（二〇〇二）

八戸市大慈寺二十世、栗原市養昌寺十六世。明治四十年九月二十六日に青森県八戸市湊町の吉田家に生まれる。受業師、本師は佐藤隆三。昭和八年（一九三三）三月に

駒澤大学文学部仏教学科を卒業後、四月一日より十一年三月三十一日まで總持寺に安居する。十年十二月二十四日に養昌寺十六世となり、十六年一月には西有寺専門僧堂の准師家、十七年九月には曹洞宗第八禅林准師家及び林監。二十二年四月には宮城県矢崎村の農業協同組合、共済組合の組合長に就任し、二十四年四月より二十六年三月まで宮城県同胞援護会島矢崎村会長に就いた。三十年五月十日には大慈寺二十世となり、十月に大慈寺参禅道場を開単し師家に任ぜられる。三十三年より二十二年間、売春防止法青森県推進委員会委員を務め、四十二年二月には福聚保育園を設立し理事長に就任した。その他、四十七年五月に青森県総和会会長、本部理事、五十四年七月に東北福祉大学評議員、五十六年二月に曹洞宗参禅道場師家会副会長、十月に曹洞宗視學員、五十七年三月に西有寺専門僧堂西堂、五月には八戸市新都市土地区画整理事業協議会会長などを歴任した。五十七年にはシンガポールの西有寺復興地鎮祭の導師を務めるなどして、六十三年十一月に八戸

市特別功労者賞を受賞。著書に『幕末明治の名僧西有穆山禅師』『八千とせの松』『悟りの炎』一・二巻、『天地いっぱいの感激』などがある。平成十四年十二月二十七日に九十六歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覽』)

よしだ ーりょうぜん 吉田亮禅

安政六年(一八五九)ー大正十四年(一九二五)

金沢市永福寺三十四世、金沢市伝燈院、金沢市棟岳寺二十九世、青森県下北郡長福寺十九世、青森県下北郡福蔵寺開山。号は大活。安政六年一月四日に青森県下北郡佐井村の久造の二男に生まれる。受業師は脇澤寺の大林、本師は長福寺の大孝。明治十年(一八七七)夏、青森県の瑞龍寺において首座に任ぜられ、十九年より森田悟由に七年間参隨する。森田悟由が永平寺六十四世へ昇住したのに隨行して僧堂に五年間安居し、二十八年より金沢市の伝燈院に住持した後、棟岳寺に転住した。三十八年に永福寺に昇住して地方布教に従事した。大正十

四年十二月十四日に長福寺において六十六歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

よししたに ーけんこう 由谷憲光

ー昭和四十五年(一九七〇)

金沢市浄住寺、金沢市灯明寺三十世、金沢市長久寺二十六世、金沢市覚心院二世。号は泰龍。石川県鳳至郡野村に生まれる。名古屋禅学林に安居する。總持寺本山布教師、石川県曹洞宗宗務所長、布教部委員長、管内布教師、曹洞宗宗会議員などを務めた。宗外では司法保護委員、保護司、金沢刑務所教誨師、全日本宗教平和博覧会第一仏教館委員長、仏教中央会館建設推進委員、石川県宗教連盟常務理事などを歴任し、昭和四十五年三月一日に示寂した。(『洞門龍象要覽』)

よしづーけいかん 吉津契寛

ー明治二十五年(一八九二)

広島県神石郡宝泉寺十八世、広島県神石郡安楽寺十七世、尾道市見性寺十八世。号は通峰。広島県御調郡東村に生まれる。荒廃

していた宝泉寺に入り、檀信徒の協力を得て諸堂を修復し、梵鐘を铸造するなど宝泉寺を再興した。明治二十五年十月二十七日に四十四歳で示寂した。(『明教新誌』第一三三二号)

よしづーだいげい 吉津大鯨

安政五年(一八五八)―大正十三年(一九二四)

福山市昌源寺九世、福山市広福寺十三世、福山市龍興寺二十一世。号は巨山。安政五年十月十二日に広島県福山市西町の岩本徳左エ門の六男に生まれる。受業師は弥山大高、本師は宏巖覚量。明治七年(一八七四)夏、潮方寺圭道の初会に入衆し、八年四月より十一年三月まで、尾道の天寧寺の嘿仙の下に安居した。体は小さいが理知的な人であったと伝えられている。大正十三年十月八日に六十七歳で示寂した。

よしづーだいげう 吉津大雄

明治十年(一八七七)―大正五年(一九一六)

福山市龍興寺、竹原市海蔵寺十世。号は實山。明治十年十月十五日に備後深安郡吉津村に生まれる。受業師、本師は吉津大鯨。

明治二十四年(一八九一)夏、竺山嘿禅に入衆し、二十九年冬、天寧寺で立身、三十一年九月に吉津大鯨に嗣法した。天寧寺僧堂に安居すること多年に渡り、後に広島中学院を卒業した。新居浜市の瑞応寺僧堂にも多年安居した。三十三年九月に永平寺で転衣し、龍興寺の住職となる。管内布教師として地方布教に尽力した。四十五年に朝鮮布教師に任命され、朝鮮半島の慶州に駐在して布教所を建築し、植民伝道家として活動した。大正五年十月九日に示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

よしづみーれいじゆ 善積靈珠

天保十一年(一八四〇)―大正三年(一九一四)

京丹後市正徳院二十二世、兵庫県美方郡幸徳寺十五世。号は海天。天保十一年四月二十日に丹波国氷上郡成松町の吉積治右衛門の三男に生まれる。受業師は見性寺の靈

鳳、本師は帰仰寺の全英。弘化三年(一八四六)に七歳で得度し、九歳で誓願寺禅岩の結制に入衆して、文久元年(一八六一)に但馬美方郡の帰仰寺全英の室に入り大法を相続した。三年に幸徳寺へ晋住し、慶応

二年(一八六六)八月に總持寺で転衣、安政二年(一八五五)より文久二年(一八六二)まで孝顕寺の鐵面清拙に随侍し、明治五年(一八七二)まで十七年間、薫陶を受けた。九年冬、初会結制を修行し、十七年に正徳院へ転住した。公職として豊岡県僧侶教導取締に任ぜられたのを始め、支局副取締、取締心得などを歴任した。布教活動に尽力し、檀信徒に懺悔文や帰戒文、高祖の御詠歌と南無釈迦牟尼仏を唱えさせた。大正三年三月二十七日に示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

よしとめーしんどう 吉留進堂

大正二年(一九一三)―昭和五十三年(一九七八)

佐野市興福寺十九世、再住二十一世。号は無門、篁雀庵、月叟。大正二年に栃木県安

蘇那佐野市蔵之内の吉留隆堂の三男に生まれる。受業師は樋口延保、本師は吉留隆堂。鷲見徹道に参随する。昭和三年（一九二八）西有寺に安居し、六年には西有専修中学を卒業、七年には日下部春秋夫妻と共に歌誌『春秋』を発行した。九年に駒澤大学専門部仏教科を卒業し、修善寺僧堂に安居した。同年に興福寺住職に就く。戦時中、保坂玉泉に二十世住職を依頼し、二十一年に二十一世として再住した。詩作を好み、『火坑』（詩集）『禅門引導香語集』『続禅門引導香語集』『新禅門引導香語集』『月叟語録』など多数の著書がある。昭和五十三年十二月二十三日に六十五歳で示寂した。（『興福寺過去帳』『月叟語録』『跳龍』第三六六号）

よしとめーりゅうどう 吉留隆道

一 大正十年（一九二一）

佐野市興福寺十七世。号は祖山。得度師、本師は吉留覚堂、滝谷琢宗に参随する。永平寺に約六年間安居し、曹洞宗地方布教部委員長として活躍した。栃木県立佐野中学

校を創立するため、同志とともに本堂に東明学舎を二年間開き、中学校ができた後に廃舎した。大正十年五月二十日に示寂している。（『現代仏教家人名辞典』）

よしながーてんねん 吉永天然

一 明治三十七年（一九〇四）

佐野市本光寺四十三世、佐野市万福寺。号は天然。明治三十七年五月二十二日に示寂した。（『歴住世代帳』）

よしひろーぜんえい 吉廣全英

明治二十一年（一八八八）一昭和三年

（一九二八）

福岡県京都郡松山寺三世。号は文之。明治二十一年六月三十日に福岡県京都郡苅田町集の吉廣全機の長男として生まれる。受業師、本師は片山文器。明治四十三年（一九一〇）七月六日に曹洞宗第四中学林を卒業し、四十五年七月四日には曹洞宗大学予科高等科を卒業した。布教師で、昭和二年（一九二七）に松山寺の再建を誓願とし、三年には佐世保市西方寺の説教で病とな

り、三月二十八日に示寂した。

よしみつーげんき 儀満玄機

明治十四年（一八八一）一昭和二十七年

（一九五三）

山口県大島郡浄福寺十世、山口県大島郡元正寺十三世、韓国京畿道開城正福寺開山。明治十四年一月一日に山口県大島郡大島町の儀満兵治の二男に生まれる。受業師は大村玄英、本師は佐川玄彝。北野元峰に参随する。明治三十八年（一九〇八）に曹洞宗大学を卒業し、四十四年に朝鮮語研究生として渡鮮、四十五年朝鮮布教師となる。大正九年（一九二〇）から十四年まで両本山巡回布教師、十年から宗議会議員を務め、昭和十四年（一九三九）から特派布教師を務めている。農村寺院の疲弊を憂い、その救済を訴えた。二十七年二月二十日に七十二歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』「宗教時報」第九十八号）

よしむらーゆうほう 吉村雄鳳

明治八年（一八七五）一昭和三十三年

(二九五八)

前橋市龍海院三十四世、前橋市教徳寺中興開山。号は禅龍。明治八年十一月二十五日に伊勢宇治山田市河崎町に生まれる。受業師は満光寺の國龍、本師は前田大峰。曹洞宗教導講習院を卒業し、明治三十六年（一九〇三）に二十九歳にして函館軍人布教師に任ぜられ、永平寺東京出張所常在布教師も兼任した。両本山春秋巡回布教師、曹洞宗財務部主事、人事部主事、公選宗会議員、庶務部主事、樺太巡回布教師、宗議会議選議員、視學員、戦時特派布教師、管長代理として各地陸軍病院慰問、特派布教師などを務めた。宗外においては東京通信局嘱託講師、県協力会議員、軍事保護院嘱託講師、大政翼賛会前橋支部顧問、大日本傷痍軍人教化指導講師、県宗教団体連合会常任講師、大日本戦時宗教報国会群馬支部顧問などを務めた。大正三年（一九一四）十月には、前橋市龍海院の周随禎三が徳を慕って後任に屈請している。著書に『観音経説教』『修証義説教』『因縁百話』『普勸坐禅儀通解』などがあり、昭和二十九年九

月九日に八十一歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗現勢要覧』『是字寺龍海院誌』）

よつやーどううん 四津谷道雲

明治二十四年（一八九一）―昭和四十七年（一九七二）

高岡市瑞龍寺二十九世。号は大安。明治二十四年三月二日に富山県射水郡水戸田村に生まれる。旧姓は富田氏。受業師、本師は四津谷洞龍。大正四年（一九一五）に曹洞宗大学を卒業し、両本山布教師、富山尼僧学林長、宗議会議員、宗議会議副議長、准師家などを務めた。宗外においては小作調停金銭債務調停員、養徳園高岡支部長、県方面委員、少年教護委員、県方面委員詮衡委員、方面委員連盟副会長、司法保護司、高岡職業紹介連絡委員、高岡区司法保護委員会会長、人権擁護委員、家事調停委員などを歴任した。昭和四十七年六月七日に八十四歳で示寂した。（『洞門龍象要覧』『高岡山瑞龍寺』『瑞龍寺展図録』）

よつやーどうりゆう 四津谷洞龍

慶応元年（一八六五）―大正十年（一九二一）

高岡市瑞龍寺二十八世、高岡市久昌寺二世。号は曹溪。慶應元年三月二十一日に富山県上新川郡熊野村の四津谷忠平の二男に生まれる。受業師、本師は徳山了古。明治二十二年（一八八九）に富山県専門支校を修了する。二十二年から二十七年まで金澤泰山、田村大機、孤峯白巖らに参随する。三十年七月東京曹洞宗中学を卒業し、三十五年には曹洞宗大学林を卒業。三十四年に高岡市久昌寺の住職となり、三十七年に瑞龍寺へ転じた。四十二年四月、管長より曹洞宗師家を認可され瑞龍寺僧堂の雲衲を継化した。資性綿密淡泊で、總持寺祖院の後堂を拝命して雲衲育成や布教伝道のために力を尽した。大正十年十一月十一日に五十六歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『大日本人物名鑑』『高岡市史料集』『高岡山瑞龍寺』『瑞龍寺展図録』）

よなづみーどりん 米積道林

弘化四年(一八四七)ー明治三十七年
(一九〇四)

鳥取県日野郡永福寺十五世。号は柏苗。弘化四年三月十日に鳥取県八橋郡三本杉村の馬野仁郎の次男に生まれる。受業師は鳳林獨翁、本師は東柏瑞。信叟仙受到に参随している。慶応二年(一八六六)冬、鳥取県東伯郡の満正寺前住職信叟仙受の再会に首先安居し、明治四年(一八七二)夏、倉吉市源徳院前住職一頓活翁の初会で首座を務める。六年に東柏瑞の法を嗣ぎ、十年一月九日には總持寺で転衣し、十月九日に永福寺へ首先住職した。二十六年には永福寺の「登坂観音大士全図」と「七類大日如来全図」を画いており、檀信徒の信望が厚かったところから、道林と等身的地蔵尊が建立されている。三十七年十一月四日に示寂した。(履歴書「永福寺縁起」)

よねだーせきじゅん 米田石順

ー大正二年(一九一三)

福岡県田川郡高座石寺十九世、北九州市大

興善寺十九世。号は鐵応。福岡県京都郡行

橋村に生まれる。本師は東海仙洲。明治二十年(一八八七)頃に高座石寺の観音堂を再建し、二十二年に大興善寺へ転住した。

大正二年八月二十四日に示寂している。

(高座石寺歴住世代録)

よねはらーはくりん 米原伯隣

安政五年(一八五八)ー大正六年(一九

一七)

鳥取県岩美郡竜岩寺十二世、鳥取市天徳寺二十八世。号は仙邦。安政五年十二月二十三日に因幡国邑美郡行徳村の米原重次郎の二男に生まれる。受業師は爲徳崇隣、本師は原田透隣。日置黙仙に参随する。明治四年(一八七二)に天徳寺に首先安居し、七年四月より八年十二月まで丹波国円通寺の日置黙仙に就いて修学、九年には因幡国邑美郡吉成村の吉成寺住職豊田仙如の初会で立職、同年八月二十四日に竜岩寺住職の原田透隣の室に入って嗣法。十三年五月二十三日に總持寺で転衣、二十二年には竜岩寺において初会を修行した。曹洞宗地方布教

部委員長を務め、大正六年二月二十二日に示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

よねもとーこうがん 米本孝巖

ー昭和三十一年(一九五六)

愛知県知多郡乾坤院九世。号は雲峰。昭和二十二年(一九四七)七月九日に乾坤院の住職に任命される。二十三年に晋山開堂する。同年には宗会議員に当選し、二十四年から永平寺貫首随行長を十数回務めている。布教師としても名声があり、在職中、禅堂の修復や本堂畳替、浴室の修理などを行った。「乾坤院大通講」を組織して営繕の基金とした。三十年には専門僧堂を開単し、三十一年には聚福院(現在、長久手市)へ帰って十月八日に示寂した。(『傘松』第二五二号、宇宙山侍者寮編『乾坤院』)

よねもとーずいほう 米本瑞鳳

明治八年(一八七五)ー昭和二十六年

(一九五一)

名古屋市梅壽院七世、恵那市天長寺七世。

号は翔南。明治八年十二月二十一日に尾張国春日井郡山田村大野木の米本勘助の三男に生まれた。受業師、本師は玄同圭宗。杉本道山、西有穆山、岩佐普潤に参随した。明治二十年（一八八七）から二十九年まで鳴海の瑞泉寺に安居し、二十九年四月から三十二年十二月まで比叡山大学林に留学した。三十三年に天長寺へ晋住して仏教青年会、尚齒会修養部などを組織し地方布教に尽力した。大正二年（一九一三）十月には伊予別子鉱業所布教師、三年七月には台湾布教師を務めた。書、漢詩をよくしたが、昭和二十六年六月十九日に七十七歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』）

「教海一瀾」における

仏骨奉迎の記事について

川口 高風

明治仏教界において空前絶後の盛況で、大ニュースでもあった仏骨奉迎は、明治三十三年五月に暹羅国へ奉迎使及び随行人を派遣して奉迎されたものである。その報告書が政治家やジャーナリスト、海外事業家などによって刊行されているが、仏教界側では莫大な費用がかかり、奉迎の中心的人物が中傷誹謗されたり、負債償却の責任をとったり、宗門の公用金を流用したことから罷免されて投獄されたり悲惨な結末であった。そのため後世では特にとりあげられることなく、奉迎の副使や随行人らの報告書をみると失敗であったとか、事件であったとか、贅沢三昧の奉迎であったとか良いことは述べられていない。

そこで、当時の各宗の事情や意見などをながめ、各宗のといった対応を明らかにするため、各宗の機関誌から関連記事を取り出して考察してみたい。本稿では真宗本願寺派（現在、浄土真宗本願

寺派）の機関誌である「教海一瀾」からみてみよう。

真宗本願寺派（現在、浄土真宗本願寺派）の機関誌は教海雜誌社（京都市下京区油小路通花屋町上ル西若松町卅五番戸）より発行された「教海一瀾」である。内容は本山録事、社説、論説、紀伝、史伝、宗報、特報、教報、通信、海外教報、雑聞、教信、雑纂、報告などに細目されている。

本派本願寺は奉迎使に藤島了穂を派遣するなど協力的であり、明治三十三年四月二十九日発行の第六十七号の「釈尊御遺形奉迎各宗会議」が掲載されて以来各種の報告がある。しかし、覚王山日暹寺創建には同意せず、同盟の調印を謝絶して絶縁したことが第一八〇号（明治三十六年九月十五日発行）、第一八二号（明治三十六年十月五日発行）で報告されており、その理由や過程などが明らかにになる。

凡例

一、本稿は明治三十三年四月二十九日発行の第六十七号より同三十六年十月五日発行の第一八二号までの「教海一瀾」に掲載されている仏骨奉迎関係の記事を採録した。

一、翻刻にあたり仮名使いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に、変体仮名はすべて平仮名に改め句読点を付した。なお、明らかな誤植は訂正した。

● 積尊御遺形奉迎各宗会議 (明治33年4月29日 第六十七号)

積尊御遺形奉迎の件に付、本月十三日洛西妙心寺内、竜泉庵に於て、各宗派会議を開かれ、奉迎件の外に、皇太子殿下御慶事奉祝の件を併せて、衆議に附せられ、討議の末、三名の委員を撰んで本件を調査せしむることに決し、投票に依り本派委員神根善雄、大谷派委員土屋観山、建仁寺派委員瑞岳惟陶の三氏、此の特別委員に當撰し、更に十五日を以て特別委員会を竜泉庵に開き、修正議決の上、十八十九二十の三日を以て第二の各宗派会議を開きたり。而して其の議決の要項を掲ぐれば左の如し

(一) 積尊御遺形奉迎協議案

第一項 帝國仏教各宗派は奉迎使七員を選挙し、暹羅国へ派遣せしむる事。但真言、臨濟、曹洞、浄土、本願寺派、大谷派、日蓮の七宗派より各一員を撰出し、出発日時は奉迎使協議の上之を定む。○第二項 奉迎使は互撰を以て正使一員を置くことを得。○第三項 各宗派は暹羅王陛下、同国外務大臣、稲垣公使に宛管長連署の書面を寄贈し、兼て奉迎使に関する信任状を呈すべき事。○第四項 各宗派は暹羅王室及其他に物品を贈呈する事。但物品の価格は合て金壹千円を程度とし、其の撰択は奉迎使の協定に一任す。○第五項 各宗派は其宗派毎に奉迎委員一員を撰定し、奉迎に関する事件を取扱はしむべき事。但撰定委員の姓名住所等は、本日より五日以内に通知せられたし。○第六項 積尊御遺形奉安所及奉迎事務所を設置する事。但京都市下京区妙法院前町妙法院とす。○第七項 奉迎事務所に関

する費用は奉迎委員に於て之を議定すべき事。前項の費用は一
時借入金で以て之を支弁し、償却方法は別途に之を定むべし。

○第八項 奉迎使派遣の費用予算を定むること左の如し。

一金壹万円 奉迎使派遣費

内 金千円 奉呈物品購入費

金七千円 奉迎使往復費

金貳千円 奉迎使予備費

以上費目は、奉迎使に推薦せられたる宗派にて之を協議し一時立替べし。

第九項 御遺形仏事式典は大略左記の如し。其法要の施行方法は奉迎委員に於て之を協定すべき事。

一 上陸会 長崎に於て之を行ふ

一 奉迎会 京都に於て之を行ふ

一 仮安置会 同上

一 拝迎会 沿道各所に於て之を行ふ

一 拝胆会 仮安置の後期日を定め之を行ふ

第十項 奉迎委員は御遺形奉安に付、左記各項の事業計画を為し宗派会議に提出し決定すべき事

一 塔廟建設の件

一 同上建設地確定の件

一 右費用に関する件

第十一項 奉迎使に推薦したる各宗派に対しては、當会より代表者を以て之が請願を為すべき事

(二) 奉迎事務所略則

第一条 奉迎事務所を京都市妙法院内に置く

第二条 奉迎事務所は御遺形奉迎に関する一切の事務を処理する所とす

第三条 奉迎事務所に左の役員を置く

一 総理 一員

一 常務委員 十員

第四条 総理は常務委員の議決に依り碩徳を推選し、常務委員は各宗派委員中より互選するものとす

第五条 総理は常務委員を指揮し事務を監督す

第六条 常務委員の会議長は総理之に當り、其議決は多数決に依る。可否同数なるときは総理之を決裁するものとす

第七条 常務委員は互選を以て左の事務を分担す

一 庶務

一 司計

一 議事

第八条 事務所に書記、其他雇員を置く

第九条 常務委員の議決に依り各宗派の委員總會を開くことを得るものとす

(三) 特別協議案

一 皇太子殿下御慶事に付、各宗派奉祝献品を為し管長連署総代を以て祝詞を呈し、之が献納を為す事。但し議長指名を以て各宗派より委員五名を選定し、献納物品の選択及び之れに関する諸

般の事項を委托する事

(四) 特別協議案

一 釈尊御遺形を奉迎し及び之を奉安し、日本仏教者に於て永遠護持し奉らんが為め帝国仏教会を設立し、同会組織方法等は之を各宗派管長会に提出し議決を求むべし。

而して此の特別協議案に委員五名を議長より選みたるに名相海、土屋觀山、河野良心、小林栄運、稲葉元厚の五氏當選、猶ほ五氏をして奉迎常務委員の定るまで、同委員の事務をも執らしむることに決せり。

● 釈尊御遺形奉迎使并委員 (明治33年5月4日 第六十八号)

釈尊御遺形奉迎使は仏教各宗派より七員を選出することになり、真言、浄土、臨濟、曹洞、本願寺派、大谷派、日蓮の七宗派より一名を選む筈にて、本派よりは藤島了穩氏、其選に當り、暹羅国へ出張を申付けられたり。又た奉迎委員としては神根善雄氏に申付けられたり。

● 釈尊御遺形に関する經文 (明治33年5月29日 第六十九号)

大般涅槃經後分下、縮刷藏經、盈九、五十一に仏舍利分塔の事を載せあり。左の如し

迦毘羅等七國王臣、不_レ果_二所願_一、心懷_三悲憤_一、憤恚而還、各至_二本邑_一、成遣_二使臣_一、同詣_二拘尸_一、再求_二舍利_一、城人報曰、世界慈父、既於_二我界_一、而般涅槃、全身舍利、応留_二永劫_一、於此_二供養_一、終不_レ

分_二与外邑諸人_一、諸国答曰、若分者善、若不_レ与者、我當_下以_二疆力_一奪取_レ、城人告曰、徒事_二鬪諍_一、終不_レ可_レ得、闍王復使_二兩行大臣_一、馳_レ兵請_二分_一、告_二城人_一曰、若与者善、若不_レ見_レ分、我加_二兵力_一、疆奪將_レ去、答言、任意、

爾時、拘尸城中、所有壯士男女並閑弓射、即使_二總出_一、嚴整_二四兵_一、欲_レ与_二諸邑_一、交_レ兵合戰、爾時、毘離国、諸黎車種、遂集_二四兵_一、往_二拘尸城_一、在_二一面_一住、阿勒諸利帝利、亦集_二四兵_一、在_二一面_一住、毘耨国、諸婆羅門、亦集_二四兵_一、在_二一面_一住、遮羅迦羅国、諸釈子、亦集_二四兵_一、在_二一面_一住、師迦国、拘樓羅、亦集_二四兵_一、在_二一面_一住、波肩羅国、力士、亦集_二四兵_一、在_二拘尸城_一、在_二一面_一住、爾時、拘尸那城、七軍圍繞、為_二舍利故_一、各欲_二奪取_一、爾時、大衆中、有_二婆羅門_一、姓煙_一、在_二八軍中_一、高声大唱、拘尸城諸力士主聰、仏無量劫、積_レ善修_レ忍、諸君亦常聞_二讚忍法_一、今日何可_レ於_二仏滅後_一、為_二舍利_一故、起_レ兵相奪、諸君當_レ知、此非_二敬事_一、舍利現在、但當_二分作_二八分_一、諸力士言、敬_二如来議_一、爾時、姓煙婆羅門、即分_二舍利_一、以為_二八分_一、作_二八分竟_一、高声大唱、汝諸力士主聰、盛_二舍利_一瓶、請_レ以見与、欲_レ還_二頭那羅聚落_一起_二瓶塔_一、華香旛蓋妓樂供養、諸力士答言、敬_二從來請_一爾時、必波延那婆羅門居士、復_レ以_二高声_一大唱、拘尸城中、諸力士主聰、燒_レ仏処炭与_レ我、欲_レ還_二本国_一起_二炭塔_一、華香妓樂供養_レ諸力士答_二婆羅門言_一、敬_二從來請_一、爾時、拘尸城諸力士、得_二第一分舍利_一、即於_二國中_一、起_二塔_一、華香妓樂種々供養、波肩羅婆国力士、得_二第二分舍利_一、還_レ歸_二塔_一、種々

供養、師伽那婆国拘樓羅衆、得_二第三分舍利_一、還_レ歸_二起_二塔_一、種々供養、阿勒遮国諸利帝利、得_二第四分舍利_一、還_レ国_レ起_二塔_一、供養、毘耨国諸婆羅門、得_二第五分舍利_一、還_レ国_レ起_二塔_一、種々供養、毘離国諸黎車、得_二第六分舍利_一、還_レ国_レ起_二塔_一、種々供養、遮羅迦羅国諸釈子、得_二第七分舍利_一、還_レ国_レ起_二塔_一、華香供養、摩伽陀主阿闍世王、得_二第八分舍利_一、還_二王舍城_一起_二塔_一、華香妓樂種々供養、姓煙婆羅門、得_二盛_二舍利_一瓶上還_二頭那羅聚落_一起_二塔_一、華香供養、必波羅延那婆羅門居士、得_二炭還_レ国_一、起_二塔_一供養、爾時閻浮提中、八舍利塔、第九瓶塔、第十炭塔、如是分_二布舍利_一事已、時

諸經所讚多在弥陀

前後発意衆生 欲生阿弥陀仏国者 皆染著懈怠国土

不能前進 生阿弥陀仏国 億千万衆 時有一人 能

生阿弥陀仏国 何以故 皆由懈怠執 心不牢固

(菩薩從兜衝天降神母胎説広普經第二(菩薩処胎經))

八種身品第八、竺仏念訳(縮刷、盈十、涅槃、七十二左、)

●御遺形奉迎使出発 [明治33年5月29日 第六十九号]

已報の如く、本派奉迎使藤島了穂氏は各宗奉迎使一行と共に、去る二十二日午後一時二十四分七条発列車にて同三時五十分神戸着、翌二十三日正午神戸港解纜の博多丸に乗り、暹羅に向はれたり。

文苑〔明治33年6月13日 第七十号〕

送各宗諸師之暹羅國奉迎積尊靈骨序

暹羅國駐在公使稻垣君、以狀、牒吾國仏教各宗管長、曰客年二月
印度人別氏癸迦毘羅城附近古墳、得遺骨殉宝及壙銘、以古文記
之、仏教博士保氏考證其事、以為積尊茶毘後其遺裔之所築古墳、
英國印度政府乃分其靈骨殉宝於本國及暹羅國、暹王陛下、虔礼甚
厚、頒之緬甸及錫倫島、又以吾帝國仏法尤盛、將貽其一分於吾國
仏教各宗、使外務大臣伝旨於我、是無前之盛事、蓋仏法興隆之兆
也、其宜協各宗之力以奉迎之、於是、各宗相謀設委員、推予總理
其事、乃簡各宗派諸師、以奉迎之、癸有期、相共設齋以饒之、余
乃告之曰吾本師釈迦文仏之聖德遐邇固無論耳、仏法東漸上下帰
依、名僧高德相踵輩出、渡洋蹈海冒險排難、以輝仏日、潤法雨
者、史不絶書、然其跡概止於漢土、遠及印度者寥寥寡聞、當時交
通不便使之然耳、今則万里一瞬、四海比隣、窮欧米、巡宇内、指
不遑屈、而至功德如古名僧者則無聞、蓋有之、我未知之、是豈無
故而然哉、夫暹羅雖小、世界旧邦、而為我與國、國王陛下以吾國
奉仏教、特頒靈骨、盛旨之所在可知矣、今諸師以各宗簡撰、當靈
骨奉迎之事、万里飛航以赴其地、其職也榮、其任也重矣、余聞暹
羅國、上自王室、下至衆庶、無不帰仏、其僧侶持律嚴正、戒行尤
堅、其所執雖小乘、而比之吾國現狀、豈其無忸怩乎哉、是尤所當
深慮也、夫世界宗教仏法為大、宗義深奧高妙、信徒多殆占宇内人
口之四分、而不幸、其本國早衰、大乘妙旨專存於我、是世界仏教
者所同許也、而察其實則内顧而疚者頗多、其振刷興隆之任、果是

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

誰之責耶、今積尊遺蹟顯於印度、暹王陛下、特貽其靈骨於我國、
安知非大聖之靈、陰隲其拳、以然乎哉、實可謂仏法中興機矣、諸
師能幹其事、以奉迎于此、内之各宗和衷協濟、对靈骨如对聖身、
虔誠修勤、各務其當務、為其可為、外之大放修教光明、布大乘妙
理彼土、以振刷興隆吾宗、使仏日重輝、法雨永潤、豈非一大美事
哉、若夫空失此機、無克有為、則豈獨負暹王之盛旨哉、辱帝國之
体面哉、其奉对大聖靈骨復何顏拈念珠、披袈裟、以周旋於其間
哉、故余以此舉、卜我國仏教興廢隆替之運也、嗚呼諸師往矣勉
旃、刮眸以待其還、

維時明治三十三年五月十八日

積尊靈骨奉迎事務總理

妙法院門跡大僧正 村 田 寂 順

送奉迎積尊遺形各宗諸師渡暹

南 台 寂 順

奉迎万里渡南洋 靈物東來是吉祥 預祝諸師回錫処
扶桑仏日更生光 鉄輪截海乱涛開 万里虔迎亦壯哉
大聖似追東漸約 更分靈骨渡洋來 暹王頒贈仏遺形
欣喜奉迎雙樹靈 大白牛車容彼土 報恩須布一乘經

送真宗本願寺派顧問。藤島了穩師。

帶仏骨奉迎之任。赴于暹羅國。

金龜仏教中学内辱知 安 井 承 信

君不見薄伽梵之修多羅。駕他宗教真理多。此經何幸留我國。四千人仰仏陀。」又不見三藏深入五天境。跋涉流沙与葱嶺。齋還汗牛充棟書。恩波洋洋歲月永。」聞説西曆千八百九十七年。仏骨放光印度天。暹国奉迎四分一。盤谷府中靈光円。」日本公使姓是稻。欲通南北仏徒好。奏聞国王得割分。迎之日域為国宝。奉迎使僧総俊英。就中得人瞻岳兄。五州無処不熟路。猛虎深山独歩情。」漢洋文学極精粹。到处何用通訳事。鸞舞鳳翔東洋文。」蟹行蝸歩歐洲字。」判知蜻蜒以外之乾坤。奇景定慰英雄魂。山谷竜蟠雲吹氣。汪洋鯨躍浪留痕。」翻憶八万四千伝経日。唯恨仏骨欠其一。方是柔扶迎骨初。仏教史上可特筆。」嗚呼晒骨彈舌在此游。」豪懷何抱別離憂。」予想靈光照波帰朝際。聖骨載在高僧舟。

秋村曰。初説仏教真理之卓越。与三藏伝経之艱難。次入仏骨奉迎之始末。進及藤島顧問之身上。回顧映帶。終帰重於仏骨奉迎。布置問架。頗得其宜。起結照応。尤極其妙。結末二句。何等点染。何等彩色。胆岳上人。船中無聊之時。朗吟此詩。一唱三嘆。呼妙也必矣。

● 积尊御遺形奉安に関する各宗派管長會議〔明治33年6月13日

第七十号〕

(本派の奉安に対する意見)

积尊御遺形奉安に関する各宗派管長會議は、意外にも我が本派には同意する能はざるの不幸を見るに至れり。否な本派の云ふ所は、遂に會議の納れざる所となれり。會議は遂に本派を棄て、顧

みざること、なれり。吾人は积尊の御遺形の暹羅皇帝の御厚意に依りて帝国に御渡来あらせ給ふの盛事に際し、斯くも相分れしめらるゝを遺憾とするなり、教界全体の為めに遺憾とするなり。然れども奈何せん本派は、其の忍ぶべからざることを忍び、其の不可なるを知りて、之れに曲従することは為し能はざる所なるを、故に被れの為めに擯けらるゝも深く怪むに足らざる歎。事の茲に至れる顛末は詳細次号に報道すべしと雖も、今其の概略を左に記載せん。

今回の管長會議は本月五日より八日まで、洛西妙心寺内竜泉庵に於て開かれたり。会する者は、真言、天台、浄土西山派、臨濟各派（建長寺門寛、黄檗、曹洞、真宗各派、日蓮、融通念仏、時宗、華厳、真言律宗、等の管長又は管長代理委員等四十余名にてありき。是れより先き宗派會議に於て選出したる十名の奉迎常務委員は、奉迎事務所にて今回の議案を起草したり。

此の議案起草に際し或る派の人々は、原々案即ち起草會議の原案とも云ふべきものを此の常務委員に提出せり。常務委員の多数は之を採用して其俚今回の議案とせんと試みたりと。其の要点を示さば

帝国仏教会を組織し僧俗を問はず入会せしむる事

本会の目的は仏教を以て国家の性格を維持し、国民の大義を發揮する事

会員を入会せしめて金壹千万円を募集する事

事業として十町四方の地所を購求し、中央に十三階の仏塔を建

て、四隅に学校病院図書館等を設くる事

此の草案は如何にも狂気じみたるを覚えたれば、本派より出たる委員は、其の壹千万円の金員は如何にして作り得らるゝやを詰問し、其末壹千万円の金額は之を削ることゝなりたりと。又た国家の性格を維持するなど云へることは、如何にも政治的の意味に解せらるれば、何等かの道具に使はんとするに似て宜しからずと述べたれば、此の二点は改りたるも、猶ほ不可なる点尠なからざりき。而して弥々原案となりて、今回の會議に提出せられたるもの、要点は左の如し。

第一 本会は帝国仏教会と称し本部を京都市に置き支部を各地方に設く

第二 本会は仏教を以て国民固有の道徳を涵養するを目的とす

第三 本会の目的を達せんが為め順次左の事業を為す

一 大雄殿の諸建築

二 教育事業

三 慈善事業

第四以下趣意 壹円以上入会金を出すの會員百五十万人に達したる時、七ヶ年間を以て大雄殿御遺形奉安所建設の工事を竣る、他の事業は更に募金して之を起す。

(右の外記載を省く)

前記の原案に依れば、彼の原々案の壹千万円は声を隠したれども、猶ほ百五十拾万円の巨大なる呼声は存在せるなり。此の巨額なる金員は一般俗人の膏血を絞りて得んとするの方案なりとす。此

の如き方案には本派の忍んで同意する能はざる所なり。斯ることの僧侶の口より叫ばれんことを予想せしものにや、世間の新聞雜誌は、概ね奉迎の美事を、冷評し痛罵せり。一々枚挙に遑あらざれども一二を挙ぐれば、

口を奉迎に藉り頻りに布施を募りて、己れの腹を肥やすが如きことある大に非、檀徒に於て斯る欺瞞に罹らざる様用意せざるべからず。(日本新聞)

仏徒の根性全く餓鬼にして、此世ながら餓鬼道にさまよふものと云ふべし。今度シャムにて仏骨を発見せりとして我国に之を迎んとするが如き、果して何の意味する所ぞ。仏の眞の活動力はその精神にあるべし。死体枯骨何の用をかなさん。昔は死せる諸葛生ける仲達を走らせ生人の恥辱となれり。今亦た生ける仏徒は、死せる枯骨に依りて仏教を興さんと欲せるか。否なく生ける仏徒が枯骨の力を借りて仏教を興さんとするの意あらば、猶ほ可なりと雖も、想ふに彼等餓鬼根性は、一切の貪欲を尽くして猶ほ足らず。枯仏骨を迎へて之を食物にせんと欲するのみ。日本の仏徒に喰はるゝ、仏骨こそ、実に哀れ云々、(日本主義雜誌)

此等素より不當の論評なるに相違なしと雖、目下僧界の墮落せる状況に照らして、世間は早くも我が教界を推断して此の如くなるべしと論ぜるものなり。此等の論評たる素より不埒千万なりと雖も僧界の墮落せるより推断せられたりとすれば、吾人は甚だ慚愧に堪へざるなり。故に苟も遺弟として教を積門に奉ずる以上は、

今回の如き盛事に際しては、先づ金を他に募ることを為すよりは、己れ他に先んじて、金を投じ、之を俗人の手を藉るに先んじて、僧侶として其の奉安の殿堂をば建設せんことこそ望まじけれ。万民の膏血を絞り上げ、七ヶ年を費して巨大なる土木を起す

よりは、七万の僧侶各自に金貳円を投じ、拾參四万円位の殿堂を建設し、己れに於て先づ釈尊崇仰遺徳顯揚の実を挙げ、以て衆人の範たらんことを期せずんばならず。斯くの如く己れを責ることに厚くして自行欠るところなき時は、自ら国民の道徳をも涵養するに足らん歟。然るに事茲に出でずして、己れは半銭も出金せず却て之を他の衆人より絞り取らんとて企て、己れに修る所の道徳なくして、国民の道徳を涵養するを目的とす杯と。余り勝手の善き話にあらずや。是に於て乎新聞雑誌の先見適中せりと云ふ者あるも吾人は之れに対して弁疏するの辞を知らざるなり。左ればにや本派に於ける意見の如き、全く是に見る所ありと見え、過日の管長会議に於ける本派出席者は左の如き理由を陳べられたり。

(一) 仏教会と名け国民固有の道徳を涵養するを目的とすとの原案なるも、抑々会なるものを設るの必要を見ず釈尊御遺形を奉安するの殿堂を建設するが目的なれば建設事務所を設け、其事業を完成すれば足れり。何ぞ煩はしく会を組織するの要あらんや。特に会として組織する以上は随て入会退会の煩を見ん。今此の奉迎の盛事にして不祥にも退会等の事を他日に見んとするの恐れあるの会を組織するは甚だ不可なり。故に入退会の煩を要せざる建築事務所と為し置かば、一の賛成の理由の下に何

人も来りて事業を助くべきなり。已に建築事務所を設け建築の功にして挙る日の来らんか。各宗の協同一致は期せずして成る。果して然るときは会と云へる範籬を以て制限を施さずとも自然の会は結ばるゝものなればなり。

(二) 次に仏教会と云ひ、国民固有の道徳を涵養すと云ふものは、或は人をして猶ほ政治的意味を有するかの如く疑はしむるの恐れあり。已に釈尊御遺形の奉安崇敬に在れば、須く奉安会等適切なる名称を用ゐ、其目的として規定する所も、同く之に適ふの文字を用ゐざるべからず。若し万一にも此の会が政治的意味あるものと誤解せられ、仏教徒野心運動の一機関の如く見らるゝに於ては、今回奉安の盛事に対し幾多の故障を招き、中途にして進退に苦むが如きことあらん。故に会名及び目的の点に於て、甚だ不可とする所なり。

(三) 本会事業の規定に於けるや、殿堂の建設、教育、及び慈善事業の文字ありて、壮大に失するの恐れあり。一の建設事業にせよ、原案の如くするとき、壹百五拾万円を要すとせり。之に加るに教育及び慈善の業を以てす。其の金額の莫大なる知るべきなり、如何にも事を好むに當れり。如何にも御遺形に托して色々の事を働かんとするに當れり。如何にも金取り主義に大風呂敷を拡ぐるに當れり。而して顧みて己れの宗派の現状を見る時は如何。堂宇の修繕に手が廻り兼る者あるにあらずや。古社寺保存会の庇蔭に由りて氣息奄々たるものあるにあらずや。己れの現状此の如くなるをも省みずして、進んで此の如き莫大

なる募金を企てんとす。世間之れに應ずる者の寛束なきを憂るなり。

(四) 特に去る四月、妙心寺に於ける宗派會議の議決たるや「釈尊御遺形を奉安し、及び之を永遠に護持し、奉らんが為め帝国仏教会を組織す」とありて、組織の目的は即ち一に奉安護持の外あらざるなり。然に本案の如きは全く奉安の外に、教育慈善等の事業を附着せしめ、四月會議の議決に戻り、他の事業と共に同く挙げんとするは不可なり。

(五) 事を遂る方法としても三事業を列挙するは不可なり。第一の事業にさへ多額の金円を要すとせり。今日之に金円を投ずるの後ち、他日又た第二第三の事業にも金円を投ぜざるべからずとの予想を今より抱かしむるは、事を完うするに於て妨げあればなり。

是に於て乎。原案は更に七名の修正委員に托し調査せしめらるゝこととなり。幾分か不都合の点を除きたるも矢張り同一の精神なる修正案を見ることゝはなれり。修正の要は、

(一) 帝国仏教会の名を改めて日本大菩提会とす

(二) 目的の規定を「釈尊の遺形を奉安し遺徳を顕揚し以て国民の道徳を涵養す」に改む

(三) 事業を「第一期覚王殿建築、第二期教育及慈善」に改む
(右の外之を略す)

此の如き修正案は、唯だ「帝国仏教会」の名を「日本大菩提会」の名に改めたるに過ぎず。本派の素より同意する能はざる所な

り。而して本派が奉安に対して執る所の要旨は左の如し。

原案の如く莫大なる金員を国民より募ることを先きとせずして、遺弟として釈尊に奉ずるの赤誠を抽んずることを先とすべし。此くするに於ては僧侶自ら進んで自己の懐より出金すべし。僧侶一人金弍円を出だすとしても全国僧侶にて拾参四万の金員は得らるべし。此金にて殿堂を建設するに不足は感ぜざるべし。七年の後ち、無理算段にて巨大なる工事を起すよりも、今年忽ちにして正當なる金円にて堂宇を建設すること、却て仏意に契當するを信ず。要は僧侶として自家の信根に培ひ、行儀に省み、深く自行に尽すことあらば、自ら国民道徳の標準とも為り得べけん。然る後ち国民道徳の涵養をも叫び得ん。然に事茲に出でずして徒らに口頭道徳を叫ぶも誰れか之を信ぜん。故に本案の規定をば右の如く改めんことを望む。

然に此の本派の意見は、各宗會議の納るゝ所とならず。本派は御遺形の奉迎及び奉安所建設に同意しながらも已むを得ず、日本大菩提会組織の決議には賛同する能はざることゝなれり。

事の茲に至るまでには、再三の交渉会あり。或は村田門跡の再三、調停の勞を執らるゝありて、種々の手数を経たるも、遂に我が意見は他の納れざる所となりたり。豈に遺憾なしとせんや。

而して、右決議の後ち本派本山より、贈られたる同意謝絶の書面は左の如し。以て本派の意見如何を窺ふに足らんかな。

今般各宗派管長會議に於て大菩提会を組織し會員を募集し、釈尊御遺形奉安之殿堂建設等之事業企画可相成段議決有之候

処、本派に於ては殿堂建設の義者無論賛成ニ付、右費用之内へ本派より金貳万円寄附可致候。乍去大菩提会組織之義者断然同意難致候条此段申進候也。

明治三十三年六月十日

真宗本願寺派管長代理近松尊定

奉迎事務所総理

村田寂順殿

吾人は此の同意謝絶の書面を得て読むこと再三、覚え快と叫びたり。大菩提会組織の義に就て相分れたるを遺憾と思ひしが、本派の純精潔白なる精神に依りて、作られたる此の書面は其遺憾を償ふて余りあればなり。自行を先きにすべしとの本派の意見、此の紙面に溢れ、腐敗墮落の僧界も、本派あるが為めに、猶ほ幾分の面目を保つことを得んと思はるればなり。本派が衆に先んじ金貳万円を出金せらるゝものと。彼の他人を先きにして自分を後ちにする者と比較せば、是れ豈に天淵雲泥の差のみならんや。吾人は次号の紙上に於て、会議の末に就て顛の記事論評を猶ほ一層詳細に報道せんとす。

●管長会議出席者

今回の洛西妙心寺に開きたる管長会議出席者は左の如し。席次番号の順に依り之を掲ぐ。

- 一番 天台座主 中山 玄航
- 二番 真宗誠照寺管長 二条 秀源
- 三番 臨濟宗大徳寺派管長 菅 広州

四番	真宗興正寺派管長	花園 沢称
五番	華嚴宗管長	佐保山晋円
六番	曹洞宗管長代理	織田 雪巖
七番	臨濟宗妙心寺派管長	小林 宗補
八番	臨濟宗天竜寺派管長	橋本 蛾山
九番	真宗大谷派管長代理	石川 舜台
十番	真宗本願寺派管長代理	近松 尊定
十一番	真言宗管長代理	土宜 法竜
十二番	臨濟宗相国寺派管長代理	伊藤 貫宗
十三番	臨濟宗東福寺派委員	林 泰嶺
十四番	臨濟宗建仁寺派管長代理	瑞岳 惟陶
十五番	臨濟宗天竜寺派委員	北条 周篤
十六番	真宗仏光寺派委員	渋谷 円順
十七番	真宗誠照寺派委員	藤井 学道
十八番	真宗専修寺派委員	藤山 直修
十九番	黄檗宗管長代理	鈴木 恵眼
二十番	天台宗真盛派委員	古泉 惟信
廿一番	臨濟宗相国寺派委員	宮崎 旃芳
廿二番	真言宗委員	岩崎 元随
廿三番	真宗興正派委員	三原 俊栄
廿四番	真宗大谷派委員	和田 円什
廿五番	同 委員	児門 賢象
廿六番	臨濟宗南禅寺派委員	畑 道温

廿七番	融通念仏宗管長代理	黒田	寛州
廿八番	曹洞宗委員	弘津	説三
廿九番	真宗本願寺派委員	神根	善雄
三十番	華嚴宗委員	雲井	春海
卅一番	臨濟宗南禅寺派委員	岩瀬	靈雲
卅二番	真宗木辺派管長代理	松原	深締
卅三番	臨濟宗永源寺派委員	最下	祐禪
卅四番	曹洞宗委員	有沢	香庵
卅五番	浄土宗西山派管長代理	青井	俊法
卅六番	天台宗委員	中村	勝契
卅七番	日蓮宗委員	田村	豊亮
卅八番	浄土宗西山派委員	靈群	諦全
卅九番	真言宗委員	小林	栄運
四十番	臨濟宗大徳寺派委員	小堀	宗長
四一番	時宗委員	河野	良心
四二番	真宗仏光寺派管長代理	有馬	憲文
四三番	真宗山元派管長代理	星野	貫了
四四番	真宗本願寺派委員	管田	実言
四五番	臨濟宗妙心寺派委員	稲葉	元厚

●奉迎順序協議案

洛西妙心寺に於て御遺形奉迎順序の協議を本月十日開きたる趣なるが、其の協議案は左の如くなりしと。

議案

明治三十三年四月の議事録奉迎協議案第九項の四により拝迎会地を定むる。左の如し

- 第一 長崎 二泊
- 第二 佐賀 一泊
- 第三 博多 一泊
- 第四 小倉 一泊
- 第五 赤間関 一泊
- 第六 広島 二泊
- 第七 尾之道 一泊
- 第八 岡山 一泊
- 第九 姫路 一泊
- 第十 神戸 一泊
- 第十一 大阪 二泊
- 第十二 京都御着 奉迎会

- 仮奉安会は御着一週間以後に於て一週間之を行ふこと
- 拝瞻会は明治三十四年四月八日より同五月十五日迄施行のこと
- 前条の期間に於て塔廟建設の起式を行ふ
- 上陸会、奉迎会、拝瞻会の三会施行の日に於て、各宗派大小の寺院は梵鐘を鳴し相當の供養をなすべきこと

●積尊遺骨の発見に就て〔明治33年6月26日 第七十一号〕

文学博士 高楠順次郎

○総論

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

一昨年、印度に於て、発掘したる仏世尊の遺骨、及その副品は、我国に於て仏骨奉迎の事あるに伴ひ、端なく世の注意を喚起したり。仏教者の間に於ては、奉迎讃否の喧しく聞えしも、とにかく、各派連合して、数万の金を費やし、十数名の特使を派したるを見れば、その奉迎の事は仏教の輿論となりしもの、如し。之が為批評者の眼光も一層之に向ふに到り、宗教者としては我仏教者はその思想慥かに十字軍以前に劣ると評し、仏陀伽耶回復事件の再演なりと評し、若くは我国には何故に韓退之なきかと冷笑せるものもありたるが、その仏骨に関する詳細に到りては、尚疑雲の間に隠蔽せられ、之を迎ふるものも、之を非難せるものも、俱に之を知らざるもの、如し。その奉迎の可否は之を別問題とし、その史伝の存否真偽に到りては、学者の宜しく攻究すべき所なり。之れに関する幾多の質問は、遂に予をして一言の止むを得ざるを感ぜしめたり。

○仏滅後遺骨の分配

仏経中、最多く歴史的事実を包含し、最も広く信者の記憶に残れるを「涅槃経」とす。現存の涅槃経中、最歴史的价值あるを巴利語の「大般涅槃経」とす。その第六篇は正しく、仏滅の事跡、荼毘、分骨、造塔供養の模様を明記せり。今略して之を示さん。

仏二月八日の暁、「我滅後、所説の法戒、即是れ汝が大師、諸行は実に無常なり、勇猛、度脱を期せよ」との言を遺し、八十歳を一期として涅槃に入る。俱尸那羅の市長、その報告に接し、香花音楽を命じ、沙羅雙樹の林中に会し、遺骸を擁護し一

日を過ごし、二三日乃至六日に到る。七日の朝に及び、市の南郭に於て荼毘の式を行はんことを議す。八人の力士遺骸を動かさんとするに遂に能はず。之を尊者阿菟楼駄（無滅と訳せり）に告ぐ、尊者その神意に反するを教ゆ。遂に之を北郭に運び、般彈那廟（市民の祖廟）に安置し荼毘の用意をなす。その火を点ぜんとするや、何故かその意を果す能はず。又阿菟楼駄尊者に告ぐ、尊者曰く仏意大迦葉の会葬を竣つと。遂にその到るを待ち葬式の終る時に、棺辺自然に発火し、荼毘の礼成就せり。その時使を遣はし縁故を具して遺骨を請求せしもの、

- 一、摩迦陀国 阿闍世王 (Magadha, Ajātasattu)
 - 二、毘舍離国 栗咭毘族 (Vesālī, Licchavi)
 - 三、迦維羅国 釈迦族 (Kapilavasthu, Sākya)
- 是れ今回の発掘に最關係あるものにして、釈尊と同族同国にして遺骸に対し、最権力ありしもの也

- 四、菴羅割波国 跋離族 (Allakappa, Buliya)
 - 五、羅摩邑 拘利耶族 (Rāma-gāma, Koliya)
 - 六、吠率奴国 波羅門族 (Veha-dīya, Brahmana)
 - 七、波婆邑 摩羅族 (Pava, Malla)
 - 八、俱尸那羅市 摩羅族 (Kusinara, Malla)
- 右八種族に対し舍利の分配終りたる後、華芭莉邑の孔雀王来り、請求せしも、已に余す所なきを以て、火葬地に残りし炭と灰とを受け之を持去れり。
- 九、華芭莉邑 孔雀王 (Pipphalivana, Moriya)

而して右の如く命を受けて舍利の等分を司りたる波羅門、徒盧那世尊の遺骸を入れありし大瓶を請受けて之を祭り供養せり。

十、香姓波羅門 徒盧那造塔 (Brahmana, Drona)

右の事跡は巴利書涅槃經に出で、我国に伝はれる漢訳の經中には仏本行經八王分舍利品第三十一、長阿含遊行經第二之三、説一切有部毘奈耶雜事第三十九、大般涅槃經後分卷下、仏所行讚經分舍利品第二十八等少しく異同あるも、皆舍利分配の事を記す、即「八王起八塔、金瓶及炭灰、如是闍浮提、始起於十塔」の事實は南北両仏教の聖書に明記しあるも、果して明確なる史的事実なるや否や何人も之を考證するを得ず。而るに仏滅後二千四百年を経る今日に至り、この南北両仏教聖書中に記せる仏骨分配の事跡は果してその事実なりしを證するの一大発見に遭逢せり。

○ 釈族遺骨龕の発見

今茲に「舍利」と称せしは、我国に名づくる如きものに非ずして、唯「遺骨」と云へる義なり。「舍利」は梵語にて精しくは設利羅と称し「身」の義なり。夫より転じて「遺骸」を意味し、遂に「遺骨」を呼称するに至れり。世尊の遺骸は荼毘に附したれば、後世に伝はりしは唯その遺骨の碎片のみ。而してその一部分を二十四世紀を経る今日に於て発見せりと云ふは、抑々如何なる證跡ありて主張せるものなるが請ふ暫く茲に之を述べん。

今より四年の前印度尼波羅領域内に於て、釈尊の誕生地なる嵐毘尼園 (Lumbini) の記念碑を発掘し、続ひて仏教に特殊の縁故あ

る迦維羅城の故趾をも発見するを得、印度古代の地理に於て一大変革を來たし、仏教歴史の上に一の新生面を開きたることありしが、その時より印度古学研究者の眼光は更にその地方に転じ、尼波羅領と英領との境域地方に於ける幾多の高丘は恰も印度古代史の紙葉を開くと一般、無限の興味を以て、その発掘を思立たしむるに到れり。その数多き高丘の中最高くして最望みあるものは、偶然にも一歐人ベツペ氏の所有地に存在せり。氏は經驗ある技師にして、現今ピプラー (Piprahwa) と名けらるゝ一邑に莊園を有したり。氏がその邸内なる高丘の発掘に従事したるは一千八百九十七年 (明治三十年) の春なりき、氏は先づ丘上を横断せる溝 (幅一丈深八尺) より掘起こし、同年九月に至り、印度政府の土木技師スミス氏來り之を検し、その太古の仏教廟なることを證し、且その中心を發掘し地平線に達せば、必古器物件の存在するあらんことを述べ、その發達の進行を促したり。

翌一千八百九十八年 (明治三十一年) 一月より、その發掘を継続し、丘の中心に方一丈の穴を鑿ち、廟底に達したり初め一丈の深に達せし時、一の蠟石製の破壺を発見したりき、その中には土に混ざる飾珠、水晶、金銀の裝飾物を有せり。更に下りて一丈八尺の深に至りしに、一疊の大石板に達す。徐ろに之を除けば広大な磨石製の大櫃に達す。櫃中の物件完全に保存せらる。その内容実に左の如し

- 一、蠟石壺 (一) 高六寸 径四寸
- 二、蠟石壺 (二) 高七寸 径四寸五分

三、蠟石器 高五寸五分 径五寸五分
 四、蠟石篋 高三寸八分 径一寸五分
 五、水晶瓶 高三寸五分 径三寸二分

右の外尚数多の水瓶ありしもの、如く、その破片を土中に認めたり。而して存在せし五種の壺瓶、并に之を納めたる大石櫃は皆完全無欠にして、刀斧の痕跡尚明白に認め得べしと云ふ。唯この石櫃を蓋ひたる大石板は破れて四片となり居れども片々互に密着し、毫もその内容を害する所なかりしと云へり。而して之を中心として外圍に構造せられたる塔廟の広大なるは、左の量尺記録を以て推測し得べし。

- 一、丘廟の地底 直径凡十九間(百十六呎)
 - 二、丘廟現時の高 凡二丈一尺(二十一呎半)
- (此に仍りて現廟は古代の塔中には、第二等位に属するものにして、その直径に比例して、割合にその塔の低きは儘かにその構造の太古時代に属するものなりと云ふ)
- 三、石櫃の蓋たる石板の重 四百八磅
 - 四、石櫃全体の重量 壹千五百参拾七磅
 - 五、丘廟全体の構造は、皆悉鍊瓦にして、之を密着せしむる為用ひたる泥土は、日本の壁土の如く、藁を混じたるものを用う。
 - 六、丘の中心に一の縦穴あり、井又は樋の如く廟底に直下せり、大小、方円、時に差ありと雖、直径一尺より四寸に至

る。その底に達する処は長方形にして一尺七寸と五寸の辺を有せりと云ふ。

(この穴は何の爲めにせるものなるか。今に不分明なり。何れの丘廟にも皆之れありと雖諸説未だ一致せず。思ふに是れ或は新骨を収むるの穴には非るか、我国の俱会一処の墓廟より察すれば或はその目的なるやも知るべからず)


この丘廟の東側に一大邸宅の廢趾の如き敷地あり。測量技師の説に依れば是一の寺院なるべく、尚全部を發掘せば仏像、仏具を發見すべき望みありと云ふ。この丘陵はゴラクプール(Gorakhpur)の東隣なるバスター邑(Basti)の東北隅にしてビルドプール(Birdpur)のピプラーバ(Piprahva)と名けられたる地域に在りて、北緯二十七度二二東經八十三度九に位し、英領印度の境内に属せり。是より東北五里余にして、釈尊の降誕地なる嵐毘尼園の紀念標に達す。こは今ルミンディ、タパー(Runindi Tappa)と稱し尼波羅領内に属す。而して釈迦族の首都たりし迦維羅城は、北緯三十七度三七、東經八十三度八に在り同じく尼波羅領に属す。

○仏塔石龕中の遺物

予が今「丘廟」と稱し、「塔廟」と云ふは、率觀婆又は蘇塔婆(Supa)と稱するものにして、我国の古墳又は山陵に相當せるものなり。我国に稱してソトバと云ひ、塔と稱するも、今はその用を異にせるも、皆之に起因せるものなり。そは梵語スツーパーは「高頭」の義なりと云ひて、墳墓、廟地の標識に用ゐたるものを

も、同一名を以て称するに至れるなり。さてこの釈氏の遺骨廟を発掘し、五種の壺瓶を発見したるが、その内容は如何なるものなりしや。実に他に類例を見ざる遺骨宝物を有し、その豊富なる従来の発見物に優り、数百点の多きに達せり。一々之を調査せば人種学、宗教学、古学の上に資する所多かるべきも、こは今その所にあらざるを以て、その重要なものゝみを挙げ、その一斑を示さん。

第一遺宝に関するもの

- 一、黄金薄板 数種（獅子の立像、両個の梵字）
- 二、黄金星章（鈍形八角）
- 三、黄金星章（尖形八角）
- 四、五、水晶諸宝製華葉 数十種
- 六、両様三宝章  (Tri-ratna)
- 七、銀製俱利迦羅章
- 八、寶石製鳥
- 九、金属製鳥
- 十、金製十字章
- 十一、黄金製人像（薄板）
- 十二、黄金製象像（薄板）
- 十三、黄金薄板卍字章両様 (Svastika)
- 十四、珊瑚の断片 数種
- 十五、女人像（黄金薄板製）後光具足（十一、十五の像なしの外）
- 十七、真珠小顆 数種

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

十八、黄金平円板（波状美飾）

十九、黄金星形板（粒状美飾）

二十、黄緑各色貫珠（寶石の小顆は皆念珠の如く糸にて貫きありしもの、如し。二、三のものは銀糸の高附着せるものありしと云。）

その石櫃の大なると、之に納めたる宝物の豊富とは遺骨に対する尊敬の盛大なりしを證するものなり。されどこの遺骨は遺骨と同時のものと思得べきや、否や。その物件中、遺骨と同時代のもの、存せるありや否やは、今後の研究によりて始めて明白なるに到るべし。

第二遺骨に関するもの

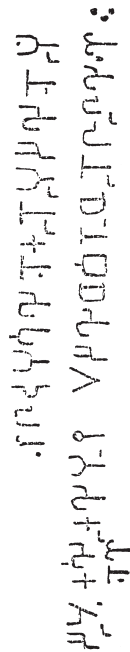
蠟石壺中に収め在りしは、全く骨の破片にして、その中小形なる一壺は蓋部に一句の刻文を有せり。その刻文に仍れば埋葬主は、之に蔵せる骨片は、慥かに釈迦仏の聖骸の一部分たりしを確信せしものたることを證せり。刻文を有せる蠟石壺は実に左の外形を有せり。



○仏遺骨に関する刻文

仏の遺骨を蔵めたる小蠟石壺の蓋上に彫せる刻文は、全く阿輸

迦王時代（紀元前二百五十年）に通用したる文字にして、ブ
ユーレル氏印度字像字研究の結果に仍ればギルナル、デルヒ両
所の碑文の字に最近く、阿輸迦王時代若くはその以前に刻した
ものなるべしブユーレル博士自身は、全く阿輸迦以前たること
を明言せしも今その字形より見る時は、殊に阿輸迦前と見るべ
き特徴なきものゝ如し。その刻文全部は実に左の如し。



音 訳

第一行 Iyah Saliamidhane Budhasabhagavate Sakiyamni Sukitibha

第二行 Tinañ Sabhaginikanani Saputadalanani

右は其彫刻は随分杜撰のものにして、太古の特徴を存せり。第
一行の右上辺に書したるは、彫刻の際誤りて脱せしものを添加
せしなり。且右に出せる謄写文を誤なしとせば、第二行の第二
の**ハ**は**ハ**の誤ならざるべからず。又母音に長短の別なきも或
は彫者の罪に帰すべきやも計り難し。今この刻文を巴利語に訳
せば左の如し。リス、デビッツ氏の指定に仍る

Idañ Sarira-nidhanam Buddhassa Bhagarato Sakiyanam
Sukitibhaukanam Sabhaginimni Saputtadānañ

訳 文

薄迦梵仏陀の遺骨を蔵せるこの聖龕は釈迦族、即大聖（名声

高き人）の兄弟、姉妹、その兒子、妻室等の所有に属す。

この刻文の関する特殊の点を列挙せば大凡左の如し

- 一、この文に用ひたる方言は、古摩迦陀語と同じくアル(Ṛ)とエル(Ṛ)とを混ざること、即サリラ (Sāliṭa) は梵語のシャリラー (Sāra) なり。
- 二、古文の偈頌に用ひたる語、即偈陀語と同じくアム (am) の代りにエ (e) を用ふること、即ニダーナム (Nidhanam) に対してニダーネ (Nidhane) を用う。
- 三、摩迦陀語と同じく語尾オ (o) の代りにエ (e) を用ふ。即バガバト(Bhagavato) に非ずして (Bhagavate) なり。
- 四、文字は前に述べし如く、近傍の碑文と同文字にして、所謂阿輸迦文字なり。
- 五、スキヂ (Sukiti) は梵語スキルヂ (善称) にして高名なる人、著聞の士の義なり。大聖若くは世尊と云ふも可なるべし、仏を指す。
- 六、この刻文の時代は、慥に限定するを得ざれども阿輸迦時代若くはその以前たるは疑ひなし。今迄発見の碑文中には最古のものゝ一たり。
- 七、仏滅後間もなく彫刻せしものたるも知るべからざるなり。

○ 仏骨廟発掘刻文発見の學術上に及ぼす功力

仏誕生地碑文の発見は、実に印度地理學上に一大影響を及ぼし、迦維羅城の地理、之に関連して近傍聖蹟の位置の確定を來たし、

嵐毘尼産殿の古跡を慥むるを得たり。而して今回仏骨龕の発見は亦之を小にして仏教史上、之を大にしては印度古代史上に一大光明を与へたるものと云ふべし。その副生の功果多き中、その至要なるものを挙ぐれば、

第一、大涅槃經に「如是我聞」の事実として述べたる仏骨分配の事実、殊に釈迦種族が遺骨請求者の一部として、その分骨を得、造塔供養せし事實はこの刻文に仍りて史上の事実となりしこと即「迦維羅衛國諸釈種民衆、得舍利分已、歸其國、起塔廟供養」と云へる涅槃遊行經の説は疑ふべからざること。

第二、釈迦種族の中心は、迦維羅衛國にして雪山々麓の一人種たりしこと歴史上の事実となりたること。

第三、この刻文は釈迦種族に関する最古の記録にして釈迦種族に関する凡ての伝説、經説等の時代若くば真偽を判別する標準となり得ること。

右は直接の影響なるが、尚ほこの刻文、遺宝物、構造法等の人類学、宗教学、建築学、古学等に与ふる利益亦多かるべし。如是学術上に与ふる利益多きより、この発見の事業、早く已に世の注目を牽き、之に従事せしはペツペ、スミス、フューレル氏の三氏にして、前後之に關してその意見を公にせしもの、右の三氏の外維納大学のユブーレル博士、英のホエー氏、巴理大学のバルト博士、英亜細亞協會のリス、デビッツ博士、萊府大学のプロフ氏（印度現住）等にして、仏国政府は殊に梵語教授レビー博士を印度に派遣し、之を視察せしめたり。雜誌界にては本年一月のリテ

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

ラリ、ダイゼスト、一昨年四月及七月の亜細亞協會誌及昨年四月の同誌、一昨年二月中のパイヲニア及仏国学士会院誌その他に見ゆ

如是発掘せられたる古宝物は発掘主之を私宝となすを惜み、悉皆之を英政府に奉納せりと云ふ。政府は発掘者の望に応じ、古宝の一分は之を印度甲谷の博物館に収め、一分は英の竜動博物館に保管し、一分は本人に交付せられたり。而して仏骨その他の遺骨は、當時世界唯一の仏教王たる暹羅国王に贈与せり。国王亦之を私有するを惜み、隣國なる緬甸の仏教寺院へも遺骨の一分を与へ、その後我公使稻垣滿次郎氏の要請に應じ我国仏教寺院へも遺骨の一部を分与することとなり。今や奉迎使は既にその境に臨まんとせり。我国仏骨の有無曾て宗教の盛衰にも関せざるべしと雖、刻文の存否は世界の學術に關係する所大なるを以て、茲に之を紹介することとなせり。

釈尊御遺形奉迎件會議の顛末（明治33年6月26日 第七十一号）

▲第一 総論

大聖世尊入滅より既に三千年、遺教東漸の後漸く凋落の色を呈せんとするの時、暹羅皇帝より聖骨を贈り給ふの盛事に遭ふ。吾人は恭く奉迎し以て聖徳に報ひ奉らんことを期す。今此の好因縁に会す。吾人非徳無慚愧なる者も、聖徳に照らされて既往の罪障を懺悔し、将来に道念の進まんことを願ふ。故に吾人は此の盛事に際しては只管自己平常の不徳を責め、愈々進んで自行を凝ら

し、以て御遺形を迎へ奉らん事を欲せずんばならず。若し然らずして古代奇物の発見に接したるものとして、観世物、興行物を得たるが如く、虚飾外装以て人目を引かんことを努め、毫も自己に於て信奉するの実を有せず。軽躁の挙動、浮薄の所作のみに流れ、乱舞狂踏の痴態を演ずるが如き事あらん乎。恐くは世尊の真意を害し世間の嘲笑を招き、而して自己に何の益する所なくして終らん。否な却て之に依て世尊の遺徳を傷け、正法をして地に墜さしむることゝなる。豈に深く恐懼すべきことにあらずや涅槃經に曰く（縮刷、盈九、四十一、）

若し如来の舍利を見れば即ち是れ仏を見る。仏を見れば即ち是れ法を見る。法を見れば即ち是れ僧を見る。僧を見れば即ち是れ涅槃を見る。阿難當に知るべし、是の因縁を以て三宝常住して、交易あることなく、能く衆生のために帰依処となる。

又た曰く（同、四十三、）

汝等大衆に広く修行して三有を出つべし、復た懈怠散心放逸なる勿れ。

嗚呼仏舎利の渡来、既往幾回か之れありと雖も、吾人の薄福なる未だ一たびも其期に値ひ奉らず。而して今日幸ひにして此の聖運に会し之を奉迎することを得。冀くば経説をして真に世間に光明を発せしめ、三宝常住無有交易の金言の如くならんことを、然に世澆季に移り、三宝滅尽の悲難に沈まんとす。何ぞ浩歎に堪へん。

法滅尽經に曰く（縮刷、辰十、百十六、）

吾涅槃の後、法滅せんと欲する時、五逆濁世、魔道興盛、魔、沙門となり吾道を壊乱す

當来変經に曰く（同）

将来の世、當に比丘あり一法の法化に従はざるあるに因て法をして毀滅せしめ、長益を得ざらしむ。何を謂て其一と為す。

「禁戒を護らず、心を守る能はず、智恵を修せず、其意を放逸にす、唯だ善名を求め、道教に順はず、肯て度世の業を勤慕せず」是れを一事と為す法をして毀滅せしむ。

三宝常住無有交易と宣ふと雖も、遺弟にして若し遺弟たるの実を欠かん乎。令法毀滅の聖言は立ちとるに至らん。法化に従はざるときは、豈に何ぞ三宝常住して長益を蒙り奉ることを得ん乎。之を常住ならしむると、之を毀滅せしむるとは、一に遺弟たる僧

侶の心行如何に由るものと謂はずんばならず。夫れ然り、今日僧界の現状は此の二途、何れに在りとする乎。彼の某翁か近時の僧侶を評して、藍は藍より出で、藍よりも青をし、僧は俗より出で、俗よりも俗なりと云へるが如き現状は、掩はんと欲するも掩ふ能はず。社会の腐敗墮落を救ふべき身にして、却て己れ先んじて此の汚濁の渦中に投じ、相ひ率ゐて腐敗墮落を助長せんとするの観あり。其の本分を去ること遠ほし、俗界を度すべき身にして、却て俗界より此の如き酷評を受く、何を以て乎。三宝常住の責任を完うすることを得ん。何を以て乎。令法毀滅に陥らざることを得ん。思ふて此に至れば冷汗の背に流るゝを覚へざるなり。

然に今や幸にして、世尊か三宝常住と宣ひし、其の滅後の仏宝と

して、御遺形の御渡来に値遇し奉る。遺弟たる僧侶は此好期に際し、愈々道念を堅固にし、益々自行を精勵し、以て遺教の宣布に從ひ、世道人心に益せんことに務むべし。斯くの如くにして始めて御遺形を奉迎するものと名くべく、遺徳を顕揚するの一端と名くべく、世尊の御本懷に添ひ奉るものと名くべきなり。吾人は今回の好期に値遇したるを喜ぶと共に此の如くならんことを企望せり。故に若し此の企望の如くなる能はずして、之を看ること一塊の古奇物の如く、之を遇すること觀世物興行物の如く、虚飾外觀唯だ衆人の眼を奪ひ、一時の人氣を煽ぎ立るに止らん乎。千歳一時の好期は、一変して合法毀滅の厄運を表することゝならん。御遺形は三宝常住の靈宝と為らずして、一粒の枯骨と變ぜんのみ、是に於て乎。吾人は其の奉迎に關しては十分の誠慎をなし、以て奉迎の実効を奏せんことを熱望して已まざるなり。

是を以て、吾人は御遺形御渡来の報に接するや、歡喜踊躍、大に僧風釐正の実を挙げ、適當の塔廟を建設し、謹て奉安の誠を致し、以て永遠に供養し奉らんことを欲し、此の趣旨に戻らざらんことを願へり。

然に何ぞ凶らん世間の新聞、既に此事に關して種々の論評を試み、且つ好ましからざる否な甚だ厭ふべき事実あるが如く伝へり。今其の一を転載すれば左の如し

▲第二 新聞記者の予報

前項に云ふ新聞記事の一は左の如し

●○○寺僧侶の山仕事

(報知新聞本年三月二十八日)

(前略) 愈々暹羅国より仏骨を得て歸る事とならば、予め打電してこれを報じ、全国幾万の信徒を京都に集め盛なる奉迎式を挙行する手順にて、先年の奠都祭の如き大騒ぎをなし信徒の寄附金を募集せば、少くも百万円は立ろに集るべく。又独り○○派のみならず、苟くも仏教徒たるものは宗派の異同を問はず、進んで相応の喜捨をなすべしとの胸算用なれば、今参万円の往復費用を投ずるも差引何のことかあらむとの意気込なり。なほ此狂言にして甘く當れば、唯に財政の紊乱を濟ふに止らず、○○派○○寺の名海外に振ふこと故、さしづめ岩○○を○○の格に進め常に海外視察を為さしめ年参千円宛の手當を為すべしとの契約あり。岩本はこれぞ千歳の一遇と喜び勇んで此二三週間は夜も碌々眠らず。大○○、野○○の兩人を暹羅公使に面会せしむるなど画策怠りなくいよ／＼五千円を投じて書画、骨董、刀劍武器、友染縮緬等の土産物を調べて先発し、来四月十日頃○○○○は布教使大僧都○○○外二十余名を引連れて出発する由にて、回国に上陸するや『大日本帝国仏教○○○寺特使』と書したる大旗を押樹て、首都盤谷府に乘込むことなるが、先づ岩○○が礼を厚ふしたる贈物を持參して大袈裟に吹掛け置く処へ、此の仕組なれば暹羅国の當局者もマシマと彼等が計略どほりに一杯喰はざるべし。目下東京駐在暹羅公使館の通訳山○某は先年岩○と共に暹羅旅行をなせし男にて、巧に暹羅公使リー男爵に取入り○○○寺は日本仏教界に於ける覇權を握れる宗派なれば、帝室政府と雖も○○○寺を左右すること

は難き程の勢力あり。現に第十四議會に於ても、貴族院が元來政府のお味方議院のみなるにも拘はらず宗教法案を否決するに至りしは、即ち其一證なり。此の如き有力の宗派に仏骨を贈るは、暹羅国の名譽なりと説き付けしかば、ソー男爵は深く之れを信じ、同国政府の各大臣に紹介状を發するに至れり。男爵は同国の陸軍中尉にて貴族中最も勢力ある人なれば、無論仏骨は○○○寺の手に得られるべきが、山○某が○○○寺を過賞するに事を欠き、帝室の尊嚴をも傷けむとしたるは不埒千万の至りといふ可し。兎に角事のかく運びたるも○○○等が得意の贈賄手段の致す所にして、敢て怪むに足らざるが既に我が政府の當局者と彼の政府の當局者間は前記の如くなれば、稲満公使もまた如何とも為すこと能はざる可く計画通り実行せらるゝは、推して知るべきのみ。然るに此の事を漏れ聞きたる○○○寺は、○○○派に於て仏骨奉迎を名として各宗の間に勢力を張り併せて多額の寄附金を募集せしむるは、○派の為め頗る不利益のみならず、其勢力に關すること大なりとて、京都本山より○○○○○○の○氏に訓電を發し○○○○に繼り、反対の運動を始めたる。最早手後れとなりて○○○派に一着を輸せるなり。昨今○○○派の軍師○○○○等の運動者が日本橋の料理店菊隅を集会所となし、盛に運動し居る有様は宗教法案に、次での一小奇觀なり。偕て愈々特使○○○が彼地に渡り仏骨を受取りて帰朝の暁には、○○○寺より各宗管長に交渉して仏骨奉迎式を挙行し、併せて京都に地を卜して大伽藍を建立せんとのことなるが、各宗管長果して此の事に賛成するや否やは未定の問題な

り。既に一方に於て○○○寺の反対あれば、○○○寺の遣方にして非常に巧妙を極むるにあらざれば、○○○寺は独力を以て此事を断行せざる可らず。又九千六百有余の末寺が巨額の醜出金に堪るやは、今日より大に憂慮す可き事共なりと心ある○○○派の役僧は物語れり。此の事に関しては、在朝在野の元老をも手を廻はして説き、伊藤侯大隈伯板垣伯等の意見を叩るに、其帰する處は各宗一致して日暹兩國の關係を仏教を以て深厚にならしむべしとのことなるが、○○○寺が能く其大任を全うし得るや否や、暫く刮目して成行を見ん。

前項転載の報知新聞記事たる、無論無根の捏造説たるに相違なければ、吾人一たびは記者其明に乏くして事実を誤るの甚きを笑ひ、一たびは新聞記事の誤謬を伝るが為め、世を傷ふの弊を歎きたりき。而して此の記事が、去る三月の事にして未だ各宗派會議を開かざるの前に於て、早くも彼れ記者の筆に上るに至ては、其の記事の敏活なるに驚きたりき。然れども仮令其の報道せる事實が、事実にあらざる無根の記事なるにせよ、彼れ記者をして、僧界の墮落せる此の如くなるものとして想像せしむるに至ては、是れ誰れの罪なるや、僧界自身の現状彼れをして此の想像をなさしめたるものと謂はずんばあらず。吾人はに至て慚愧に堪へざるなり。

然りと雖も、此の誤謬の而かも無根の新聞記事が、幾分か事実らしく後に至りて各宗派會議の原案となりて出でたるに至ては、吾人は呆然として辞なきに至りたりき。

▲第三 四月の各宗派会議（其一十三日議）

積尊御遺形奉迎の件に關して、最初の各宗派會議は四月十三日洛西花園の妙心寺内竜泉庵にて開かれたり。

議長は例に依て前田誠節氏當撰し、先づ協議案として左の甲乙二案は出席委員に配布せられたり。

(甲) 積尊御遺形奉迎協議案

一 帝國仏教徒各宗派は奉迎の爲め、正使一員副使二員を選舉し暹羅國へ派遣せしむる事

但出發は、便船の都合により本月十八日とす

一 各宗派は暹羅王陛下、同国外務大臣、稻垣公使に宛書面を寄贈し兼て正副使に關する信任状を呈すべき事

一 各宗派は暹羅王室及其他に物品を贈呈する事

但物品の価格は合て金壹千円を程度とし、物品の選択は正副使の協定に一任すべし

一 各宗派は其宗派毎に奉迎委員一員を選定し、奉迎に關する事件を取扱はしむべき事

但選定委員の姓名住所は本日若くば明日中に通知せられたし

一 積尊御遺形奉安所及奉迎事務所を設置する事

但當分京都市下京区妙法院前町妙法院とす

一 奉迎使派遣其他事務所に關する費用は奉迎委員に於て之を議定すべき事

前項の費用は一時借入金をして之を支弁し、償却方法は別途

に之を定むべし

一 御遺形仏事式典は大略左記の如し。其法要の施行方法は奉迎委員に於て之を協定すべき事

一 上陸會 長崎に於て之を行ふ

一 奉迎會 京都に於て之を行ふ

一 仮安置會 京都に於て之を行ふ

一 拝迎會 沿道各所に於て之を行ふ

一 拝瞻會 仮安置の後期日を定め之を行ふ

一 奉迎委員は御遺形奉安に付、左記各項の事業計画を協定すべき事

一 塔廟建設の件

一 同上建設地協定の件

一 右費用に關する件

一 撰定せられたる宗派奉迎委員は、其委員會の決議を其宗派内に実行することを努め各責任を悉くすべき事

(乙) 奉迎事務所略則

第一条 奉迎事務所を京都市妙法院内に置く

第二条 奉迎事務所は御遺形奉迎に關する一切の事務を処理する所とす

第三条 奉迎事務所に左の役員を置く

一 総 理 一 員

一 常務委員 十 員

第四条 総理は常務委員の議決に依り、碩徳を推選し常務委員

は各宗派員中より互選するものとす

第五条 総理は常務委員を指揮し事務を監督す

第六条 常務委員会の議長は総理之に當り、其議決は多数決に依る。可否同数なるときは総理之を決裁するものとす

第七条 常務委員は互選を以て左の事務を分担す

一 庶務

一 司計

一 議事

第八条 事務所に書記其他雇員を置く

第九条 常務委員の議決に依り、各宗派の委員總會を開くことを得るものとす

第十条 奉迎事務所は帝国仏教会発会式の時に至り、之を閉鎖

し其の事務を該会に継続するものとす

本派より委員として出席したる神根善雄氏は、甲案に就き左の如く質問を發したり

問、本案第一項但書に由るときは、奉迎正副使に當選なりたる

御方は本月十八日を以て出發する事と規定あり、十八日とは本日より四日の後に當る。原案者は、此の短時日の間に、

能く其の正副使となりたる人々が準備を終り、出發し得ると

の御見込みありやと

答（原案者）実は○○派の新門主が御洋行遊ばざる趣にて、其の御出發期が十八日である、此の御遺形奉迎を其便宜に御頼み致したしとの考にて、此の原案をば作りたるものなり。故

に十八日出發にては奉迎正副使の出發準備に差聞るならんとの憂ひはなきなり云々

是れより神根氏其他より、猶ほ本案に対し質問ありたる末神根氏は左の如き動議を提出せり

本員は此の釈尊御遺形奉迎協議案は各宗及び○○派、并に我派に取りて不利益なる点尠ならず。依て更に委員をして調査せしめ、今夏開かるべき各宗派管長會議に改めて提出あらんことを望む。其の理由如何となれば、先づ第一、本案は三四日の後ち、出發せしめんとて設けたる案にして、此の三四日の間に正副奉迎使を定め、定りたる以上は當撰の承諾を求めざるべからず。承諾をせられたる人々は、二三日の間に出發の準備を終らざるべからず。内地の旅行と違ひ、旅行券の下附をも願はざるべからず。内地と雖も今日立てよ、明日發せよと、急遽の事は應ずる者なかるべきに、況や海外万里の異域に向て、重任を荷ふて出發することに於てをや、身分卑き者にても之に應ずる者は難かるべきに、況や碩徳高僧たる方々に於てをや、畢竟出來ざる注文を為すの原案と謂はざるべからず。加之原案第六項に於ては暹羅皇帝陛下、同国外務大臣に贈呈する物品は、価格壹千円を程度として之を撰採購求すること、なし。之を奉迎正副使に一任すとあり。是れ亦た六ヶ敷き注文なり。果して三四日の僅少日子間に於て、適當の贈呈物品を撰択し得るとするや。決して出來ざること、云はずんばならず。是等の事予じめ準備を終りありて、唯だ形式を経るまでに、今日の會議を開か

れたるものならば、何をか云はん。然らずんば不可行的の原案なり。其は兎も角も、果して本案が其俛実行せらるゝに至ては各宗、并に我派、及び〇〇派に取りて不利益を見んとす。各員も御承知なるべし。前月末頃東京の新聞に〇〇の山仕事と題し〇〇派及び吾派、又は各宗の仏骨奉迎に関する記事を掲げたることを此の記事に依るときは（前項参照すべし）、〇〇派は仏骨を自己の宗派に横領せんことを企て、種々の奸策を旋らし、遂に其の奸策図に當り、甘く各宗を籠絡し、本派を制して、自己に勝利を占めたるが如く見ゆる。而して其新聞の云ふ所に依れば、已に贈呈物品も〇〇派之れが購求を終りたるが如し。奉迎の人も〇〇派に於て已に之を定め、準備は悉く〇〇派に於て調へ終はられたるが如し。然れども此の新聞記事は素り無根の捏造説にして、本員毫も之を信ぜず。併しながら若しも此の原案が其俛今日可決して之を〇〇派に依頼することゝせん乎。是れより彼の無根の記事を報道せる新聞は、世間の為めに、却て事実を報道したるものと認めらるゝことゝならん。虚構の記事にてありながら、今日此の原案を其俛可決するに於ては、他日必ず該新聞の記事は事実なりしと伝へらるゝに至らん。果して然る乎。世間の新聞は〇〇派を以て遂に各宗を籠絡し終りたりと報道せん。各宗は卑屈にも〇〇派に服従したるものと見られん。吾派亦た敗れたりと見られん。此の如きは各宗の為めにも望まざる所なるべく、吾派の為めにも望まざる所なり。又た〇〇派の為めにも取らざる所なり。左れば〇〇派の新門主にして

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

果して奉迎使たらんとの思召あらば、本員共は雙手を掲げて賛成し御依頼するの真意なるも、其手續に於て尽さざる所あるときは、已むを得ず、直ちに同意する能はざるなり。是れ却て賛同して御迷惑を被らしめ奉るものなればなり。本員は飽まで、〇〇派に於て彼の新聞に伝るが如き、奸黠なる手段を旋らしつゝあることを信ぜず。彼の記事が誤謬を伝へて、〇〇派を傷ることを深く気の毒に思ふ。故に本員等は、彼の記事の果して無根たりしことを證するの方針を以て本件を議せんことを望む。是れ此の原案を以て〇〇派に取りて不利益なるものとなし、新聞の誤謬を眞実の報たらしむるものとする所以にして、更に委員に托して調査せしめ、他日の管長會議に提出を望む所になり云々。

是に於て、「他日の管長會議を待つときは、渡航の季候に差間へを生ぜん。原案の俛とすべし」などの議論も起りしが、結局神根氏より提出せし動議は理由ありと認められ、「管長會議を待つと云ふ点」を除き、原案を委員に附托し、来十八日までに調査を終り、十八日を以て更に會議を開くことに決したり。

（調査委員は神根、土屋、瑞岳、の三氏當選）

▲第四 調査委員会（四月十 妙心寺）

調査委員会に於ては、附托せられたる積尊御遺形奉迎協議案、并に奉迎事務所略則の二案を調査したり他に特別協議案（修正調査の条項は之を略す）をも調査したり

神根氏の發議に依り奉迎事務所略則案第十条（奉迎事務所は帝國

仏教会発会式の時に至り之を閉鎖し、其事務を該会に継続するものとす）とある一ヶ条を削除することに決す。是は未だ生れてあらざる。而かも各宗の協議に上り居らざる事柄にして、之を設立するの可否さへ定り居らざるものなれば、之を既定のもの、如く、発会式の時に云々と規定するは順序を飛超へたるものなればなり。

瑞岳惟陶氏の説に依り、此の第十条を削除したる上は、別に一の特別協議案を起さざるべからずとなし。之れに決したり即ち左案の如し

特別協議案

一 一積尊の御遺形を奉迎し及び之を奉安し、日本仏教者に於て永遠護持し奉らんが為め、帝国仏教会を設立し僧俗を問はず會員を募集すべき事

但帝国仏教会組織方法等は、之を各宗派管長会議に提出し議決を求むべし

（其他調査委員会の経過を記載することは之を省く）

▲四月第二の各宗会議

（十八日十九日 妙心寺）

調査委員にて修正したる一積尊御遺形奉迎協議案、奉迎事務所略則案、特別協議案仏教会設立の件、特別協議案御慶事献立の件の四案を議したり。

第一奉迎協議案に於て、曹洞宗の弘津説三氏より奉迎使に正副の段階を附するは不可なり。各宗各々独立せるものなれば、孰れか正たり孰れか副たるの差あらん。宜く正副の段階を除き単に奉迎

使とすべしと主張し、其説に決したり。其他修正の条項あるものを略す

次に奉迎事務所略則案を議し、次に特別協議案仏教会設立の件を議したる処、神根氏より左の廢案説を唱へたり

此の特別協議案を今日議定するは早きに失す。寧ろ議定の功力を見ざるなり。何となれば此の如き重大なる団体を組織せんには組織方法案を見るにあらずんば、可否を知るべからず、随て之を議することを得ず。本案の如きは組織方法は後に議すること、なし。今は唯だ仏教会を設立すると云ふことのみを議定し置かんとす。是れ其の物柄の可否善悪の分からぬ前に、事を定め置かんとするものにて、定めんとするも定る能はざるものなり。故に本案は暫時廢案となし置き、他日の管長会議まで其規則草案を作り同会議に於て議すべきものなり。今は議すべからず。

弘津説三氏も同一の意見にて之を論じ、「其の規則書案の如きは管長会議に先たち各宗派寺務所に回移ありて研究の時日を与へられたし」と陳べしが、神根弘津二氏の意見は少数にて否決し、原案の如く決したり。

他の特別協議案も審議の上、議決したり。

▲第六 四月各宗会の決議

前項の會議に依り、決議となりたる各案を列举すれば左の如し

(一) 一積尊御遺形奉迎協議案

第一項 帝国仏教各宗派は奉迎使七員を選挙し暹羅国へ派遣せ

しむる事、但し宗派は真言、臨濟、曹洞、浄土、日蓮、本願寺派、大谷派の七宗派より各一員を選出し、出発日時は奉迎使協議の上之を定む○第二項 奉迎使は正使一員を置くことを得○第三項 各宗派は暹羅王陛下同国外務大臣、稲垣公使に宛管長連署の書面を寄贈し兼て奉迎使に関する信任状を呈すべき事○第四項 各宗派は暹羅王室及其他に物品を贈呈する事、但物品の価格は合て金壹千円を程度とし物品の撰択は奉迎使の協定に一任すべし○第五項 各宗派は其宗派毎に奉迎委員一員を撰定し奉迎に関する事件を取扱はしむべき事、但選定委員の姓名住所等は本日より五日以内に通知せられたし○第六項 積尊御遺形仮奉安所及奉迎事務所を設置する事、但京都市下京区妙法院前町妙法院とす○第七項 奉迎事務所に関する費用は奉迎委員に於て之を議定すべき事、前項の費用は一時借入金をして之を支弁し償却方法は別途に之を定むべし○第八項 奉迎使派遣の費用予算を定むること左の如し

一金壹万円

奉迎使派遣費

内 金千円

奉呈物品購入費

金七千円

奉迎使往復費

金貳千円

奉迎使予備費

以上費目は奉迎使に推薦せられたる宗派にて之を協議し一時立替へし

第九項 御遺形仏事式典は大略左記の如し。其法要の施行方法

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

は奉迎委員に於て之を協定すべき事

一 上陸会 長崎に於て之を行ふ

一 奉迎会 京都に於て之を行ふ

一 仮安置会 同 上

一 拝迎会 沿道各所に於て之を行ふ

一 拝瞻会 仮安置の後期日を定め之を行ふ

第十項 奉迎委員は御遺形奉安に付、左記各項の事業計画を為し宗派会議に提出し決定すべき事

一 塔廟建設の件

一 同上建設地撰定の件

一 右費用に関する件

第十一項 奉迎使に推薦したる各宗派に対しては、當会より代表者を以て之れか請願を為すべき事

(二) 奉迎事務所略則

第一条 奉迎事務所を京都市妙法院内に置く

第二条 奉迎事務所は御遺形奉迎に関する一切の事務を処理する所とす

第三条 奉迎事務所に左の役員を置く

一 総 理 一員

一 常務委員 十員

第四条 総理は常務委員の議決に依り碩徳を推選し、常務委員は各宗派委員中より互選するものとす

第五条 総理は常務委員を指揮し事務を監督す

第六条 常務委員の会議長は総理之に當り、其議決は多数決に依る。可否同数なるときは総理之を決裁するものとする

第七条 常務委員は互選を以て左の事務を分担す

一 庶務

一 司計

一 議事

第八条 事務所に書記其他雇員を置く

第九条 常務委員の議決に依り、各宗派の委員總會を開くことを得るものとする

(三) 特別協議案

一 皇太子殿下御慶事に付、各宗派奉祝献品を為し管長連署総代を以て祝詞を呈し、之れが献納を為す事、但し議長指名を以て各宗派より委員五名を選定し、献納物品の選択及び之れに關する諸般の事項を委托する事

(四) 特別協議案

一 釈尊御遺形を奉迎し及び之を奉安し、日本仏教者に於て永遠護持し奉らんが為め帝国仏教会を設立し、同会組織方法等は之を各宗派管長会に提出し議決を求むべし

▲第七 奉迎事務所

(管長会議原案起草)

前項の決議に依り奉迎事務所は開かれたり、総理一名、常務委員十名、は奉迎事務を執ること、はなりぬ、

総理は妙法院門跡村田寂順僧正、常務委員は蘭光輶(天台)

小林栄運(真言) 後藤闡提(臨濟) 有沢香庵(曹洞) 青井俊

法(西山派) 名和澗海(本派) 土屋觀山(大派) 三原俊榮

(興正派) 田村豊亮(日蓮) 河野良心(時宗) の諸氏なり

常務委員諸氏は規則に照らして奉迎の事務を執らるゝ中に、彼の今回の宗派會議に於ける仏教会設立の規則草案をも起草したり。

此の起草を常務委員にて為すに當り、左の如き原案を編製せんとて某々派の委員諸氏は之を提出したり

仏教会々則草案

一金壹千円を全国より募集する事

一本会は仏教を以て国家の大本を維持し国民の性格を等一ならしむるを目的とす

一御遺形を奉安するが為め十町四方の地所を購求し、中央に十

三層の塔廟を建設する事、而して四隅に学校、病院、圖書

館、感化院を建設する事

一會員は男子五拾錢、女子貳拾五錢、入会の節出金せしめ且つ

毎年五錢宛掛金をなさしむる事

一塔廟は七ヶ年を期し壯大堅牢を主として百五拾万円を以て建

築する事

一會員募集の為め出張する者には一日金五円の日當を給し、入

会の人員に於ては金百分の五の手数料を給する事

(右は趣意摘要)

此の草案を一見して、本派の名和澗海氏は一驚を喫し、其の無責任の狂態を露出せるものとして、深く痛歎したり。而して其の綜

理たる村田門跡に於ても、此の草案の余まり壮大に失し世間嘲笑の種となるを歎き、再考あらんことを望まれたり。而して其の起草会議に際し、名和氏より「如何なる方法に依り壹千万円の金を得る見込みなりや」と質問を始め種々衝突の点を指摘したる末、提出者も出放題を差控へ、遂に壹千万円と云ふ金額を隠し、先づ第一期に於て百五十万円を募ることゝなし、左記の如き原案を作り（各宗派管長会議の項に記載す）、各宗派管長会議に提出することゝはなりたり

吾人は此の如き狂気じみたる草案を見て、各宗派が往々自己の堂宇の修繕さへ手の廻り兼ねて、門柱朽ち屋宇漏るも如何とも為す能はざるものあるの中に在て、一躍して壹千万円の金を得んとは、自家撞着の振舞として世間の為めに笑草とならんことを恐る、左なきだに既に東京其他の新聞に於ては、御靈骨を種として山仕事を為さんとする事を予報し居るの今日にして、此の如き、草案の現はるゝとは世の濁悪に移りたるの致す所とは云へ、余まれも残念の事ならずや、吾人は教界の為め又た社会の為めに長大息に堪へざるなり、

特に此の草案中に「會員募集として地方に出張する者には一日金五円の日當、会金百分の五の手数料を給す」とあるは何事ぞ。僧侶として一日金五円の日當を給するも、過分なるに其上募金の割前を給せんとは、実に世間より御遺形奉迎の美名の下に、金取主義を実行するものと非難せらるゝも吾人は之を弁疏するの辞を知らざるなり

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

▲第八 各宗派管長会議（其一）

前項奉迎事務所に於ける常務委員が起草したる帝国仏教会々則案（一）同上施行細則案（二）参考案（三）は之を各宗派管長会議に提出し、其議決を求むべき筈にて、同綜理村田寂順門跡は左の通知召集状を各宗派に発せられたり

本年四月二十日各宗派会議の決議に依り、来る六月五日より三日間京都花園妙心寺内竜泉庵に於て各宗派管長会議開会致候間、該日午前九時迄に御出席相成度、此段御通牒候也

积尊御遺形奉迎事務所

明治三十三年五月三十日 総理 村 田 寂 順

此の召集に応じ出席したる宗派は、天台（寺門派を除く）真言、西山派浄土宗、臨濟建長寺派、臨濟覺寺を除く、黄檗、真宗越前二派を除く、日蓮法華宗、本門宗、本妙法華宗、顕本法華宗、本門法華宗、不受不施、融通念仏宗、華嚴、律宗にして、議長には橋本峨山氏、副議長には土宜法竜氏當撰し、本派よりは管長代理として近松尊定氏、委員として菅田実言神根善雄二氏出席したり、第一日五月は議長選挙及び第一号案質議にて終はれり。而して其議案は左の如し

第一号議案

○帝国仏教会々則

第一条 本会は帝国仏教会と称し本部を京都市に置き支部を各地方に設く

第二条 本会は仏教を以て国民固有の道徳を涵養するを目的とす

第三条 本会は本会の目的を達せんが為め順次左の事業を起す

一 大雄殿の諸建築

二 教育事業

三 慈善事業

第四条 前条各項の起業方法は別に之を定む

第五条 本会は左の会員を以て組織す

一 顧問員

一名譽会員

一 特別会員

一 正会員

一 随喜会員

第六条 顧問員とは本会役員会の推選に依り承諾を得たる者、

名譽会員は金百円以上を喜捨せし者、特別会員は本会へ金拾

円已上を喜捨せし者、正会員は金壹円已上を喜捨せし者、随

喜員とは応分の金品を喜捨せし者を云ふ

但相當の資格ある者に限り、特に総裁より名譽会員及特別

会員に推選することあるべし

第七条 前条会員の徽章及会員證は別に之を定め、本部より之

を交附す

第八条 本会は会務処理の爲め左の役員を置く

支部に関する規則は別に之を定む

一 総裁 一人

一 理事 十人

一 司計 二人

一 書記 若干人

第九条 総裁は各宗派選出の委員、総会に於て推選し、理事は

各宗派選出の委員中より之を互撰す

第十条 前条役員 of 服務規則は別に之を定む

第十一条 本会々議は各宗派選出の委員を以て之を組織す

第十二条 會議は定期臨時の二種に分ち、定期会は毎年一回之

を開き、臨時会は緊急必要がある場合に之を開會す

第十三条 本会の會計は司計之を担任す

第十四条 金銭の出納は特約銀行を経て之を取扱ふ者とす

第十五条 本会經費の予算は委員總會に於て之を議定し、結算

は毎年一回之を報告す

附 則

第十六条 本会々員中特別の功勞あるものは、各宗派に通して

相當の待遇を爲すべきものとす、待遇法は別に之を定む

第二号議案

帝国仏教会施行細則

第一条 本会々員募集の爲め勧誘委員若干人を各宗派より選出

する者とす

選出委員の数は集議所規則第四条による

第二条 勧誘委員には本会総裁より囑托状を交附し、其の姓名

を各派に報告すべし

第三条 勧誘委員は本会事務所に会同し、一定の方針を定め派

出すべき者とす

第四条 各宗派は該の門末一般へ対し、勧誘委員に便宜を与ふべき旨訓示すべき者とす

第五条 勧誘委員派出期限は一方面約一ケ年とす、一組二人以上を以て左の方面を担任せしむ

一 鹿兒島県 一 宮崎県 一 熊本県 一 長崎県
 一 佐賀県 一 福岡県 一 大分県 一 山口県
 一 広島県 一 岡山県 一 兵庫縣 一 鳥取県
 一 島根県 一 大阪府 一 和歌山縣 一 香川県
 一 愛媛県 一 高知県 一 徳島県 一 京都府
 一 奈良県 一 滋賀県 一 岐阜県 一 長野県
 一 山梨県 一 茨城県 一 福島県 一 宮城県
 一 栃木県 一 秋田県 一 三重県 一 静岡県
 一 東京都 一 富山県 一 福井県 一 石川県
 一 神奈川県 一 埼玉県 一 新潟県 一 山形県
 一 青森県 一 千葉県

第六条 会員第一期の入会者は總計百五十一万二千人を募集す

第七条 勧誘員は其の担任地に於て領取なしたる金員百円に達する毎に、会員の姓名簿及金額を明記し本会へ郵送すべし

第八条 帝国仏教会の発会式は明治三十四年四月之を行ふ

但日時は別に之を定む

第九条 本会々計整理の爲め会計顧問を置くことあるべし

第十条 本会の創業費中へ金貳千円借入すべし

○参考案

設計要旨

第一期 事業

大雄宝殿建築工事

一 入会者凡百万人に達するを待ち、大雄殿並に附属物の建築に着手すること

二 建築物は壮大堅牢にして永遠に保存し得べき範囲内に於て之を計画すること

三 該工事の落成期は凡七ケ年間とす

第二期 事業

教育事業

第一期事業結了を告たるときは、更に会員中より喜捨金を募集し、凡見積立たる時を待ち起業に着手すべし

第二期事業結了を告たるときは、更に会員の喜捨金を募集し、凡見込の立たる時を待ち起業に着手すべし

第三期 事業

慈善事業

第二期事業結了を告たるときは、更に会員の喜捨金を募集し、凡見込の立たる時を待ち起業に着手すべし

第一日^{五月六日}に於て議案配附あり、第一号案第一読会となるや、日蓮宗の田村豊亮氏よりは「本案は会員には唯だ金を出させるのみ、仕事は我々僧侶にて之を爲す、金を出させるを以て会員となし、仕事は彼等に爲さしめず、と云ふが如き規定の如し、甚だ了解に苦しむ」と質問し、神根氏よりは「村田総理の召集状に依れば、四月二十日各宗派会の決議に依り開会すとあり。而して四月

二十日の決議なるものを見るに曰く（「積尊御遺形を奉迎し及び之を奉安し日本仏教者に於て永遠護持し奉らんが為め帝国仏教会を組織云々」とあり。然らば帝国仏教会なるものは御遺形を奉迎し、且つ奉安する為めに設くべき会にあらずや。果して然るときは仏教会の目的をば、之に適ふ如く規定し、事業の規定の如きも同く之に適はしめざるべからず。然に其の目的に於けるや、国民の道徳を涵養すと云ひ、其の事業に於けるや、建築の外に教育慈善等諸種の事業を掲げり。原案者は斯の如き規定なるも四月二十日の決議に達せずとの見込なりや、御説明を聞きたし」と質問し、原案者頗る説明に苦みたるの状ありき。而して此日は弘津氏の請求もあり。神根氏より第二の質問をなしつゝある際、議長より散会を宣告す

▲第九 各宗派管長会議（其二）六月六日

社会今日の腐敗は百鬼暗夜に横行するに異ならず、此の腐敗の社会を救済すべき任ある僧侶亦た其任を忘れ、却て社会の腐敗の爲めに吸引せられ、好んで其の渦中に投じ、相共に腐敗を製造しつゝあるとは、墮落も其極に達したるものと謂ふべし。若し苟も社会救済の上に向て光明を与ることを期せんとならば、何ぞ必ずしも広大天を摩するの殿堂に限らんや。何ぞ必ずしも燦爛眼を眩せしむるの美観に限らんや。世間争ふて物質的外觀を競ふ。而して僧界亦た形式的虚飾に傾く、今の僧界は恰も薪を抱て火を救はんとする者に似たり。救はんとする者先づ焼かれん、今回積尊の御遺形を奉迎するに於けるや、僧界真に世を度し人を濟はんとす

るの真心あらば、衆に先んじて奉迎の誠意を表し、以て腐敗濁亂の社会に於ける一線の光明たらんことを期せざるべからず。特に千載の一時として靈骨を迎へ奉るに於ては、飽まで世尊の恩徳を奉戴し、之に報ひ奉ずんばあらず。故に今回の盛事に真意を致たさんには、僧侶先づ殿堂の建築を荷ひ、他に先んじて之を果たすべし。此の如くするに於て、何の会か組織の要あらん。一寺院壹円若くは貳円を投ずるときは全国七万の寺院にして立どころに十五万の建築費を得ん。此の如くにして、殿堂を建築し、自ら奉安の責務を終らんか。事々しく、御遺徳を顕揚すと公言せずとも、自然に顕揚の実を仰がん、故らに国民の道徳を涵養すと絶叫せずとも自然に涵養の功を奏せん。然に事茲に出でずして、自ら奉ずること薄くして、他をして厚く奉ぜしめんと欲し、己れに修むる所なくして、人をして修めしめんと欲す。顛倒も亦た甚しからずや、本派に在ては予ねて門末一般に服膺しつゝある如く、自信教化の順序を守り自行を全うして化他に及ぶの趣旨なれば、今回の事に対しても此の趣旨を実行せんことを欲し、之を事実の上に見んことを務めらるゝものなれば、前項に掲げし原案の規定には同意せられざる事無論なりき。然れども御遺形奉迎の盛事に際して、各宗と意見協はず、相分るゝことは如何にも残念のことなれば、勉めて合同せんと欲し、能ふ限りは讓歩して、相共に奉迎の重任に當らんとはせられたるものなり。左れば今回の管長會議に於ける歩一步彼等の云ふ所に譲り、交渉合議に従はれたるものとす。左に交渉会の経過を報ぜん

(交渉会)

第二日六月は前日質問等にて、議論纏り難く見へたるを以て、朝来交渉会を開くこととなし、出席議員中より十四名を撰びて、之に當らしめ、以て本案通過に利便を図りたりき、其の交渉委員は左の如し

中村 勝契 岩崎 元随 靈群 諦全
織田 雪巖 瑞岳 惟陶 稲葉 元厚
松原 深諦 神根 善雄 田村 豊亮
河野 良心 黒田 覚州 雲井 春海
児門 賢象 古泉 惟信

交渉会にては議論多岐に涉りたるも、結局甲乙二派に分れたるもの、如し。而して甲は本派、曹洞、日蓮、及び真言にして、乙は其他の委員にてありしと云ふ。今甲乙の論ぜし所を聞くに

(甲) 仏教会など云へる会を起すの必要を見ず。奉安殿堂の建築は建築事務所を起して之を為さしむれば足れり。何ぞ会を設くるの要あらん、故に此の趣旨を以て原案を改むべし

(甲) 仏教会と云へる大なる団体を組織し、国民固有の道徳を涵養す杯と絶叫し、種々なる事業を為すものを作ると云ふは、人をして政治的意味あるかの如く誤解せしめんも計り難し。中途にして進退に苦むことを生ぜん故に第二条第三条の如き規定は不可なり

(甲) 原案の如くせば金をば会員に出させて、仕事をば僧侶がすると云ふ。余り我れ〜に勝手に善過ぎる規定なり。会員

は唯だ金を出たして畏るのみと規定し、何事にも容喙の出来ざることとするは不可なり

(甲) 今回の如き盛事に際しては他人より金を募るよりも僧侶自身に之を荷ひ、以て相當の殿堂を建ることすべし。世間色々の批難を試むるものさへあり。僧侶にして国民の道徳を養成せんと欲せば、僧侶自身にして先づ道徳の標準と為らんことを要す

(乙) 建築事務所の説は一応最も如くなるも、寺を建るから金を呉れと云ふが如き、従来の堂宇建立を遣るが如き仕掛けにては、金は集るものにあらず。集りた所が、何程の額にも上らざるべし。故に勧進帳を提げて廻るか如きことは同意する能はず

(乙) 仏教会としては人に疑はるゝ、故障が入るかも知れぬとの説あるも、故障が入りても差支へなし。打てば必ず激するものなれば、却て事を挙ぐるの助けとなるべし。故障の入ることは決して意に介するに足らず。故に原案の如くすべし

此の如く甲乙反復、論ぜしも議纏らず、猶ほ熟議せし末互に歩を譲らんことの說出づ

(甲) は会を起すことに歩を譲り (乙) は仏教会の組織を後にすることに歩を譲り (甲) は奉安会と名け奉安のこと當らしむべしと云ひ (乙) は第三条の規定は如何に変わるも第二条の目的を變ずるなくんば可なりと云ふ、

是に於て甲乙との交渉粗ほ纏り、御遺形奉安会として殿堂建築に

従はしめんことを申合ひ、議長に対し之を報告し終りたり。然るに或る派の委員より不同意を申立て一旦決したるも更に再び交渉を始め、其の結果左の如く決定せり

会名は仏教会とせず、大雄会等適切の名を用ひ其の第二条目的を「大雄殿を建設し国民の道徳を涵養す」と云ふの趣意となし、第三条は之を取除くべき事

(本議 会)

此の如く決定して後ち、本議会は開かれたり。本議会に於ては議案全体を七名の委員に附托調査せしむることとなり。中村勝契、小林栄運、弘津説三、瑞岳惟陶、神根善雄、土屋観山、田村豊亮の七氏委員となり。原案者と共に翌日之を調査することとなり。此日は散会せり

▲第十 特別委員会、修正案 (六月七日)

前項の決議に依りて、翌七日開かれたる特別委員会は日没に至て終り、左の如く決したり。即ち委員の修正案にして、翌八日原案に供せられたるものとす

○第一号議案

日本大菩提会々則

第一条 本会は日本大菩提会と称し、本部を京都市に置き支部を各地方に設く

第二条 本会は積尊の遺形を奉安し、其聖徳を掲揚し国民の道義を涵養するを目的とす

第三条 本会の目的を達せんがため順次左の事業を起す

起業方法は別に之を定む

第一期 覚王殿建築

第二期 教育及慈善

第四条 本会の会員を分て左の四種とす。会員待遇方法は別に之を定む

一 名誉会員 (本会職員会の推挙による者
又は金百円已上を喜捨したる者)

一 特別会員 (本会職員会の推挙による者
又は金拾円已上を喜捨したる者)

一 正会員 金壹円已上を喜捨したる者

一 随喜会員 応分の金品を喜捨したる者

第五条 会員の徽章及證票は本部より之を交附す

第六条 本会は各宗派管長を推戴して名誉会監とす

第七条 本会は会務処理の爲め左の職員を置く。職員の仕事規

則は別に之を定む

一 理事長 一人

一 理事 十人

第八条 理事は本会々議に於て委員中より之を互撰し、理事長は理事の互撰を以て之を定む

第九条 本会に監事三名を置く其撰出法は前条に準じ

第十条 本会々議は各宗派撰出の委員を以て之を組織す

第十一条 会議は定期臨時の二種に分ち、定期会は毎年一回之を開き、臨時会は緊急必要がある場合に之を開く

第十二条 現金の出納は特約銀行をして之を取扱はしむ

第十三条 経費の予算は本会々議に於て議定し、決算は毎年定

期会に報告す

第十四条 支部に関する規則は別に之を定む

○第二号議案

日本大菩提会施行細則

第一条 本会々員募集の爲め勧誘委員若干人を各宗派より選出す。其員数は従來の慣例に依る

第二条 勧誘委員には本会より囑托状を交附し、其姓名を各宗派に報告す

第三条 勧誘委員は本会本部より一定の方針を示し派出せしむ

第四条 各宗派は勧誘委員に便宜を与ふる爲め門末一般に対し

訓示するものとす

第五条 勧誘委員派出期限は一方面約一ヶ年とし、一組二人以上を以て各府県を分担せしむ

第六条 勧誘委員は其担任地に於て領収したる金員百円に達する毎に、金員の姓名簿及金額を明記し本会へ郵送すべし

第七条 本会の発会式は明治三十四年四月之を行ふ

○第三号議案

起業順序

第一期事業

覚王殿建築工事

一 入会者凡百万人に達するを待ち、覚王殿並に附屬物の建築に着手すること

二 建築物は壮大堅牢にして永遠に保存し得べき範囲内に於て

之を計画すること

三 該工事の落成期は凡七ヶ年間とす

第二期事業

教育及慈善

第一期事業終了を告たるときは、更に会員中より喜捨金を募集し、凡見込み立たる時を待ち起業に着手するものとす

▲第十一 各宗派管長會議（其三）（六月）

前項委員に於て調査したる修正案を更に原案となし本會議に付することゝはなりぬ。初めに修正委員より修正の理由を開陳し終るや、先づ松原深諦氏は質問を提起して、左の如く陳へたり

此の修正案を見るに前日交渉会に於て、纏りたる議に反せり。

本案は唯だ仏教会の会名を大菩提会と改めたるに過ぎず。其他幾分の文字を換へたる所なきにあらざるも、其精神に至ては仏教会と毫も異なる所なきにあらざるや。前日夕陽まで取蒐りて交渉したる結果、修正委員に附托したるものなるに、斯く交渉会の議を棄てられたるは何故なるや。交渉会に在て、我々は建設事務所を設る事を陳べ、尋て奉安会とする事までに折合ひ、而して其会名をば大雄殿とするも差支なきまでに同意せるも、決して其精神を旧の如くにせんことに同意したるものにあらず。否な啻に本員のみならず、交渉会全般、みな一致して纏りたることならずや。而るを修正委員に於て之を変じ、旧の精神に復せられたるは云何云々

是に於て修正委員と同氏との間に数番の問答ありたるも要領を得

ざりき。而して議場の氣勢、今日に至ては前日の如くならず。本派其他一二派の外、敢て抗議する者なく、原案を可とするもの、如し。逐条審議に及ぶや、第一条第二条とも立どころに原案に決したり

既に第一第二の条項にして原案の如く決する以上は、第三条以下亦た原案を可決するや予知するに難たからず。果して然るときは本派の出席諸氏は、議席に在りて議事に与かるも其詮なしと思はれたるも、猶ほ忍んで着席し、本派の菅田実言氏は第三条に關し試に左の動議を提出せり

第三条 本会は左の事業を為す

一 覺王殿の建築及び維持

此の如く修正の動議を提出する所以は、第一四月二十日の宗派会の決議に遵ふに在り。第二前日交渉会の趣意に遵ふに在り。

四月二十日の決議に於て、既に御遺形を奉迎し及び奉安する為め、仏教会を設立すとある以上は決して他事に涉るべからず。

又た前日の交渉会に於て、第三条は削りて建設の事を第二条に加へ第三条は削除せんとまで纏りたること故、其意に従はざる、是非とも第三条をば右の如く改めざるべからず云々

是に於て甲論乙駁、数回論弁ありしが、議の纏り兼ねるの傾きあり。議長は暫時休憩を宣告し、再び開議したるが、到底本派の意見は容れられざるの形勢を顕はせり。依て神根氏は第三条を論ずるに托して、本案全体に關して同意し難き理由を列挙し、演説を為したり。議長は其の演説の中間に於て、「総体論は逐条を議す

るに當りて陳べらるゝの必要なし」と再度まで注意を加へ、神根氏は「本条は本会設立の根本を規定せるものなれば、勢ひ総体に涉りて論せざるべからず」と抗し、其の主義を演述し終りたり

(神根氏が本条より延るて本案全体に同意する能はずとして論じたるは、長き演説にして今一々茲に記するに遑あらず。且つ改めて此処に記載せずとも、本派が本件に就て取らるゝ所の意見は、前号の誌上并に上來屢々記載したる所と、次に記する所の管長御代理よりの御申入案とに照らして、之を觀るときは、最も明白なれば今一々記載せず)

此く動議を提出ありたるも、會議は遂に之を否決したり。此の時本派管長御代理近松氏には、「意見の納れられざる以上は、到底本案に同意を表する能はず。是れより退席す」と議長に告げ退席せらる

是れより議事は一瀉千里の勢を以て通過し、概ね原案に決したり
(上來仏教会設立案より大菩提会設立案に關する各宗派管長會議議事を記し終る)

▲第十二 大菩提会加入謝絶

前項の如く、本派の意見行はれざるに付、素り一致して大菩提会に加入し得らるべき筈なし。御遺形の奉迎奉安には同意なるも、大菩提会設立の件には賛成し能はず。依て已むを得ず、左の如く加入謝絶の義を申入れられたり

○

今般各宗派管長會議に於て大菩提会を組織し會員を募集し積

尊御遺形奉安の殿堂建設等の事業企画可相成段議決有之候処
本派に於ては殿堂建設の義者無論賛成に付右費用之内へ本派
より金貳万円寄附可致候乍去大菩提会組織之義者断然同意難
致候条此段申進候也

明治三十三年六月十日

真宗本願寺派管長代理 近松 尊定

奉迎事務所総理

村田 寂順 殿

▲第十三 加入謝絶の趣旨

前項加入謝絶の御申入書の趣意は、彼の大菩提会設立会議の一部
に賛成せられたるにあらず。其の全部に同意せざることを申入れ
られたるなり。再言すれば奉迎及び奉安殿堂の建築は賛成せら
るゝ所なれば、其の建築費に対し金貳万円を一派本末の諸寺院を
代表して本山より寄附せらるゝ事とす。此は殿堂の建設費に寄附
あるものにて、大菩提会に寄附せらるゝものにあらず。随て本山
には一派を代表して大菩提会加入を謝絶せられたるものなれば、
派内門末にありては大菩提会に加入すべからざるものと知るべし

▲第十四 結論

嗚呼吾人は仏教各宗派の協同一致を企望して已まざりしに、事実
は企望を全ふせしむる能はざることゝなりたり。何ぞ其れ遺憾な
る、思ふに協同の事業は十分の慎重を以て挙ぐるにあらざれば終
りを能くするものにあらず。言ふは易く行ふは難し、吾人は言ふ
べくして行ふべからざる事業には、仮令ひ美名の下に挙るものと

雖も、之に賛同一致すること能はず。本派本山に於て、今回各宗
派の決議に同意せられずして、大菩提会の事業に加盟を謝絶せら
れたる趣意蓋し此に在らん。吾人は他日の悔を見るよりは、今日
の憾を忍ぶを以て可とするものなり

送藤島胆岳之暹羅序〔明治33年6月26日 第七十一号〕

山名 袋水

趙宋文文山死于節、後人獲其遺履、藏之宝匣、蓋慕其德也、謂之
好事者狂態可乎、大恩教主盛德、百千万倍于文山、而遺形之靈、
与遺履之卑、不可同倫而語、积尊之遺形、而存于今、則誰有不
欲尊奉之者乎、今茲、暹羅国王、介我公使、欲頒聖骨於日本仏教
徒、各宗相議、撰奉迎使、我真宗本派、以胆岳藤島君、充之、君
将行、余謹諗之曰、君德望才学、鬱冠于一派、此行必不辱其任、
独憂我奉仏之士女、多蒙昧者、知崇其影、不知奉其実、知仰其
形、不知信其真、奉迎之後、騷然狂然、果無論笑於外教徒乎、士
女猶可恕也、縉流而醇者、溺虚礼而忘本旨狡者乘蒙昧、而射俗
利、是甚可恐也、君子能慮其後、而制其宜、為賜洵大、雖然、縉
林可憂之事、豈止之乎、上者恃小康、銜尊大、下者逐名利、而陷
醜俗、君視而慨之、盍図救済之道、余嘗、読宋史、至中葉已降、
有慄然者、君主憤偏安、而無遠大之志、概自用而惡蹇諤之言、人
臣亦概、利一身而不顧社稷、上下之間尚虚礼、流文弱、優柔成
風、国力日衰、遂終于厓山覆没、方今我縉林中、豈為無類此者
乎、嗚呼豈為無類此者乎、

●御遺形奉迎使暹羅到着〔明治33年6月26日 第七十一号〕

各宗派の選出に依り、釈尊御遺形奉迎使となり暹羅国に向はれたる大谷派新門跡、本派藤島了穩、妙心寺派前田誠節等諸氏は本月十五日同国盤谷府に到着し、既に御遺形の授受を終りたる趣にて、十九日頃同府を發し帰朝の途に就かれたる由

●仏世尊御遺形奉迎〔明治33年7月11日 第七十二号〕

仏世尊御遺形は奉迎使一行の供奉に依り、客月十九日を以て暹羅国盤谷府を出発あらせられたれば、新嘉坡、香港を経て、本月十一日頃長崎港に御着の筈なり。長崎よりは予て熊本、門司、広島、岡山を経て、陸路御入京の予定なりしも、目下清国事變にて、上下を挙げて憂慮しつゝあるの時なればとて、更に長崎より海路大阪に直航することに改め、大阪にては天王寺に御休泊あらせられ、夫れより京都御着の筈なり。本山よりは長崎へ奉迎として熊谷広濟氏を差向けられ、大阪へは管長御代理として普照院連枝を奉迎に差向けらるゝ由なり

●藤島氏の仏国行〔明治33年7月11日 第七十二号〕

仏世尊御遺形奉迎使として暹羅国に向ひたる本派の藤島了穩氏には、盤谷府に着したる時、仏国行を命ずるの本山電報に接し、直ちに他の奉迎使一行と分れ、舳を転じて西行の途に就かれたり。此は来る九月仏国巴里府に開く、万国宗教歴史大会に参列するが爲めにして、同会の招請に応ぜられたるに在り

●新嘉坡通信〔明治33年7月11日 第七十二号〕

在新嘉坡 佐々木 千重

昨年本場創立の當時本港主要の新聞ストリートタイムスは「新嘉坡を改宗せんとす」の標題を掲げて、本場計画事業の一斑を世に紹介するや、附近の各地就中ピーナン、スマトラ、セレベス、ジヤバの都邑に散在せる同胞よりは、何れも出張布教を請ひ来り、亦外人よりも書を以て日本仏教の真相如何なる問題を齎らし来りし中、殊に當半島コーランポー市、英政庁属官ゼーアールナイズ氏の如きは、熱心に日本仏教々理を質問し来り、小生と数百哩の居処を隔てゝ、未だ一面識なきに通信以て我教徒の一人たることを誓ひ、爾来氏は日本漫遊の心勃勃として抑ゆる能はず。遂に今年五月下旬、意を決し同地より本港に出で、歐洲帰航船常陸丸に搭じ、既に我故国に向へり、定めし目下周遊中ならん。氏は志操高潔理想最も高く宗教心に富むを以て、今回旅行の目的も、重にも日本仏教の状態并共学制の概要を視察せんとするにあるが如し。次に小生目下の執務事業の一二に付き聊か申上候、本港は東西両洋の一大連結点たる上に、南北亦壕洲瓜哇或は暹羅緬甸等の諸国に通ずる焼点に當れるを以て、学者紳士商人政治家等、諸種の人物悉く此地に集散し、目下開会中なる巴里大博覧会而已にても本邦よりの渡航者実に其数夥たしく、一々是等の人々に応接するに、仲々下手な御茶屋的程の仕事充分手に余り候。教誨は毎月二回十五、二十八の両日を期し、在任同胞に対し、説教を為し、随意参拝の外人には施本を為し、或は法話を致し、或時は葬儀或

時は応招誦經、及説教等の業務にも日々追はれ居候。殊に昼間は九時より四時に至る迄で、附属学校三十有余の生徒中、女子部に對しては、単に読書習字算術の三科を施し、児童男子部に對しては、内地の尋常高等小学の程度に、加ふるに英語の一科を厳にし、夜間は白人或は印度諸種の外人に對し日本語の研究會と、同胞有志青年に對する英語學研究會とを設けつゝあり。亦他に近來一団の青年天台學の講義會を余に開かれたしと迫りつゝ、既に其準備ありとかや。猶是等の外昨年琉球漂泊民來着の如き総て無錢者貧困者流の流浪物或は官用通弁等の如き、常に帝國領事館と本場とを煩はす次第に御座候。斯く小生は日夜寸時の間隙なく、

一人にて一時に先生、和尚さん、茶屋、お翁さん、又通弁やさん、の諸役を引受け、其繁務劇職大に困り果て候。乍去小生も尚此上教育伝道の二事業に關しては、充分擴張の方針を取り茲に駐在布教使の一兩名をも尚増加する場合には、通信伝道の上に更に地方信徒の希望を充たさん為め、附近の諸島に巡回布教の一事をも挙げん計画に御座候。実にく、世界の大西洋は扱て置き、太平洋の洋面にのみとするも我徒の教線を張り尽すには前途尚遠く艱難更に大ならん歟。

日本仏教各宗派代理仏骨奉迎使大谷派本願寺新門跡本派藤島了穩、曹洞宗日置黙仙、妙心寺派前田誠節、諸氏は六月六日午前九時博多丸にて本港到着、直に一行十八員ラツプルスホテルに投館せらる。當時小生は帝國中山領事と同時に諸氏を船上に奉迎せしが、本邦発航以來航海極めて静穩なりし為め、一行の諸氏各健全

にてましませしは、偏に至幸にてありける。此の日は小生前日の當港新聞に、右仏骨奉迎使來着の記事投書し置きし為め、外国のカゾリツク宗僧三五袖を連ねて、日本僧上陸の体を傍觀せんとて、早くより棧橋に頭はれ居りしが、何れも前きのセーロン奉迎使に比し、服装の異にして、其全体が寧ろ貴族的旅行なるに驚けるが如し。かくて右一行同ホテルに二泊、午前八時独乙船シंगाポール号に投じて、暹羅國の皇太子殿下（歐洲御留學より御帰朝の途次）と同船の好機會を得て、盤谷府に向け本港を解纜せり。

（以下省略）

（本山録事）

告示第十七号

門末一般

釈尊御遺形本月十九日京都御着輿被為遊候旨通知アリ

明治三十三年七月十四日 執行長 梅 上 沢 融

● 釈尊御遺形の御着〔明治33年7月29日 第七十三号〕

予ねて各宗派が奉迎使を派して御迎ひ申上げ奉れる釈尊御遺形は、本月十一日長崎港御着、同地曹洞宗皓台寺に上陸法會あり。十五日長崎御出發、十六日神戸御着、十七日大阪御着、天王寺に於て拝迎法會あり。十九日大阪御出發、同午前八時五十分、京都御着、東本願寺にて御休憩、午後烏丸通を北へ、五条通を東へ、伏見街道を南へ、七条通を東へ、妙法院飯奉安殿に御着遊ばされ

たり。各宗派管長又は代理より執事以下一般末寺僧侶まで夥しく奉迎して、最も盛んなりき。本派本山よりは長崎へは熊谷広濟氏を、神戸へは水原慈音氏外一名を奉迎の爲め差向けられ、大阪へは御代理として普照院連枝御出張相成り、外に本山役員の向も五六名出張せられたり。又た七条御着の節は、御代理普照院連枝を始め山内役員御出迎ひ申上げられ、東本願寺より妙法院に至るの行列には、御代理を始め山内役員市内及び府下近郡の僧侶並に上京の僧侶及び信徒等は列に加りて供奉せられたり

●積尊御遺形奉迎記要〔明治33年7月29日 第七十三号〕

新嘉坡に於て 藤 島 了 穂 報

此の通信は藤島氏より直ちに発すべきの所、起草の後ち同行の前田誠節氏に原稿を貸し、前田氏錯て之を藤島氏に復へすことを為さず。転じて奉迎事務所総理村田門跡に郵送したる爲め、迂回して之を接手せり。依て本紙に掲載を後るゝことゝはなりぬ

記 者 識

●第一 奉迎使盤谷府着

六月十二日午前十時奉迎使一行は、暹羅文部省より出迎の小蒸汽船に搭して、盤谷府に上陸せり。在暹日本公使館書記官書記生及公使館附警部等数名、奉迎使の便乗せる新嘉坡号迄、出迎ひせられたり。一行は波止場より馬車にて、先「パレスホテル」に着し、昼飯を喫し、正使大谷光演隨行長南条文雄二師、及家従下間

氏三名は直に公使館に赴き、同館に宿泊せられ、而して余及び前田、日置の三奉迎使は、東洋館に移り、光演師隨行の石川大草等十名は「パレスホテル」に留まりて、一行は三処に別れたり。余及び前田、日置の三奉迎使は、同日午後直に公使館を叩き、稲垣公使に面会し、大谷正使と打合の上、公使の誘導にて馬車を駆りて、文部外務陸軍の三大臣、及參謀總長を訪問せり。是夜稲垣公使は奉迎使四名及隨行長南条を請して晚餐の饗応を為したり。

●第二 巨利巡拝及文部大臣邸晚餐會

十三日午前十時文部大臣は、日本公使館に來りて、昨日奉迎使訪問の答礼を為せり。午後奉迎使の一行は、文部省書記官の案内に依り、盤谷府南方仏教新派の「ワット・プロンスリン」寺に抵り（新派は今を距る五十年前先王の創設に係る者にして、寺院の裝飾儀式並に僧侶の法衣等異なる所あり）釈迦の大像を拝し、高塔を縦覽し、尚ほ寺院内に設立する巴利語學校を巡覽せり。生徒百名計あり、他日僧侶たる可き候補者は勿論、苟も暹羅に於て紳士たる可き者は、巴利語を知らざれば其資格を有する能はず。恰も歐洲諸國學士が羅典希臘語を學ぶと一般なり。該學校は比較的清潔にして、西洋風の構造にして、教師は皆僧侶なり。日本仏教各宗の學校を以て之に比すれば、或は遜色なき能はざる可し。奉迎使は歸路工部大臣及盤谷府の知事を訪問したり。此夜稲垣公使奉迎使、及隨行南条、石川、大草七名は文部大臣の晚餐會の招きに応ぜり。大臣の邸宅には、日本提灯數百を吊し、煙火を打揚げ、又蘇音器を以て暹羅の時歌を發せしめたり。深更に及で旅館に帰

れり。

十四日午前各奉迎使は文部省吏員の案内にて御遺形を蔵する高塔を拝観し、帰路内大臣を訪問す

●第三 暹王謁見

十四日午後四時、宮内省より日本公使館へ廻はされたる三台の馬車に、各奉迎使及稲垣公使同乗し、随行の僧侶も亦他の馬車に乗りて、宮門に入れば、近衛兵は左右に排列して、捧銃の礼をなせり。各奉迎使は宮内文部二大臣に誘はれて「グラントパース」に入れり。王宮は西洋流の石造にして、輪奐燦然として人目を奪ふ。巴里府の「チュルリー」「白耳塞」^{ウッセルイヤイ}の王宮、秦皇の阿房も蓋し之に過るなかるべし。然ども惜むらくは其規模の狭小なるのみ暫くありて暹王は鬪を拝して、履声高く軋りて出御し玉ひ、胸間に各国の勳章数個を帯び、盛装儼然威儀堂々、一見人をして仰視に堪へざらしめたり。王は大谷正使より順次に藤島、前田、日置各奉迎使に対して、握手の礼を行ひ玉ひ、而して大谷正使は暹王の優渥なる叡慮に依りて、今回日本仏教各宗派に対して、積尊遺形を分頒せらるゝ恩旨の辱けなき旨を拝謝せられたれば、暹王は直に暹羅語を以て数十分間の勅答を賜ひたり。其の態度の活潑にして威儀整齊、毅然として侵す可らず。音吐朗々満殿に透徹して真に謹聴す可きなり。勅語了りて文部大臣之を英語に口訳し、南条随行長之を日本語に口訳せり。左の如し

仏世尊ノ神聖ナル遺形ノ一分ヲ受領センガ為メニ、始テ此国ニ来レル日本仏教徒ノ奉迎使ヲ見ルコトハ、朕ノ喜ブ所ナリ。且

ッ日本ハ暹羅ヨリハ遠隔ノ国ニシテ、制度習慣等或ル場合ニ於テハ異同ナキニ非サレドモ、尚同一宗教ヲ信スル所ノ同教国ナルコトヲ信認スルコトニ於テ、満心ノ歎喜ト満足ノ感情トヲ以テ刺撃サレタル熱心ノ程ヲ領解アリタキナリ。朕ハ仏教ノ先導者ニシテ且保護者ナルコトヲ承認セラレシ上ハ、奉迎使へ神聖ナル遺形ヲ分配スベキ幸福ナル義務ヲ尽スコトハ甚ダ喜ブ所ナリ。従前日本仏教徒ガ此神聖ニシテ真実ナル遺形ノ分配ヲ得ザリシハ、彼等ガ其一分ヲ得ンコトヲ欲望スベシト朕ノ識認セザリシガ故ナリ。今ハ此貴重ナル宝物ノ一分ヲ得テ、日本ニ安置シ、巡拝者ヲシテ其便ヲ得セシメントスル彼等ノ願ヲ信認セシ上ハ之ヲ手渡シスルコトハ甚ダ喜ブ所ナリ。

奉迎使ノ此国ニ来リ、且ツ普ク協同ノ利益ノ為メニ、開明ノ事業ニ倦怠ナキ尽力ノ程ハ、朕ノ感謝スル所ナリ。日本仏教徒ガ海外仏教徒ヲ熟知シ、一層交際ヲ深密ニシタル後ハ、日本仏教ノ益々隆盛ニ赴クコトハ、朕ノ最モ切望スル所ナリ。

謁見式了り、控間に於て宮内大臣は暹王誕生簿を把りて、各奉迎使をして出生の年月日を自署せしめたり。

●第四 御遺形授受

十五日午後四時祇園寺に於て御遺形授受式あり。各奉迎使、稲垣夫婦、奉迎使随行諸員、及在暹日本居留住民等は既定の時間に先て、該寺に参集せり。文部大臣は英語の草稿を把りて朗読的演説を為し、然後暹羅新旧派の僧侶数十名椅子に倚り「パーツ」(宝珠形扇)を捧持して、巴利語の経文を誦し、誦経了りて文部書記

官は、小形の金塔を把りて大谷正使に授けたり。是に於て各奉迎使は文部大臣稲垣公使と立会の上、金塔を開きて靈骨を拝したり。(靈骨は曲尺三步程あり)各奉迎使は準備の如意宝珠形の金函に金塔を収め、更に錦囊を以て之を包み、二重の桐箱に封鎖して、前田奉迎使之を馬車に奉じて同乗し、一行は之れを供奉して日本公使館に帰れり。是夜各奉迎使は其の金函に封印を為し、帰朝の後各宗管長立会の上、之を開封することになせり。

●第五 内道場拝観

十六日午前各奉迎使は、文部省吏員の案内を以て、宮中内道場吉祥宝寺を拝観す。本尊は翡翠石釈迦の座像(長三尺計)にして、往昔隣国老嫗と戦ふて勝利を得たる分捕品なりと云ふ。其価値を論ずれば実に数億万円にして、暹国を挙ぐるも或は之に比するに足らざるなりと。又高數十丈の金塔あり、黄金を以て瓦となし、珠玉を以て柱梁を飾り、金碧燦爛赫奕目を奪ふに至りては、世界希に観る所の者たり。加之数千の瑛珞風に触れて相摩し、鏘々然として音響を発する有様は、宛然として楽土に遊ぶの想ひあり。又堂中敷物は銀板を以て「アンペーラ」に代へるものあり、其他小体の黄金仏に至りては、一々数ふ可らず。其美を王宮仏殿に尽すに至ては、宇内何れの国か蓋し暹羅に過る者なかる可し。

●第六 愛知阿旧都并晚波院離宮

十七日午前七時半奉迎使一行は、宮内省より仕立たる列車に搭じて、旧都愛知阿に赴く。鉄道は広軌式にて機関車の燃料には割木を用ふ。蓋し暹国は石炭を出す鉱山なきに由る。旧都は盤谷を北

に距る三十哩許にして、市街は湄南江の両岸に跨りて浮家泛屋江流に傍ふて櫛比羅列し、往来必ず舟楫の便に依らざる可らず。各奉迎使は宮内省の小蒸汽に搭じて、知事「ワルボンサー」を訪問せしも、不在にして書記官代りて奉迎使を接待し、知事の別邸に朝食の饗応をなしたり。

一行は案内に依て馭象場を縦覧す。該場は巨材を以て埒を結び、毎年交尾の候に際して馴養の牝象を率ひて、山間に至りて野生の象を誘引して馭象場に欺き入れ、堅く埒を鎖して数象中に就き、良象を択んで余は尽く之を解放する者にして、彼等が其解放せらるゝや、先を争ふて湄南江に投入して、濁水を飲み数日の渴を医する有様は、頗る奇観なりと云ふ。蓋し馭象の事は他邦になきことにして暹羅の特色なり。晚波院の離宮は洋風の築造にして其規模頗る宏壯輪奐、一見人目を驚すに足る。室内の装飾には金銀瑠璃金剛翡翠玳瑁等の寶石を用ひ、燦爛赫奕人をして応接に暇まあらざらしむ。実に宇内の珍器宝物を蒐集して人生の豪華を極むる者と謂はざる可らず。暹国全体の富の程度に比すれば、或は権衡を得ざるの感なき能はず。英仏人の暹国に対する垂涎三尺豈に其故なしとせんや。

奉迎使一行は離宮構内内務次官の別邸に於て、次官より昼飯の饗を享く、配膳頗る丁寧、一行は意外に満足して三時四十分の汽車にて盤谷府に帰れり。其他の旧趾は禾黍離々、一も目を寓するに足る者なし。

●第七 宮中陪食

十八日午後二時各奉迎使は、稲垣公使と共に宮内省より廻はされたる三台の馬車に乗り、宮中に伺候したり。即ち宮内文部外務三大臣は奉迎使を出迎ひ待合の間に導き暫時休息の後、暹王寢殿に御し玉ひ、各奉迎使に対して握手の礼を行はせられ、自から先導して食堂に入り玉ひたり。陪食の栄に与りたるは稲垣公使及奉迎使の外、随行长南条文雄師一人にして、他の十一名は暹国政府の親王及文武官なり。暹王は日本仏教の万歳を祈り、併せて各奉迎使の健康を祝し玉へり。食時中は庭前に絶へず嚙喰なる天楽を奏し、又大団扇を揮ふて涼風を送り、賓客をして溽暑の苦悩を覚えざらしめたり。食了りて別室に於て珈琲を賜はり、而して暹王より日本仏教各宗へ対して金銅の仏像（長三尺計）一軀を賜はり勅せられて曰く、此仏像は暹羅特有の鑄造にして、印度に非らず、支那に非らず、純然たる暹羅の仏像にして、一千年前の古仏なり。現時鑄造の技術を失ひたれば、今之を鑄造せんと欲するも、復た得可らず。是れ我邦の重宝なり。願くは他日日本に於て靈骨安置の殿堂出来せば、此仏を御前立として安置せられんことを望むのみ」と懇勲に各奉迎使に対して、握手の礼を行ひ、海陸万里帰路恙かなきを祈ると勅し玉へり。了て各奉迎使は退出せり。

正使大谷光演師へ対して別に金銅の仏像一軀（長一尺計）を賜はり、又各奉迎使に対しては紀念章四枚を賜はりたり。一個は青銅にて、二個銀製、他の一個は金製なり。各表面に仏像を彫刻せり。（別記の如し）文部大臣よりは各奉迎使并に随行の僧侶に対して、仏像一軀宛贈与せり。外務大臣よりも各奉迎使へ贈品あり。

●第八 公使館夜会

是夜稲垣公使は各奉迎使及随行員其他暹国政府の文武官并在暹国の公使領事貴夫人等百有余名を招きて、夜会を開き、軍楽を奏し、暹羅の優伎を演し、日本の煙火を打揚げて、余興を助け、立食の饗応あり主客歡を尽して深更に及で散ず。蓋し該会は奉迎使の為に開きしものに似たり。

●第九 奉迎使出立

十九日午前十時奉迎使日本公使館に集まり、文部省より廻はされたる小蒸汽船に搭じ、稲垣公使夫婦及文部大臣秘書官等同船して湄南江を下り、河口に淀泊せる独逸船「マールラット」号に移れり。在暹日本人は勿論文部大臣自ら来りて奉迎使の一行を送れり。而して「マールラット」は午後二時汽笛と共に抜錨して湄南江を離れたり。奉迎使一行盤谷府滞在は僅か一週日なれども、朝参訪問応請待賓日夜奔走して遑まらざりき、又暹羅政府は接待官を附して名勝旧跡に案内して奉迎使一行をして十二分の満足を与へたり。如此き取扱ひは毫も国賓と異なる所なし、暹羅にあらざれば安んぞ仏教徒に対して、如此優待厚遇するの国あらんや。而して稲垣公使の周旋尽力の行届きたる亦与りて其多きに居ると云はざる可らず。

奉迎使一行は二十四日新嘉坡に着し、仏蹟参拝は都合ありて之を見合せ、大谷前田日置三奉迎使は仏体を供奉して、直に帰朝の路に就き、余は本山の命に依り、一行に別れて来九月初旬巴里に開ける万国宗教歴史会に参会の爲め、欧洲行の程に上れり。

(附記) 記念章の符号の説明

円かなる記念章の表面には仏世尊の緑玉石の形像を表し、背面には「タンニチャツカ」(法輪) 即法の主権を意味する車輪を表す。之に附記する略字は「アツタンギガマツガ」(八支聖道) を意味す。曰く正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定是なり。其他の記念章は其樹下に於て世尊の正覺を成し玉ひし菩提樹葉の形なり。其表面には暹羅に於て多く札拜する所の世尊の大古青銅の像なる「プラ」「尊」「ブツダ」「仏陀」「ヂナミーハ」(勝獅子) と呼ぶ所の像を写し、背面には仏教紀念二千四百年に於て之を創造せし年代を示す文字あり。

奉迎仏骨于暹羅舟中 (明治33年7月29日 第七十三号)

奉迎仏骨于暹羅舟中

藤 島 胆 岳

万里鵬程飛擊処、一函仏骨奉迎時、孤舟近傍潮州過、憶着當年韓退之、

水天一色気如秋、露月光風送客舟、海不揚波已三日、

計程明曉到獅州、新嘉坡此
云獅州

盤谷府雜詩

藤 島 胆 岳

王宮仏殿与雲連、翡翠金剛七宝鮮、如此豪華尽膏血、看来誰不涙潸然、

高塔巍然天半横、黄金為瓦玉為楹、低徊仄耳異鄉客、

瑛珞触風鏘有声、

風払旌旗響玉鑾、鳳凰宮闕五雲攢、天恩優渥豈無感、咫尺童顏陪午餐、

帰路抵新嘉坡俄然有欧洲行之命、

乃賦此留別同行諸君

藤 島 胆 岳

北辞暹国到獅州、又上遠征欧米舟、一鶚離群張健翼、八千里外海天秋、

宿志蹉陀不易酬、欲探仏蹟事還休、何図異域東西別、

君向扶桑我向欧、

新嘉報通信 (明治33年7月29日 第七十三号)

在新嘉坡

佐々木 千 重

六月二十四日 日本各宗派仏骨奉迎使一行十八名 暹羅帝より仏骨を奉受し、独乙コーラツト号に乗じて、盤谷府より當港へ同日午後四時着、六時半上陸、大谷奉迎使はラツフルホテルに、曹洞宗并に妙心寺派奉迎使の日置前田の両氏は松尾旅館に、我が本願寺派奉迎使藤島氏は本願寺派布教場に直に投館せらる

二十五日 大谷奉迎使我布教場に臨場せらる

二十六日 午前八時奉迎使一行十八名、當地植物園を巡遊せられ、佐々木千重先導申上げ数時間の間園内散歩後帰路大雨に遭ひ

て急に帰館

二十七日 休養

二十八日 午後一時我本願寺布教場に於て南条博士、并曹洞宗日置黙仙、我が本願寺派藤島了穩の諸氏を聘し、演説会を開きし

が、先づ佐々木千重開会の主意を述べ、次に南条博士は因縁釈、日置氏は仏の字釈、藤島氏は和讃を題して説教一席を演述せらる。数百の聴衆渴仰の頭をうたれ、歡喜の内に午後四時半退散、二十九日 奉迎使一行帰朝の途に就かんがため、彼阿船ビエナマルタ号乗込、三十日午前八時當港解纜、就中我本願寺派藤島氏は山命を帯びて仏国巴里宗教大会に臨まんがため、独り當地より直に欧行せらるゝ、目的を以て、郵船待合の爲め、目下尚ほ我布教場に滞在、多分七月八日発の仏船ララス号に乗船ならん。

積尊に対する真宗信徒の心得〔明治33年8月11日 第七十四号〕

社 説

近時各地に積尊降誕会の新に修行せらるゝあり。又は今回御遺形奉迎及び奉安の事あり。其局に當るもの或は各宗派本山あり或は有志団体あり。其中亦た事を執るに厚薄過不及なきにあらざる乎の疑ひあり。而して疑問は遂に進んで我が真宗の教徒は如何に積尊に事へ奉るべきや。如何に積尊に対し奉りて心得べきや。と云ふに及ばん。吾人は我が敬愛する所の宗内同胞の人々の爲めにもがなと思ひ、頃日安居本講師として、在京中なる勸学利井鮮妙氏を叩き、此事に関して一席の講話を乞ひたり。氏莞爾として乞を納れ、即ち吾人に其心得方を語らる。今其の趣意を筆記して、特に本欄に掲げ、読者に頒つこと、なしぬ

記 者 識

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

我が真宗に於て、積尊に対し奉るに二様の義あり。第一には本門に約して伺ひ、第二には迹門に就て伺ふ是れなり。先づ本門より伺ふ辺を語らんに、口伝鈔三身章の下に覺運和尚の積を引て、積迦の本門、久遠実成の阿弥陀仏たることを積し給ふ。(今、口伝鈔の文を抄出すれば左の如し)

檀那院の覺運和尚は、久遠実成弥陀仏永異諸經之所説と積せらる。しかのみならず、わが朝の先哲は、しばらくさしおく、宗師異朝の善導大師の御釈にのたまはく、上従海徳初最如来、乃至今時釈迦諸仏皆乘弘誓悲智雙行とを積せらる。しかれば海徳仏より本紙積尊にいたるまで番々出世の諸仏、弥陀の弘誓に乗じて、自利々他したまへるむね顕然なり。覺運和尚の積義、積尊も久遠正覺の弥陀ぞとあらはさるゝうへは、いまの和尚の御釈にえあはすれば、最初海徳以来の仏々もみな久遠正覺の弥陀の化身たる条道理文證必然なり。一字一言加減すべからず。ひとつ経法のごとくすべしとのべまします。光明寺のいまの御釈は、もはら仏經に准するうへは、正宗の正依經たるべし。傍依の經に、またあまたの經説あり。楞伽經にのたまはく、十方諸刹土、衆生菩薩中、所有法報身、化身及変化、皆從無量壽、極樂界中出生ととけり。また般舟經にのたまはく、三世諸仏念弥陀三昧成等正覺とともとけり。諸仏自利々他願行、弥陀をもてあるじとして、分身遣化の利生方便をめぐらすこと掲焉、これによりて久遠実成の弥陀をもて、報身如来の本体とさだめて、これより応迹をたるゝ諸仏通総の法報応等の三身は、みな弥陀の化用た

りといふことをしるべきものなり。
又た和讃に云く

久遠実成阿弥陀仏、五濁の凡愚をあはれみて、
釈迦牟尼仏としめしてぞ、迦耶城には応現する

是に依て釈迦已に弥陀の迹門化仏なるときは、
弥陀の外に釈尊を見るべからず。法華五百塵点劫の本門の
釈迦の外に、伽耶出現の迹門を見ず。
是れ迹を撰して本に帰せしむるものなればなり。

次に迹門に就て伺はゞ、大經の五徳安住は、
本仏弥陀の徳に融し給へるものにして、
唐訳の如来会に依れば、入大寂定、
行如来徳と云へり。大寂定とは弥陀の自境界にして、
之に安住するを住奇特法と云ふ。
此の奇特法たるや、法身般若解脱の三徳にして、
即ち住仏所住とは法身（法身は仏の自境界なるが故に
仏所住と云ふ）、住導師行とは般若（般若
は智慧にして物を引導するが故に導師行と云ふ）、
住最勝道とは解脱（真仏十一巻に無上々者、
即真解脱、とありて、最勝無上なるが故に最勝道と云ふ）、
此の法身般若解脱の三徳に入りて、
而かも三徳の現はれたる姿が、第五の行如来徳なり。
然れば大經を説き給ふの釈尊、
弥陀の自境界に安住して、
而かも自境界を説く。而して其の弥陀の自境界たるや、
通途諸仏所證の単理を指すにあらず。
生仏不二にして法性即方便の平等證なれば、
三徳秘密蔵の俛が欲拯群萌恵以真実之利の名号法なり。
然れば名号法に入りて、
名号法を説くものは大經の教主釈尊なり。
教主の釈尊は名号法の外に釈尊の別徳あるに非ず。
此の姿を「光顔巍巍、如明淨鏡、
影暢表裏、威容顕曜、超絶

無量、未曾瞻覩、殊妙如今」と説く。
但し出興し給ふ上に於て暫く二尊を挙ぐれば、
弥陀は招喚の人、
釈迦は發遣の主なり。
故に願には欲生我国と誓ひ、
成就には願生彼国と説く。
玄義分に曰く
釈迦ハ此方ニ發遣シ弥陀ハ彼国ヨリ來迎ス彼ニ喚ヒ此ニ遣ス豈ニ容レ不レ去也

和讃に曰く

真実報土の正因を、二尊のみにたまはりて等
釈迦弥陀の慈悲よりぞ、願作仏心はえしめたる等

釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し等

此の如く二尊に約すれども、
招喚の方より云へば、
釈迦の所説は是れ正覺大音響流十方の位にして、
如来尊号甚分明、十方世界普流行（五会法華讀の文）の姿なり。
又た發遣の方より云へば
釈迦の招喚を全うして釈迦の所説なり。
故に和讃に一たびは釈迦を弥陀に融して、

弘誓のちからをからずば、
いづれのと看にか娑婆をいでん、
仏恩ふかくおもひつゝ、
つねに弥陀を念ずべし

と述べ、
又た一たびは弥陀を釈迦に属して、

娑婆永劫の苦をすてゝ、
浄土無為を期すること、
本師釈迦のちからなり、
長時に慈恩を報ずべし

と宣ふ、
然に我が真宗に在ては
釈迦を弥陀に融するを以て宗義と立つるなり。
若し二尊並ぶるときは、
誤て喚遣一致、
本迹不二の意を失することを恐る。
故に末を撰して本に帰する。
爰を以て、
御伝鈔に「今の行者誤て脇士につかふることなかれ」とありて、

觀經所現の三尊は、即ち一無量寿仏なるの義を知らしめ給ふ。二菩薩は弥陀悲智の二徳より出で給ふを以て、脇士を没して一弥陀仏を安置し奉るものとす。今、釈尊に対する心得も亦之に同じと知るべし。

是を以て本門より云へば、伽耶城に応現の俣が即ち本仏の弥陀なり。又た迹門より云へば、釈尊の全体が即ち南無阿弥陀仏なれば、釈迦の發遣とて名号の外にあるべきものなし。故に釈迦を以て弥陀に帰して別に安置せざるを以て我が宗則とす。

●日本大菩提会の近況〔明治33年8月11日 第七十四号〕

日本大菩提会には本派の加入せざる所にして、該会の成行を報道するの必要なぎに似たれども、左に近況一二を報道せん

大阪毎日新聞の報道に曰く。鳥尾子爵の主唱にかゝる愛國護法会にては、七月八日午前九時より京都洛東高台寺畔鳥尾子別業一得庵に、大日本菩提会及び仏骨奉迎の事に關する協議会を開き松本鼎、小林清一、小松喜平次、秋山恕卿、池田清助、中井三郎兵衛及び大阪の加嶋信成、その他二三氏出席し、仏骨奉迎の事は最早時日切迫せしにつき如何ともする能はざれども、菩提会において教育及び慈善事業計画の事は現今の情況より考へ、到底六つかしければ見合すべしといふに決し、菩提会理事村田寂順師にその意を伝へ、期日を定め同会の有力者を一堂に會し、松本氏より護法会の所見を開陳すること、せりと。

東本願寺にては、近頃日本大菩提会第一期の事業たる覺王殿の建

築すら延期説を唱ること、なり。左の建議書を同会に提出せられたりと

大聖の遺形は数十里の遠きより魔事なく着御被為在候事、全く仏天の冥裕と奉感戴候、就は会則第三条に抛り亟かに覺王殿の奉建に着手し崇敬の誠を尽すべき所に候へ共、遷流の世態右会則議定の當時に同じからず、遠くは即ち竺乾の凶歳、近くは即ち北清の擾乱等局面一変徒に守柱すべからざる時運に向ひ候、乃ち北清に於ける帝國軍隊の成敗利鈍は国威の消長と相關し、又如來降生の聖蹟に於て現出しつゝある飢餓相望み流氓腫を接するの狀況は、到底我徒の晏然たるべき所に無之、苟くも四恩の重きを知らば傍觀すべき所に非ず、宜く御遺形來朝の大方便力に依り、大に吾仏徒を鼓舞し帝國祖宗の御遺訓をして深く國民の心胸に銘剋せしめ、忠君愛國の常經を以て全國民を打して一団とすること至要中の至要、此れに過ぎたるものなく、之より急なるものなし。此の大本領を基礎として大に国に酬い世を救ふの事に従ひ度、仏意の在る所亦此に外ならずと存候、依て如來の遺形は當分之を假殿に奉安し、国家水陸軍士及家族の慰恤と印度飢餓の救済とを先にし之を實行する方法は、新聞に演説に其他諸種の便宜を採り、覺王殿建築の費を転じて之を前陳の二事業の費とし、四恩の重きに感奮し、大慈を實踐躬行せしめ國民の品性を高尚誠懇ならしめ候はゞ、他日覺王殿を建て仏徳を奉揚することは、手に随て行はるべきこと、存候、依て先づ国家人民に対する仏教の本旨を實行するを先とし、覺王殿

建築を後にすることに御改め相成度、此段及建議候也。

大谷派本願寺参務 石川舜台（外五名）

大菩提会三十年の事業も、未だ其初歩に達せずして、少しづつ、変形を示めず、難い哉、永年の業、

●稲垣公使の書面〔明治33年11月26日 第八十一号〕

去九月廿一日発を以て、暹羅国駐劄稲垣全権公使より大菩提会總理妙法院村田寂順師へ寄せたる書翰左の如し。

（前略）本月（九月）廿一日、當国陛下御誕辰祝賀の爲め参内謁見の榮を得候節、日本に於て御遺形に対し盛なる奉安式を舉行したる状況に付、日本駐劄當国公使より写真を添へたる委しき奉告を受けさせられ候趣、斯迄も日本仏教徒が御遺形を歓迎するの現象は、誠に意外の感を懐せらる旨を親しく御言葉を賜り、非常に御満足と見受申上候、尤も右は仮奉安式の事なれば、何れ明春を俟ちて更らに正式奉安式を舉行する旨言上致置候

扱仄かに承り候へば、日本仏教家全体より當国王陛下へ御遺形御分与御礼の爲め、再び使節を御派遣の御詮議も有之哉に御座候処、今回當国王陛下は仏教の爲に該教に関する図書館を當地に御建設の御企画有之、既に當国内務外務宮内文部等諸大臣を挙げて其委員とし、印度緬甸當国等に於ける古今の仏書并に歐洲各地に於ける仏教に関する著書等も募集の御着手中に御座候、就ては積尊御遺形御分与に対する御礼としては、本邦各宗

派の仏書を蒐集せられ當国王陛下へ奉呈相成候はば、独り同陛下の御満足のみ止まらず、蓋し仏教の爲めに一大慶事にも可有之乎と確信被致候、尤も各宗本山に於て夫々其派の仏書を蒐集せらるゝは困難の事にも無之かるべく且つ之れが費用逆も左程莫大なる額をも要せざるべく、左れば先般も申上候、日本仏像（奉迎使各位篤と御承知の筈）と併せて御献上相成候は、高価なる物品よりは寧ろ同陛下の聖旨に協ひ可申最良の方法かと存候、尚ほ右書籍類は可及広く御蒐集相成候はば、無此上事乎と被存候

尊師并に各宗派管長各位の御一考を煩し度候、乍末筆御遺形に付、小生の尽力たる微力を御丁寧なる御礼詞に預り候へども、万事不如意にて却て汗顔の次第に御座候、就ては今後も何歎當方に御希望も御座候は、乍不及御尽力可任候間、無御遠慮御申越被下候、先は當用耳得貴意候、早々

●藤島了穂氏帰朝〔明治33年12月29日 第八十三号〕

曩に仏京巴里に於て開きたる万国宗教歴史大会に参列したる本派藤島了穂氏には、十月二十六日若狭丸に搭じて竜動を発し、本月十四日我が神戸に帰着し、直ちに帰京せられたり。

●御遺形奉迎費寄附〔明治34年1月20日 第八十四号〕

昨年積尊御遺形奉迎の爲め、各宗派より奉迎使を暹羅国へ派遣ありたることは読者の知る所なるが、已に本派の藤島了穂氏も奉迎

使の一人として彼国に赴かれ、其の費用の如きは本派本山にて繰替へて出張ありしことなり。然に他の各宗派に在ては大菩提会の募財金中より之れが埋合はせを為すの都合なるも、本派に在ては大菩提会の募財に關係なく、其の収入金と奉迎費の損益とは知る所にあらず。其れかあらぬか、知らざれども、本派本山にては、曾て藤島氏が暹羅国へ出張ありし為め要したる同氏の旅費として繰替へたる金五百六拾参円参拾九銭を悉皆奉安事務所に寄附せられたりと。

●稲垣公使の書翰〔明治34年1月20日 第八十四号〕

暹羅国駐劄特命全權公使稲垣満次郎氏より積尊御遺形奉安事務総理村田門跡へ左の如く来書ありたる由、同国王陛下の如何に仏教を御信仰遊ばさるゝやをも、伺ひ奉らるべければ、茲に掲ぐ、

去十一月十日御恵投の御答翰本日接受具さに拝誦仕候処、曩に御転送申上置候、當国 皇后陛下よりの御寄贈品遅滞なく安着御入掌の趣了承致候、却説其際以愚翰當国 国王陛下御企画の仏教に関する図書館建設の儀に付、聊か呈愚見置候処、其後種々御配慮之段感謝此事に御座候、去五日小生が當府デューシット公園に於て當 国王陛下に拝謁の折、同伴に關し親しく御物語あらせられ、今回仏教に関する書籍類を蒐集し一の図書館を創立せんとすの計画中に付、日本に於ける仏書類蒐集の事相運び候に於ては、朕の最も至幸とする処なりとの御仰せに

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

付、該件に關して曩きに拝呈せし愚翰の委曲及び小生が其成效を期する旨をも併せて及奏上候処、殊の外御満足に思召され、果して之れが成效の曉こそ朕は感謝の意を表するの詞なしとの御勅答さへ有之候、又先般御依頼し置きたる仏像の件に付ても御下問有之、何れ不遠相運び候旨御奉答致置候、右仏像の儀は今回御建設の寺院へ安置せらるべき筈にて、是又汎く各国の仏教界より御蒐集あらせらるゝやに奉伺候、畢竟同 陛下が如何に仏教に御熱心遊ばさるゝや、其一班を奉窺に難からざる次第に御座候、勿論已に御配慮中にも有之不遠御決議の御運びに立至るべき儀と被存候得共、當国 国王陛下が斯迄本件に關し深く叡慮に懸けさせらるゝの主旨を奉体し、可成迅速御運び相成候得ば、独り小生の光栄のみに止らず、同 陛下の御満足も亦之れに過ぎさせられざるべく被存候俛為念右申進候、早々謹言

在暹大日本公使

明治三十三年十二月八日 稲垣 満次郎

積尊御遺形事務総理

村田 寂 順 師 榻 下

●拝瞻会に付参拝〔明治34年4月25日 第九十四号〕

洛東妙法院内なる積尊御遺形奉安所に於ては、本月上旬より下旬にかけ御遺形拝瞻会を修せらるゝに付、本派本山にても奉安事務総理村田門跡の案内に接し参拝相成りたり。右は祝下御不例中に付寂用院連枝に御代理を命ぜられ、名和瀧海氏以下執行所役員諸

氏を率ゐて、去る九日正午参向相成り、拝礼の後ち勤行を修し、午後一時三十分帰山せられたり。

●**积尊大聖忌法要御親修**〔明治34年4月25日 第九十四号〕

本派本山にては、本月十五日午後二時、洛西嵯峨清涼寺の申請に依り同寺に於て、积尊二千八百五十年大聖忌法要を御親修あらせられたり。同日午前十一時、御代理として淳淨院連枝には馬車にて藤井皆立氏外数名を従へ御参向、同十二時二十分御安着、午後二時御出堂、例時作法の法要を厳肅に御修行相成りたり。此法要結衆は二十口にして今小路寛尊、藤山沢縁、藤井皆立、園誠憲、三谷教応、神保達元、佐々木中成、美園超乗、滝川寛了、朝倉明宣、松下観雅、幡山教寛、長谷川楚雲、鎌田正観、中山正応、伊藤祐寛、青木周誓、山本豊城、阿部珀琳、山中実雄の諸氏勤められ、会行事は堅田広吼氏にして、威儀師は近藤亮成氏之を勤めらる。承仕は布賀瀬竜璋、広瀬清徹の二氏にてありき、淳淨院連枝には法要畢て暫時御休憩の後ち、各諸氏を従へ午後四時五十分御帰山ありたり。

(**本山録事**)

乙達第三十五号

四州教区管事

近來其教区寺院中、大菩提会勧誘員ヲ招聘シ勸募致候向有之哉ニ相聞へ候処、予テ本派寺院ヲ他宗派ノ所用ニ供シ、又ハ本派僧侶

ニシテ他宗派ノ用務ニ従フ義ハ不相成ノミナラズ。大菩提会ニ対シテハ客年中及訓告置候次第モ有之候ヘバ、心得違無之筈ニ候得共、各組組長ヲシテ厳重取締致サシムベシ。

明治三十四年八月廿四日 執行長 梅 上 沢 融

●**拝瞻会に付参拝**〔明治35年4月25日 第一三〇号〕

洛東妙法院内なる积尊御遺形奉安所に於ては、本月上旬より下旬にかけ御遺形拝瞻会を修せらるゝに付、本派本山にても例に依り、本月十六日午前十一時、侍真藤山沢縁氏を始め柱本香林、佐竹誓応、長谷川楚雲、伊藤祐寛、山中実雄、青木周誓の諸氏参拝させられ、式典の後ち、帰山ありしは午後二時三十分にてありき。

●**還幸^附奉迎送**〔明治35年11月25日 第一五一号〕

大元帥陛下には、大演習地より還幸あらせ給へるを以て、本月十八日午前九時十四分、七条駅御通輦に付、本派本山にては、山内一般、式服着用の上、前例に依り三哲通大宮東入竜岸寺門前に於て、謹て奉迎送せられたり。

积尊御遺形名古屋御遷座〔明治35年11月25日 第一五一号〕

是迄洛東妙法院仮奉安殿に奉安せる积尊御遺形は、曩に各宗派の議決に依り名古屋に奉安殿を建設することゝなり、本月十五日を以て御遺形は名古屋に御遷座相成たり、本派よりは御代理として藤島了穩氏随行員を伴ひ奉送せられたり。

●藤島了穩氏の河内渡航〔明治35年11月25日 第一五一号〕

本派の藤島了穩氏は今度仏蘭西領東京の首府河内にて開く、東洋学会の万国公会に出席の爲め出張を命せられ、本月二十一日神戸出發にて渡航せられたり。

●本派本山と日暹寺創設事件〔明治36年9月15日 第一八〇号〕

已に記載の如く、釈尊御遺形奉安所として、今回覚王山日暹寺を創建の事に決し、大菩提会副会長日置黙仙氏より、先般来小田執行長、藤井執行の両氏に面接又は書面を以て、再度賛同を求め、且つ日暹寺創建願書に同意調印を請ひ来れる処、彼我往復の書面は左の如し。

謹啓

残暑尚未収候 猥下益御健勝ニ被為渡候条奉賀候、陳ハ先年暹国皇帝陛下ヨリ釈尊御遺形ヲ日本仏教徒へ御頒胎相成候節ハ、貴宗派ヨリ藤島了穩殿御差遣ニ相成、當時暹国皇帝陛下ヨリハ莊重ナル御待遇モ被為在候御事モ有之候ノミナラズ。教主世尊ニ対スル衷情ヨリスルニ一日モ速ニ御奉安其処ヲ得セシムルハ、教主ニ対シ国王ニ尽スヘキ一大責任ト奉存候、特ニ暹国皇太子殿下ハ曩ニ猥下 御訪問相成候事モ有之、又稲垣公使ヨリ日暹両国ノ将来ノ厚誼ニモ影響スル処尠カラサル趣モ陳情被致居候事モ伝聞致居候、且猥下ニ被為於テモ日暹両国国際ノ如何ト、彼我仏教ノ連鎖ニ至リテハ、夙ニ御懸念ノ御事ト奉存候。就テハ御遺形御奉安所トシテ、今回覚王山日暹寺創建ノ事ニ決

〔教海一瀾〕における仏骨奉迎の記事について

シ各宗管長猥下ノ御調印ヲ請ヒ候ニ付、過日貴宗派執行藤井皆立殿迄詳細ナル事情陳述致置候へバ、同人ヨリ既ニ上陳ノ事ト奉存候、速ニ御調印被成下度及御依頼候、敬具

八月二十日

日置黙仙

大谷光瑞殿

而して又た九月一日付を以て、小田執行長、藤井執行の両氏へ宛、左の書面を送り来れり

拝啓

兼々御依頼申上置候、覚王山日暹寺調印之件、不日稲垣公使帰国仕候間、夫迄ニ取纏メノ必用有之、殊ニ過日申上候通、本件最終之美ニ候得バ是非貴宗本山ニテ円満相願申候、水流テ海ニ帰シ月落テ天ヲ離ズ、奉迎當時ニ立戻リ、発議之通りニ運候事ニ候得バ、何分宣布願上候、右得貴意度候、早々頓首

九月一日

日置黙仙

本派

小田執行長殿

藤井執行殿

次に前記書面に対し、覚王殿建設委員日置黙仙氏へ宛、左の如く回答せられたり

拝展日暹寺創建願書ニ対シ、弊山へ同意調印可致旨御請求相成候処、御承知之通御遺形奉安殿建設ノ件ニ就テハ、予テヨリ御同盟各宗派之御経営ニ係ル義ニシテ、弊山ハ從來関係不致義ニ候得者、過日モ申述候通り御請求ニ難応候条、此段及御回答候

也、

但到底御同盟各宗派ニ於テ御共同御経営難相成事情モ有之候得者、進テ弊山ニ引請奉安所ヲ建設シ御崇敬ノ誠ヲ尽スヘク候得共、此場合ニ於テハ從來之行掛上、他宗派合同之義ハ御断致候外無之候、此段添テ申進候

明治三十六年九月八日

執行長 小田 尊 順

執行 藤 井 皆 立

日 置 黙 仙 殿

●日暹寺創建調印謝絶の理由〔明治36年9月15日 第一八〇号〕

釈尊御遺形奉安所として日暹寺を建設するに就て、同盟各宗派に代りて、日置黙仙氏が本派本山に対し、創建に同意し願書に調印すべき旨請求ありしに付、其の往復の書面は載せて本誌前項に在り、一読之を看過するときは如何にも本派本山は頑固一徹、一向に他と協同事を成すの意なく、御遺形に対し崇敬を欠くことなきやと誤認する人なきにしもあらざるべければ、吾人は何故に本派は此の如く日置黙仙氏の請求を斥け、日暹寺創建の件に關係を絶つこと、せられしや、吾人審案の後ち、吾人として考究したる、右謝絶の理由を記すれば左の如し、

抑も釈尊御遺形の御渡来あるに當りては、本派は仏教各宗派と共に其奉安諸件を洛北妙心寺に議し、決議に依りて奉迎使を派遣することゝなし。藤島了穩氏を派して使節を全ふせしめられ、而か

も同使節費は本派として之を負担し、他の各宗派に迷惑を懸けられざりき。此の如く本派は各宗派に一致して奉迎し終られたり。然に之を奉迎し終りて後ち之を奉安するが為め、奉迎所を建設するに際し、更に各宗派會議は開かれたり。此時も本派は管長代理並に委員出席して擬議したり。然に其の最初現はれんとしたる原案に曰く

一金壹千万円を全国より募集する事

一御遺形奉安所の地所を十町四方とする事

一奉安所には中央に十三層塔を建設する事

一境内に学校、病院、図書館、感化院を設る事

一此事業を為すが為め仏教会を組織する事

此の案は数回討究し、本派の同意する所とならざりしを以て更に改案する所となり、左の提案となる

一各宗派に於て日本大菩提会を組織する事

一日本大菩提会の事業として第一奉安所たる覚王殿を建設する事、第二教育及慈善事業を為す事

一七ヶ年を期し壮大堅牢なる覚王殿を建設する事

一右工事は壹百万円の寄附会員を得たる後ち着手する事

右等の提案は本派の全然同意する能はざる所にして、其當時既に各宗派と同盟して成業する能はざる理由を陳べて、其の一致事を処することを謝絶せられたるなり。此の如く一千万円の大事業を企図するにせよ、又た壹百万円の寄附会員を得たる後ち七ヶ年を期して壮大堅牢の大殿堂を建築するにせよ、一心之を見るときは

壮快なるに相違なし。雷同附和するに於ては、多数に附流れて同意して可なるか如くなるも、本派に在ては徒らに眼前の壮快を望みて事業の前途如何を顧みざるが如きは執る所にあらず、苟も同意決議する以上は、勇進以て其成業を期せんことを欲する訳なれば、仮令各宗派三十余派一致して可とする事にせよ、成業の見込なしと思惟せる事には同意する能はざるなり。故に其當時は旭日の勢を以て進み、順風に棹すか如き状を以て、事を執りし各宗派と分かれ、頗る他の各宗派の嘲笑の具とも見做され、本派は同盟各宗派の外に見放なされたるが如く、孤立、他に依るべきなき憐むべき状に陥りたるが如くにてありき、然りと雖も本派は外観の壮、仮面の美は望む所にあらず、一時の仮勢に眩迷して百世に醜を流すが如きは本派の忍ぶ所にあらず、故に巷千万円の募集件の如き、七ヶ年を期して数百万円の殿堂を築くが如き、帝国の仏教徒を駆りて悉く大菩提会に加入せしむるが如き、到底云ふべくして行ふべからざる事なれば、本派は此の如きことには責任を以て同意する能はざる所なり。是を以て本派には其當時管長代理近松殿の名を以て同盟謝絶の旨を申入れられ、自今奉安所建築の事業には賛成なるも、其の事業の経営は一切同盟各宗派の為さるゝが俛に一任し、本派は応分の寄附を為すに止め、事業上に就ては関係せざることをなし。其の同盟を脱せられたるものとす。

此の奉安事件に付本派が、他の各宗派の同盟を脱せられたるは、実に去る三十三年六月にして、爾後本派は他の同盟各宗派の為すが俛に一任し、更に関係せられざることゝなりたり、故に爾來本

「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について

派は他の同盟各宗派に於て幾千万円を募集せらるゝも、十町二十町四方の奉安所を設けらるゝも、学校病院又は図書館感化院を設けらるゝも、一向に關係せず、京都に奉安せらるゝも、名古屋に奉安せらるゝも、大菩提会を設けらるゝも、解散せらるゝも、他の同盟各宗派の事なり。一たび他の同盟各宗派に於て責任を以て遂行せんと期せらるゝ以上は、本派は素り容喙すべき限にあらず、本派は其同盟各宗派の成功を待つ外の外、他あらざるなり。此く本派が奉安事件に付同盟を脱したる間に於て、本派が同事件に關係せざるは、本派が彼此の責任を重んぜらるゝに在りて、苟も責任なるものを知る者は多言を要せずして知る。彼此両者の間に於て議論一致せざるが為め、他の一方に譲りて去りたるときは、去りたる者は自今他の一方の経営に關係せず、沈黙を守りて在るが去りたる者の務めたり。而して他の一方に在ては其譲受けを為したる以上は、勇往邁進其衝に當れるの責任を尽さずんばあらず。例せば国政を料理する閣相に於ける、自己の所見を以て立つものにして、所見行はれずんば責任を以て退くべし。苟も内閣に立つ間は他の容喙を許さず、他も亦た容喙すべき限りにあらず。若し誤て閣相失敗せん乎。責を引き第二者に譲て去らざるべからず。此時に方りては第二者も進て前内閣に代て、経営の衝に當るべきなり。今も亦た此の如きもの歟。他の同盟各宗派は三十三年以來責任を以て、御遺形奉安の事業を経営し來り。今日に至て成功したるか、將た失敗したるか、若し成功したるならんには、何ぞ今日事新しく本派に向て、同意調印を求むるの要あらんや。

又た若し失敗したりとせん乎。宜く責を引き白旗を樹て、本派の門に降来るべきなり。是れ責任を重んずべき者の為すべき所ならずや、左れば今回他の同盟各宗派に於て日暹寺を建設せんとて本派に交渉せらるゝ所あるも、本派本山にては何とも回答の仕方なく、云はゞ余まれも他の各宗派の無責任なるに喫驚せられしにはあらずやと察せらる。左は云へ前には稲垣公使の来山交渉あり。今は日置氏の来書あり。回答せずして已むべきにあらざれば、前項に記載せしが如く従来の上、同意調印する能はざる旨を回答せられしことゝは察せらる。

元來他の同盟各宗派は三十余派の多きに及べり。夫れく責任を重んじて専心経営せらるゝに於ては、事業の成らざる憂なかるべし。今日に至て京都にも奉安する能はず、名古屋にも成功せず、大菩提会も予期に反すと云ふの有様は、他の同盟各宗派が熱心事に當らざるの致す所にあらずや。本派は熱心ならざる宗派と共に一致合同することは不可能の事たるべし。本派は苟も事を引受る以上は、之を实地に遂行せずんば已まず。故に従来不熱心にてありし歴史を有する各宗派と合同して為すことは、如何に忍耐強き者と雖も首肯し得ざる所なるべし。

以上陳るが如くなれば、本派の調印謝絶は故なく謝絶せられしにあらず。責任の所在を明にして、去就進退を正ふせんと欲せらるゝに在るものと謂ふべし。左れば回答書の但書に於て、「到底御同盟各宗派に於て御協同御経営難相成事情も有之候得者進で弊山に引請奉安所を建設云々」答へられたりと察せらる。右は記者

一己の意見に依て記述したるもの、蓋し本山の御意見も或は當らずと雖も遠からざるべきか。

●日暹寺と絶縁（明治36年10月5日 第一八二号）

本派本山が覚王山日暹寺創立に際し、同盟調印を謝絶せられしことは、前々号に記載せしが、同創立に同盟調印を要求せられたる黄檗、臨済の八本山も協議の上調印せざる旨回答せしに付、客月二十五日、日置黙仙氏は最後の交渉を為せしも遂に纏まらず、同二十六日左の書面を同盟各宗派管長に提出し、全く日暹寺と絶縁したりと。

一 今般日暹寺創立出願の件は、同盟連署せられたる各宗派の所為に任せ異議なきは勿論一切関係無之候也

明治三十六年九月二十六日

黄檗宗管長	佐伯蓬山
臨済宗東福寺派管長	濟門敬冲
同 建仁寺派管長	竹田黙雷
同 相国寺派管長	中原東岳
同 南禅寺派管長	豊田毒湛
同 大徳寺派管長	菅方州
同 永源寺派管長	久松琢宗
同 天竜寺派管長	高木竜洩

各同盟宗派管長宛下御中

研究業績 (2015年1月～12月)

青山健太

<論文>

日本におけるサッカー審判員育成システムに関する研究—関東大学サッカー連盟の学生審判員育成に着目して— (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第4号 2015年 43-62
3月

「教養セミナー」のあり方と「21世紀の教養と教養教育」について (共) 『愛知学院大学教養部紀要』第63巻第1号 2015年 27-39
9月

<その他> (翻訳・資料・その他)

<特集記事・テーマ> 日本における障がい者サッカーについて～ブラインドサッカーに着目して～ (単) 『スポーツ史学会・会報ひすぽ』(No. 92) 2015年 4
10月

石川一久

<論文>

古英語における動詞・不変化詞構文の構造について (単) 『愛知学院大学語研紀要』第40巻第1号 2015年 49-75
1月

石川雅健

<学会発表>

学校危機に遭遇した教師の体験に関する実証的研究(8)—教師の不祥事を経験した教務主任の語りから— (共) 日本教育心理学会第57回総会 (新潟コンベンションセンター) 2015年 8月

学校危機に遭遇した教師の体験に関する実証的研究(9)—生徒の突然の病死に遭遇した教頭の事例から— (共) 日本教育心理学会第57回総会 (新潟コンベンションセンター) 2015年 8月

学校危機時の緊急支援に携わった臨床心理士の体験の検討(1)—校内での生徒の転落事故死の事例— (共) 日本心理臨床学会第35回秋季大会 (パシフィコ横浜) 2015年 9月

学校危機時の緊急支援に携わった臨床心理士の体験の検討(2)—対教師暴力の事例— (共) 日本心理臨床学会第35回秋季大会 (パシフィコ横浜) 2015年 9月

学校危機時の緊急支援に携わった臨床心理士の体験の検討(3)—下校途中の交通事故死の事例— (共) 日本心理臨床学会第35回秋季大会 (パシフィコ横浜) 2015年 9月

<その他> (翻訳・資料・その他)

<シンポジウム> 学校危機時の養護教諭の役割をめぐって—生徒の交通事故死を経験した3つの事例から— (共) 日本学校心理学会第17回大会 (大阪教育大学) 2015年 7月

岩佐宣明

<論文>

日本のヒト胚政策における〈人間の尊厳〉概念に関する一考察 『名古屋大学哲学論集』第12号 2015年 20-28
4月

個性と理性—キャラ化する人間とデカルトの『中部哲学会年報』46号
合理主義 2015年 19-27
4月

遠藤哲也

〈論文〉

The accessory limb model: an alternative experimental system of limb regeneration (共) Methods Mol. Biol. (1290巻) 2015年 101-113
3月

Skeletal Callus Formation is a Nerve-independent Regenerative Response to Limb Amputation in Mice and Xenopus (共) Regeneration (2巻, 4号) 2015年 202-216
8月

河合泰弘

〈著書〉

『諸本対校瑩山禅師『洞谷記』』(共) 東隆真(監修) 竹内弘道・河合泰弘・宮地清彦・菅原研州・石原成明(共) 春秋社 2015年 7月

『禅語にしたしむ一悟りの世界からのメッセージ』(共) 大法輪閣 2015年 11月

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈講演〉曹洞宗とは 三河仏壇振興協同組合主催 第6回仏教を勉強する会 (岡崎市図書館交流プラザ Libra) 2015年 2月

〈講演〉お釈迦さまって誰だろう 豊橋市仏教会主催「花まつり」(真宗大谷派豊橋別院) 2015年 4月

川口高風

〈論文〉

徳源寺の涅槃銅像について(単) 『愛知学院大学禅研究所紀要』第43号 2015年 63-97
3月

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(九・完)(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第3号 2015年 39-85
2月

名古屋の寺院に関する木版資料について(十三)(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第3号 2015年 1-38
2月

「禅宗」における仏骨奉迎の記事について(上)(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第4号 2015年 1-38
3月

明治期以降曹洞宗人物誌(六)(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第4号 2015年 39-60
3月

道元禅師の慶福寺蔵「二十五条衣」の再考—環の存在をめぐって—(単) 「傘松」第863号 2015年 20-24
8月

沢木興道老師の言葉(単) 「大法輪」第82巻8号 2015年 90-93
8月

「禅宗」における仏骨奉迎の記事について(下) 『愛知学院大学教養部紀要』第63巻第1号 2015年 13-45
9月

風外の禅—禅僧としての功績— (単)	『出雲の風外さん』 出雲文化伝承館	2015年 10月	18-22
「熱田物語—神話から心和へ—」 (DVD) 出演 (共)	名古屋熱田ライオンズクラブ	2015年 10月	
〈講演〉法持寺と白鳥御陵	宮宿会・名古屋学院大学	2015年 3月	
〈講演〉なぜ！熱田区に寺院が多いのか？	熱田区一新会・サイプレスガーデンホテル	2015年 7月	
〈講演〉曹洞宗の絡子について	平成27年度曹洞宗愛知県三宗務所合同現職研修会	2015年 9月	
〈講演〉風外の禅—禅僧としての功績—	出雲市平田本陣記念館	2015年 11月	

北田豊治

〈論文〉 NCAA Division I におけるバレーボールゲームに関する研究 (共)	『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第4号	2015年 3月	63-68
「教養セミナー」のあり方と「21世紀の教養と教養教育」について (共)	『愛知学院大学教養部紀要』第63巻第1号	2015年 9月	27-39

北村伊都子

〈論文〉 The associations between smoking habits and serum triglyceride or hemoglobin A1c levels differ according to visceral fat accumulation (共)	Journal of Epidemiology	in press	doi:10.2188/jea.JE20150086
---	-------------------------	----------	----------------------------

小出龍郎

〈論文〉 門脈合併切除の手技と意義 — R0切除を目指して— (共)	臨床外科 第70巻(1)	2015年 1月	46-52
「学士力」に対する意識の変化II —入学時と卒業時のパネル調査による検討の比較—	総合政策研究 第17巻(2)	2015年 3月	1-12
「教養セミナー」のあり方と 「21世紀の教養と教養教育」 について (共)	教養部紀要 第63巻(1)	2015年 9月	27-39
〈その他〉(翻訳・資料・その他) 一般要望演題 4	第25回 日本健康医学会総会 (座長) (愛知医科大学)	2015年 11月21日	

小林秀一

<論文>

「教養セミナー」のあり方と「21世紀の教養と教養教育」において (共) 『愛知学院大学教養部紀要』第63巻第1号 2015年 27-39
9月

近藤 浩

<学会発表>

Our Mutual Friend における父子の和解 (単) 日本英文学会中部支部 2015年
第67回大会 10月
(名古屋工業大学)

境田雅章

<論文>

「教養セミナー」のあり方と「21世紀の教養と教養教育」について (共) 『愛知学院大学教養部紀要』第63巻第1号 2015年 27-39
9月

柴田哲雄

<論文>

習近平の福建省在任時期における外交政策の原像と対台湾政策 (単) 中国研究月報第69巻第7号 2015年 30-39
7月

習仲勲の政治改革の姿勢、並びにその背景にある前半生の経歴 (単) 現代中国研究第34号 2015年 66-89
3月

<その他> (翻訳・資料・その他)

<コラム> 中国の脅威に対処～市場経済化を後押しし民主化を促せ 朝日新聞のウェブサイト ※英語版もあり 2015年 6月

<コラム> 戦後70年談話「心からのお詫び」と中国とロシアへの牽制を盛り込め 同上 2015年 8月

<コメント> 特報「迷走する『美しい国』」 中日新聞 (朝刊) 2015年 8月

清水義和

<著書>

『メディアと芸術』(共) 文化書房博文社 2015年 総頁数
4月 167

『寺山修司研究』第8号 (共) 文化書房博文社 2015年 166-179
4月

<論文>

吉行淳之介のオイディプス・コンプレックスと村上春樹のアンチ・オイディプス (単) 『愛知学院大学語研紀要』第40巻第1号 2015年 19-48
1月

夏目漱石のラファエロ前派と村上春樹訳R、チャンドラー作『ロング・グッドバイの迷路』(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第3号 2015年 45-72
2月

ナゴヤのメディア・アーツ (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第4号 2015年 19-42
3月

ハイブリッドな俳人：馬場駿吉—映像メディア論（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第63巻第1号	2015年 9月	1-26
〈その他〉（翻訳・資料・その他）			
〈口頭発表〉知っていそうで知らないシェイクスピア（単）	毎日文化センター （名古屋）	2015年 4月13日	
〈口頭発表〉寺山修司を巡る作家たち—馬場駿吉と亀山郁夫（単）	国際寺山修司学会第19回春季大会 （立正大学・東京）	2015年 5月23日	
〈口頭発表〉星の王子さまをめぐる（単）	中日文化センター （名古屋）	2015年 10月10日	
〈口頭発表〉寺山修司から馬場駿吉（単）	毎日文化センター （名古屋）	2015年 10月17日	
〈劇評〉星の女子さん「カナドール～DOLL三部作」	ナゴヤ劇場ジャーナル77号	2015年 4月5日	
〈劇評〉劇団B級遊撃隊「Sの背骨」	ナゴヤ劇場ジャーナル78号	2015年 5月5日	
〈劇評〉伊藤敬プロデュース「ていんさぐの花」	ナゴヤ劇場ジャーナル79号	2015年 6月5日	
〈劇評〉クセック ACT「アラバールからの“愛の手紙”」	ナゴヤ劇場ジャーナル80号	2015年 7月5日	
〈劇評〉原プロジェクト「姥捨・春夏秋冬」	ナゴヤ劇場ジャーナル81号	2015年 8月5日	
〈劇評〉あおきりみかん「だるい女」	ナゴヤ劇場ジャーナル82号	2015年 9月5日	
〈劇評〉刈馬演劇設計社「7メートルと9メートル～花の教室」	ナゴヤ劇場ジャーナル83号	2015年 10月5日	
〈劇評〉DORAMAYAHONPO「南町根岸肥前守日記～俄雨」	ナゴヤ劇場ジャーナル84号	2015年 11月5日	
〈劇評〉竹元まき子・朗読公演「曾根崎心中」	ナゴヤ劇場ジャーナル85号	2015年 12月5日	

城 貞晴

〈学会発表〉			
AFM Investigation on Surface Aspects of a kind of PDA Single Crystals Obtained by PVT Technique（共）	11th International Conference on Advanced Polymers via Macromolecular Engineering	2015年 10月	
紫外光照射による輸送気相法ジアセチレン結晶の表面形態変化（共）	第35回表面科学学術講演会 （つくば国際会議場）	2015年 12月	
輸送気相成長法で育成されるペンタセン結晶のモルフォロジー変化（単）	第76回応用物理学会秋季学術講演会 （名古屋国際会議場）	2015年 9月	

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈報告書〉準静的条件下で育成した高品質結晶の表面微細構造の実験的検証(単)	文部科学省 ナノテクノロジープラットフォーム事業 微細加工ナノプラットフォームコンソーシアム成果報告書	2015年 5月	F14TT 0014
---------------------------------------	--	-------------	---------------

菅さやか

〈著書〉

『心のしくみを考える—認知心理学研究の深化と広がり』(共)	北神慎司・林創(編) ナカニシヤ出版	2015年 3月	107-117
『エッセンシャルズ心理学—心理学的素養の学び』(共)	二宮克美・山本ちか・太幡直也・松岡弥玲・菅さやか(共) 福村出版	2015年 11月	17-23 章、 column 5, 17-23

〈学会発表〉

Comparison between subjectively perceived and objective consensus regarding prejudice in Japan (単)	The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. Long Beach, USA.	2015年 2月	ポスター発表
音声の抑揚が役割語理解に及ぼす影響の発達の比較(共)	日本発達心理学会第26回大会(東京大学)	2015年 3月	ポスター発表
説明経験が説明対象の実在性認知に与える影響—新奇な商品を用いた検討—(共)	日本心理学会第79回大会(名古屋国際会議場)	2015年 9月	ポスター発表
共有されたステレオタイプの認知が情報伝達に及ぼす影響(単)	日本社会心理学会第56回大会(東京女子大学)	2015年 10月	ポスター発表

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈研究会〉説明経験が新奇な商品の実在性認知に与える影響(単)	第13回東北心理学研究会(東北大学)	2015年 11月	口頭発表
〈競争的資金〉日本人大学生の諸外国に対する態度と第二外国語学習との関連性の検討(共)	菅さやか・中村綾 平成27年度市原国際奨学財団研究助成	2015年 4月	

菅原研州

〈著書〉

『諸本対校瑩山禅師『洞谷記』』(共)	東隆真(監修) 竹内弘道・河合泰弘・宮地清彦・菅原研州・石原成明(共) 春秋社	2015年 7月	71-92
『禅語にしたしむ一悟りの世界からのメッセージ』(共)	大法輪閣	2015年 11月	42-44、 98-100、 220-222、 228-230

〈論文〉

『仏祖正伝記』の研究(単)	『愛知学院大学禅研究所紀要』第43号	2015年 3月	41-61
---------------	--------------------	-------------	-------

鈴木正三と大内青巒の排耶論について (単・ハンドアウト)	『比較思想研究』第41号	2015年 3月	155-158
江戸時代初期の『正法眼蔵』研究について (単)	『禪學研究』第93号	2015年 3月	81-103
金子白夢牧師『體驗の宗教』に見える道元禪師觀 (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第63巻第1号	2015年 9月	75-86
道元禪師成仏論と国土觀 (単)	『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要 (第16回)』	2015年 10月	1-6
〈学会発表〉			
大内青巒居士の禪思想	東海印度学仏教学会第61回学術大会	2015年 7月11日	
金子白夢牧師の禪思想	日本宗教学会第74回学術大会	2015年 9月5日	
乙堂喚丑『正法眼蔵続絃講議』の修証觀論争	日本印度学仏教学会第66回学術大会	2015年 9月19日	
道元禪師成仏論の法孫への影響について	曹洞宗総合研究センター第17回学術大会	2015年 10月29日	
〈その他〉(翻訳・資料・その他)			
面山瑞方禪師に見る峨山派意識について(単)	『永福会報』平成27年度版	2015年 3月31日	2-5
坐禪の仕方(単)	『大法輪』第82巻第8号	2015年 8月1日	137-141
仏教者・研究者・活動者が選ぶ 今年の3冊 2015	週刊仏教タイムス第2651号	2015年 12月10日	5
〈翻刻・現代語訳〉峨山和尚法語(共)	『跳龍 二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌特 別号別冊』大本山總持寺	2015年 10月1日	11-14、 17-25、 68-78
〈講演〉太祖瑩山紹瑾禪師の伝記とその教え	曹洞宗東京都第4教区青年会研修会	2015年 3月30日	
〈講演〉峨山韶碩禪師と月泉良印禪師につい て	曹洞宗秋田県宗務所布教協議会	2015年 5月12日	
〈講演〉曹洞宗の諸喪儀法について	曹洞宗佐賀県宗務所現職研修会	2015年 6月7・8 日	
〈講演〉曹洞宗の檀信徒喪儀法について	曹洞宗長野県第一宗務所布教師会	2015年 11月19日	
〈講演〉「発願式」について	曹洞宗佐賀県宗務所現職研修会	2015年 6月8日	
〈講演〉「発願式」について	曹洞宗富山県宗務所現職研修会	2015年 7月24日	
〈講演〉「発願式」について	曹洞宗新潟県第1宗務所現職研修会	2015年 9月7日	

〈講演〉「発願式」について	曹洞宗愛知県宗務所合同現職研修会	2015年 9月8日
〈講演〉「発願式」について	曹洞宗神奈川県第1宗務所現職研修会	2015年 10月30日
〈講演〉法話の会（春）「道元禪師に学ぶ」（4回）	曹洞宗大本山永平寺名古屋別院	2015年 3月7・ 14・21・28 日
〈講演〉法話の会（秋）「道元禪師に学ぶ」（4回）	曹洞宗大本山永平寺名古屋別院	2015年 9月5・ 12・19・26 日

高田正義

〈論文〉

女子ラグビーの現状と今後の課題— Japan Women's Sevens 2014 出場チームへのアンケート結果より— (共)	日本ラグビー学会ラグビーフォーラム第8号	2015年 3月	65-71
U17ラグビー日本代表選手におけるメンタルコーチング短期介入の効果について (単)	スポーツパフォーマンス研究 Vol. 7	2015年 4月	77-89
「教養セミナー」のあり方と「21世紀の教養と教養教育」について (共)	『愛知学院大学教養部紀要』第63巻第1号	2015年 9月	27-39

〈学会発表〉

愛知県ラグビーフットボール協会における女子ラグビー強化の取り組み—国民体育大会での正式競技としての導入に向けて— (共)	日本ラグビー学会第7回大会 (関西大学)	2015年 3月	抄録19
--	----------------------	-------------	------

ダニエル・ダンクリー (Daniel Dunkley)

〈論文〉

Language Assessment Literacy in Theory and Practice (単)	『愛知学院大学語研紀要』第40巻第1号	2015年 1月	103-117
---	---------------------	-------------	---------

〈学会発表〉

Large Class Freshman English Communication: our strategies. Organizer and presenter (共)	Presentation at Nagoya chapter of JALT (The Japan Association for Language Teaching) 6th December 2015	2015年 12月	
---	--	--------------	--

都築正喜

〈論文〉

日本英語音声学会の20年と学界貢献(1)	日本英語音声学会中部支部「学術論文集」第4号	2015年 11月	83-95
----------------------	------------------------	--------------	-------

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈講演〉知っておもしろい英語のリズムとイントネーション	日本学術振興会：「ひらめき・ときめきサイエンス (目指せ発音マスター)」(宮崎公立大学)	2015年 8月	
-----------------------------	--	-------------	--

〈記念講演〉日本英語音声学会20年の歩み	日本英語音声学会創立20周年記念、第20回全国大会 (呉工業高等専門学校)	2015年 11月	
〈口頭発表〉日本英語音声学会20年の実績：理論研究と実践	日本英語音声学会九州沖縄四国支部第14回研究大会・シンポジウム (高知大学)	2015年 12月	

中村 綾

〈その他〉(翻訳・資料・その他)			
〈講演〉江戸時代の中国語学習ブーム—日本近世小説と中国白話小説(単)	東洋文化振興会	2015年 7月	
〈発表〉『新斎夜語』第七話典拠考(単)	京都近世小説研究会	2015年 8月	

藤田淳志

〈学会発表〉			
〈口頭発表〉エイズ・アクティビズムから結婚の平等運動へ—アメリカ演劇作品を通して	アメリカ学会第49回年次大会 部会 E 『LGBTQ とアメリカ』 (国際基督教大学)	2015年 6月	
〈その他〉(翻訳・資料・その他)			
〈講演〉アメリカにおけるセクシュアルマイノリティ・アクティビズムとアートの関係	CafeLGBT + presents たたかうアート 公開研究会 Vol. 4 (大阪市立大学 梅田サテライト)	2015年 8月	
ACT UP & TALK OUT 「怒りを力に—ACT UP の歴史」上映会&トーク 出演	ロフトプラスワンウエスト (大阪市) カゼノイチ (愛知県安城市)	2015年 10月 2015年 11月	

堀田敏幸

〈著書〉			
『ベケット・放浪の魂』(単)	沖積舎	2015年 9月	全275
〈論文〉			
ベケット・迷宮の庭(単)	『愛知学院大学語研紀要』第40巻第1号	2015年 1月	77-101
ベケット・不在への挑戦(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第3号	2015年 2月	1-18
ベケット・夜のぬぐら(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第4号	2015年 3月	1-18

松井真一

〈学会発表〉			
〈口頭発表〉育児期有配偶女性に対する実親からの育児資源の分配(単)	科研費研究会 (研究課題番号：25380358) (南山大学)	2015年 10月	

〈その他〉(翻訳・資料・その他)			
〈講演〉ライフスタイルをみなおそう ～仕事も家庭も子育ても～	岐阜市ハートフルフェスタ (ハートフルスクエアG)	2015年 1月	
男女共同参画の実現とワーク・ライフ・バランス	岐阜市管理職者研修 (岐阜市役所)	2015年 5月	
ワーク・ライフ・バランス実現のための相互 理解—伝わるコミュニケーションとは—	半田市男女共同参画の日 特別講演会 (クラシティ半田)	2015年 6月	

溝口 明

〈著書〉

Allatostropin; Allatostatin-A; Allatostatin-C. <i>In:</i> Handbook of Hormones: Comparative Endocrinology for Basic and Clinical Research (共)	Elsevier.	2015年 8月	385- 386, 412- 413, 414-415
--	-----------	-------------	---

〈論文〉

Positive feedback regulation of prothoracicotropic hormone secretion by ecdysteroid—A mechanism that determines the timing of metamorphosis (共)	Insect Biochemistry and Molecular Biology, 58	2015年 1月	39-45
Orcokinin-like immunoreactivity in central neurons innervating the salivary glands and hindgut of ixodid ticks (共)	Cell and Tissue Research, 306	2015年 3月	209-222
Isoform-specific expression of the neuropeptide orcokinin in <i>Drosophila melanogaster</i> (共)	Peptides, 68	2015年 6月	50-57
Disruption of diapause induction by TALEN- based gene mutagenesis in relation to a unique neuropeptide signaling pathway in <i>Bombyx</i> (共)	Scientific Reports, 5	2015年 10月	15566
〈総説〉蛹休眠の調節機構—ヨトウガの蛹休 眠を中心に— (単)	蚕糸・昆虫バイオテック 84(2)	2015年 8月	135-143

文 嬉眞

〈論文〉

日本の大学機関における「韓国語学習」 —愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に 関するアンケート結果とその分析(2)— (共)	『愛知学院大学教養部紀要』第62巻第3号	2015年 2月	19-43
---	----------------------	-------------	-------

八谷芳樹

〈論文〉

教職課程における大学教員と職員の役割分担 から協働への試み—「教職実践演習」実施に 向けた取組 (共)	「教師教育研究」第28号 全国私立大学教職課程連絡協議会	2015年 3月	133-143
---	---------------------------------	-------------	---------

〈その他〉(翻訳・資料・その他)			
〈講師〉教員人材銀行登録者資質向上事業高校講座 「教員の心得と服務」	公益法人愛知県教育・スポーツ振興財団主催 (愛知県教育会館)	2015年 1月	
〈講師〉学校事務研究会第3回研修講座	海部地区公立小中学校学校事務研究会主催 (海部教育事務所)	2015年 2月	
〈講師〉平成27年度愛知県城山教育研究会総会記念講演 「学びのパラダイムが変わる～教師生活50年を生かされて」	愛知県総合教育センター	2015年 5月	
愛知県学校経営講座 フォローアップ研修会 (企画・運営・講師)	ルブラ王山 (名古屋)	2015年 3月	
〈講師〉日本教育会愛知県支部主催 第14回愛知県学校経営講座 (企画・運営・講師)	ルブラ王山 (名古屋)	2015年 11月	

山口拓史

〈著書〉			
『ハンディ教育六法2015年版』(共)	北樹出版	2015年 4月	231-327
『名古屋教育史III 名古屋の発展と新しい教育』(共)	名古屋市教育委員会	2015年 3月	226-253、 352-369、 420-445、 532-545

山口 均

〈その他〉(翻訳・資料・その他)			
〈口頭発表〉「映画の中のエリオット」(シンポジウム「引用するエリオット、引用されるエリオット」)	日本T.S.エリオット協会第28回大会 (愛知学院大学)	2015年 11月7日	

吉村正宏

〈論文〉			
Asymmetric NaBH_4 1,4-Reduction of C3-Substituted 2-Propenoates Catalyzed by a Diamidine Cobalt Complex (共)	ChemCatChem, Wiley-VCH, Vol. 7	2015年 4月	1547- 1550
Mechanism of Asymmetric Hydrogenation of Aromatic Ketones Catalyzed by a Combined System of $\text{Ru}(\pi\text{-CH}_2\text{C}(\text{CH}_3)\text{CH}_2)_2(\text{cod})$ and the Chiral $\text{sp}^2\text{N}/\text{sp}^3\text{NH}$ Hybrid Linear N_4 Ligand Ph-BINAN-H-Py (共)	J. Am. Chem. Soc., American Chemical Society, Vol. 137	2015年 6月	8138- 8149
分子触媒の開発・応用・機構解明―ドナー・アクセプター 2官能性触媒の展開―(共)	有機合成化学協会誌, Vol. 73	2015年 7月	690-700

〈学会発表〉 Desymmetric Hydrogenation of a <i>meso</i> -Cyclic Acid Anhydride toward Biotin Synthesis (共)	2015環太平洋国際化学会議 (PACIFICHEM 2015) (アメリカ、ハワイ)	2015年 12月	ポス ター発 表
〈その他〉(翻訳・資料・その他) 十字路「立体相補性」(単)	有機合成化学協会誌, Vol. 73	2015年 7月	762

ジェーン・ライトバーン (Jane A. Lightburn)

〈論文〉 Hayao Miyazaki's <i>The Wind Rises</i> : Oneiric Aspects of Character Development through Narrative Dream Sequence	The Journal of Aichi Gakuin Univ. Humanities & Sciences. Vol. 62 No. 3	2015年 2月	73-81
〈学会発表〉 "Large Class Freshman English Communication: Our Strategies"	Japan Association of Language Teachers: Nagoya. (International Center; 3rd fl.1:30-4pm)	2015年 12月	JALT NAGOYA

鷺嶽正道

〈論文〉 Multimodal Cooperation: Verbal-visual Relations in Introductory Textbooks in Humanities and Science in English (単)	『機能言語学研究』第8巻	2015年 6月	77-98
〈学会発表〉 〈口頭発表〉 Determining Relative Status between Language and Visual Components in Multimodal Text (単)	The 42nd International Systemic Functional Congress (ドイツ、アーヘン)	2015年 7月	
〈口頭発表〉 大学初年次向け教科書のマルチ モーダル研究 (単)	愛知学院大学語学研究所平成27年度研究 発表会 (愛知学院大学)	2015年 11月	
〈その他〉(翻訳・資料・その他) 〈講演〉 オーストラリアの社会と文化 (単)	愛知学院大学教養教育研究会平成27年度 秋学期講演会 (愛知学院大学)	2015年 12月	

『教養部紀要』第63巻総目次

第1号（通巻第185号）平成27年9月発行

〈論文〉

- 清水 義 和：ハイブリッドな俳人：馬場駿吉——映像メディア論——……………（ 1 ）
Yoshikazu SHIMIZU : Hybrid Haiku Poet; Shunkichi Baba—On Picture Media Theory
- 菅 原 研 州：金子白夢牧師『体験の宗教』に見える道元禅師観……………（ 86 ）
Kenshū SUGAWARA : Study about Dogen Reverend in Kaneko Hakumu Minister Work “Religion of an Experience”
- 高田正義・青山健太・北田豊治・小林秀一・境田雅章・小出龍郎：
「教養セミナー」のあり方と「21世紀の教養と教養教育」について……………（ 27 ）
Masayoshi TAKADA, Kenta AOYAMA, Toyoharu KITADA, Hidekazu KOBAYASHI,
Masaki SAKAIDA and Tatsuro KOIDE : Viewpoints for “First-Year Seminar” and “Liberal Arts and Education of
Liberal Arts in 21 Century”

〈資料〉

- 川 口 高 風：「禅宗」における仏骨奉迎の記事について(下)……………（ 74 ）
Kōhū KAWAGUCHI : On the Zenshu Journal Article Related to Welcoming Buddha’s Remains (2)

第2号（通巻第186号）平成28年1月発行

〈論文〉

- 井 上 知 則：「学習」から「学修」への転換についての基礎的考察（その1）
——高等教育関係答申での用例をとおして——……………（ 1 ）
Tomonori INOUE : The Basic Study of “Learning-gakunara” with Converting to Vanity “Learning-gakuosa” (I)
—Through the Reports of Councils Related to the Higher Education
- 上 原 宏 行：圧力下における反強誘電性液晶の相系列を決める因子……………（ 15 ）
Hiroyuki UEHARA : A Factor Determining the Phase Sequence of Antiferroelectric Liquid Crystal under Pressure
- 清水 義 和：馬場駿吉と天野天街——『地球空洞説』から『レミング』まで——……………（ 25 ）
Yoshikazu SHIMIZU : Hybrid Haiku Poet; Shunkichi Baba—On Picture Medea Theory
- 高田正義・青山健太・北田豊治・小林秀一・境田雅章・小出龍郎：
教養セミナーにおける学習満足感の要因分析……………（ 43 ）
Masayoshi TAKADA, Kenta AOYAMA, Toyoharu KITADA, Hidekazu KOBAYASHI,
Masaki SAKAIDA and Tatsuro KOIDE : Factor Analysis of the Feeling of Learning Satisfaction in First-Year Seminar

〈資料〉

- 川 口 高 風：真宗大谷派の機関誌における仏骨奉迎の記事について……………（122）
Kōhū KAWAGUCHI : On the Shinshu-Otani Journal Article Related to Welcoming Buddha’s Remains
- 川 口 高 風：明治期以降曹洞宗人物誌(七)……………（ 86 ）
Kōhū KAWAGUCHI : On Sōtō Sect Priests’ Lives and Works After the Meiji Era (7)
- Daniel DUNKLEY : Linguistics and Language Teaching at Georgetown University:
An Interview with Dr John Norris……………（ 57 ）

第3号（通巻第187号）平成28年3月発行

〈論文〉

- 清水 義 和：馬場駿吉の「身体論」と寺山修司のマリオネット『狂人教育』……………（ 1 ）
Yoshikazu SHIMIZU : Shunkichi Baba’s “Physical Idea” & Shuji Terayama’s Marionette Drama “Maniac Education”

〈資料〉

- 川 口 高 風：「教海一瀾」における仏骨奉迎の記事について……………（102）
Kōhū KAWAGUCHI : On the Kyōkaichiran Journal Article Related to Welcoming Buddha’s Remains
- 川 口 高 風：明治期以降曹洞宗人物誌(八)……………（ 50 ）
Kōhū KAWAGUCHI : On Sōtō Sect Priests’ Lives and Works After the Meiji Era (8)

執筆者紹介

清水 義和 (本学教授……………英語)
SHIMIZU Yoshikazu

川口 高風 (本学教授……………宗教学)
KAWAGUCHI Kōhū

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 福 山 悟 (副会長) 井 上 知 則

(会計) 高 田 正 義

北 村 伊 都 子 ※佐 々 木 真 清 水 義 和
菅 さ や か ※菅 原 研 州 ※清 忠 師
※中 村 綾 松 井 真 一 山 下 秀 康

※本号編集委員

編 集 後 記

今年度より全3号となったため、年度最終号となる『教養部紀要』第63巻第3号をお届けいたします。

本号には、お二人の先生から論文1編、資料2編をご投稿いただきました。また、例年通り本号には、教員各位の研究業績(2015年1月～12月)と、第63巻総目次を掲載しております。年度末のご多忙のところ、ご協力をいただいた先生方に、編集委員一同、心より御礼申し上げます。

発刊数が全4号から全3号になったことで、1号毎の掲載本数が増えると期待されましたが、事前のお願いが手薄だったためか、本号の掲載本数は斯様な結果となりました。編集の努力不足を痛感しております。来年度は、本紀要に様々な分野の研究成果が発表され、より一層充実するように祈念いたします。(菅原記)

平成28年3月18日 印刷
平成28年3月28日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢
教養部紀要第63巻
第3号 (通巻第187号)

編集責任者
福 山 悟

発行者 愛知学院大学
教養教育研究会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12
電話 〈0561〉 (73) 1111 (代表)

印刷所 株式会社 あるむ
電話 〈052〉 (332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.63 No.3
(Whole Number 187)

CONTENTS

Articles

Yoshikazu SHIMIZU : Shunkichi Baba's "Physical Idea" & Shuji Terayama's Marionette Drama "Maniac Education"
..... (1)

Materials

Kōhū KAWAGUCHI : On the Kyōkaichiran Journal Article Related to Welcoming Buddha's Remains..... (102)

Kōhū KAWAGUCHI : On Sōtō Sect Priests' Lives and Works After the Meiji Era (8) (50)

Achievements (2015) (103)

Vol. 63 The Total Contents..... (115)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2016